

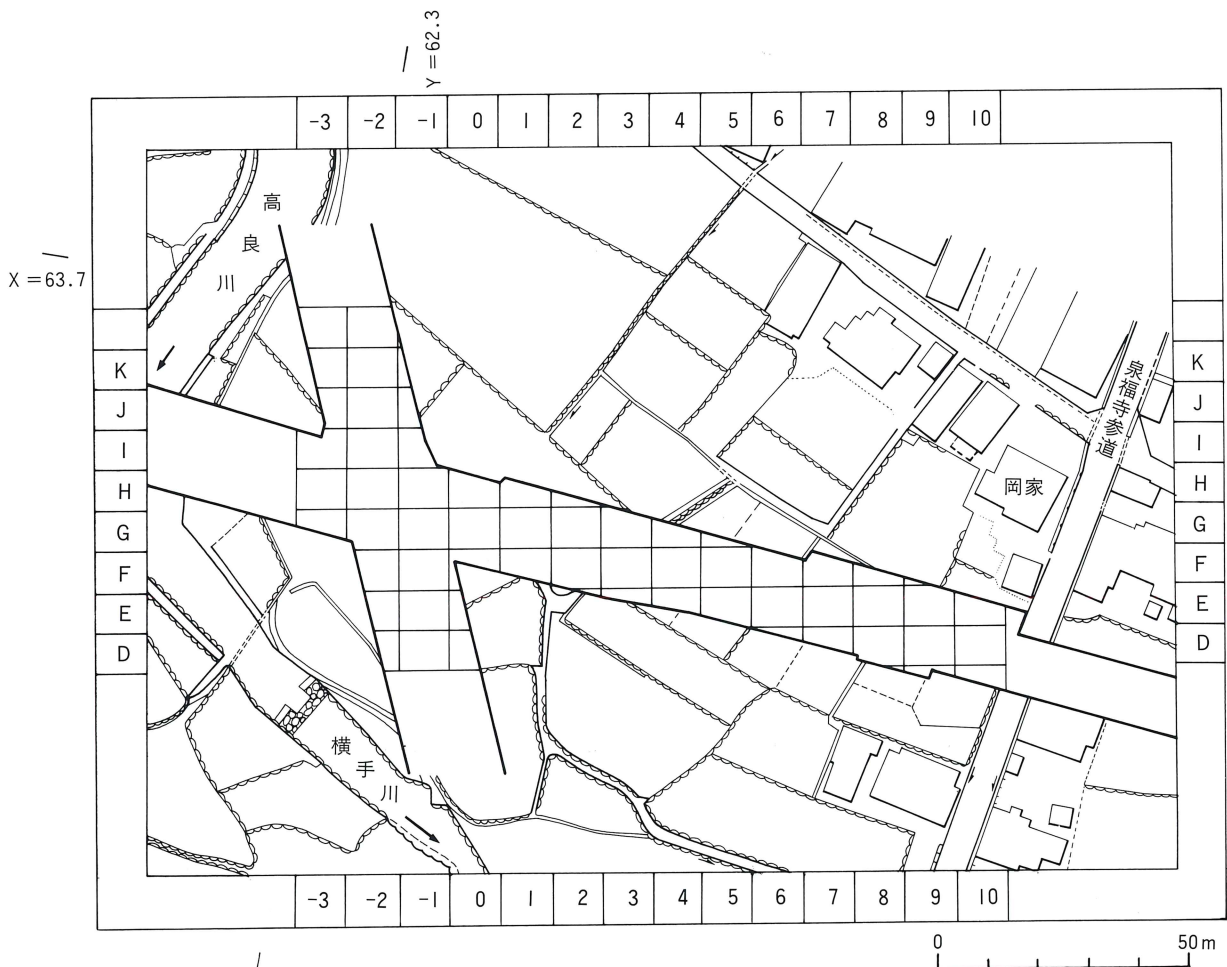
第4章 陽弓遺跡

1. 遺跡の概要

陽弓遺跡は横手遺跡群の中では最も東よりで、谷あいの中央部に近い河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は67m前後で、発掘面積は約3250㎡である。横手川の左岸で、支流高良川の左岸にあたる。発掘区の東端には、永和元年（1375）建立の名利泉福寺の門前の道が接している。このことから中世の関連する遺構・遺物の存在が予想され、事実試掘調査段階において輸入陶磁器・土師質土器が見つかった。更に中世の遺物に加えて縄文時代早期の遺物が多量に見つかる地点の存在も明らかになった。

発掘は、高良川沿いの発掘区西半分（0列の西側一帯・第39図）を1992年9月～12月中旬まで、東半分を1993年5月～7月に行った。まずバック・フォーを用いて表土を掘り下げた（第39図）。ただ、高良川沿いの河川改修予定部分は整地による堆積があり、バック・フォーで表土（特に耕作土）を除去した後手掘りによるトレンチ調査を行った。この段階で柱穴群や大形土坑・石垣遺構の存在が判り、再度バック・フォーで遺構検出面まで掘り下げた。その結果、石垣遺構の正面が南側から観察できるようになった。更に石垣の北側一帯に遺構が広く分布していた。

一方、高良川沿いに平行隣接する地域外で遺構・遺物の集中部分が発掘区内に点在しているが、遺物包含層や



第39図 陽弓遺跡の発掘区画図

遺構検出層の分布は全く異なる。これは、横手川によって形成された河岸段丘の変化にとむ段丘崖付近に立地することに原因がある。たとえば、G0区・G-1区・F0区・F-1区にまたがる大形で浅い皿状の旧河道は段丘崖直下に位置し、表土（耕作土）下に厚い覆土が堆積していた。この覆土中に12～13世紀を中心とする輸入磁器・瓦器・土師質土器等が多量に含まれる。

また旧河道近くの段丘崖上には（G1・G2・F3区）、縄文時代早期の無紋土器群が三日月形に分布していた。この土器群は水田耕作土・床土直下の地山風化土の中に包含されていた。

またF3区以東D8・E8まで中世の遺構群が広がる。このあたりは多くの遺構とともに莫大な鉄滓が回収されている。D8・E8以東は急激に中世の遺構・遺物が見られなくなり、変わって縄文時代早期・後期・晩期の遺物と近世の遺構・遺物が散見できる。

E4・F4～D9・E9付近においては、発掘当初には縄文時代後期—三万田式土器段階の遺構・遺物の存在が予想された。それは県教委の発掘に並行してD6・D7・C7付近で圃場整備に伴う国東町教育委員会による発掘調査が続行されており、一括廃棄された状況で三万田式土器段階の遺物が多量に回収されていたからである。しかし中世以降の改変によって削平され、細かい土器片や莫大な姫島産黒曜石を石材とする小型の石器・剥片・石核類が中世の遺物と混在して見つかったにすぎない。

（綿貫）

2. 縄文時代早期の遺物

(1) 土器

縄文時代早期の遺物はG1・G2・G3・F2・F3にまたがって、弧状（三ヶ月）形に分布する。土器の全ての例が無紋土器で占められ、有紋土器は含まれない。遺物の分布域は分布するところとしないところが明確であるため一括性は高いと言える（第40図）。以下では回収された土器を観察してみる。なお国広遺跡と同様の無文土器群であるため、国広遺跡での分類を用いる。

無文尖底深鉢形土器・第1類：器形は尖底と推定され、胴部上半から立ち上り口縁へ至るが、a・器壁が薄く口縁端部が尖り気味の例と（第43図14）、b・器壁が厚く口縁端部を丸く収める例（第42図10・第43図13）とに区分できる。国広遺跡の第1類との相違点は、国広例が胴部上半でやや内傾気味に弧状を呈しつつ立ち上るのに対し、陽弓例は胴部上半でそのまま立ち上る点にある。

無文尖底深鉢形土器・第2類：底部形態は尖底であろうが、詳らかでない。器形は胴部上半で内傾させた後、口縁端部を上方～上外方に向けて丸く収める（第41図1～4、第42図5～9、第43図12・15）。小形の例と大形の例があり、後者が多い。

無文尖底深鉢形土器・第3類：本類は国広遺跡では存在するが、陽弓遺跡においては見つかっていない。

無文尖底深鉢形土器・第4類：本類は国広遺跡では存在するが、陽弓遺跡においては見つかっていない。

無文尖底深鉢形土器・第5類：本類も国広遺跡では存在するが、陽弓遺跡においては見つかっていない。

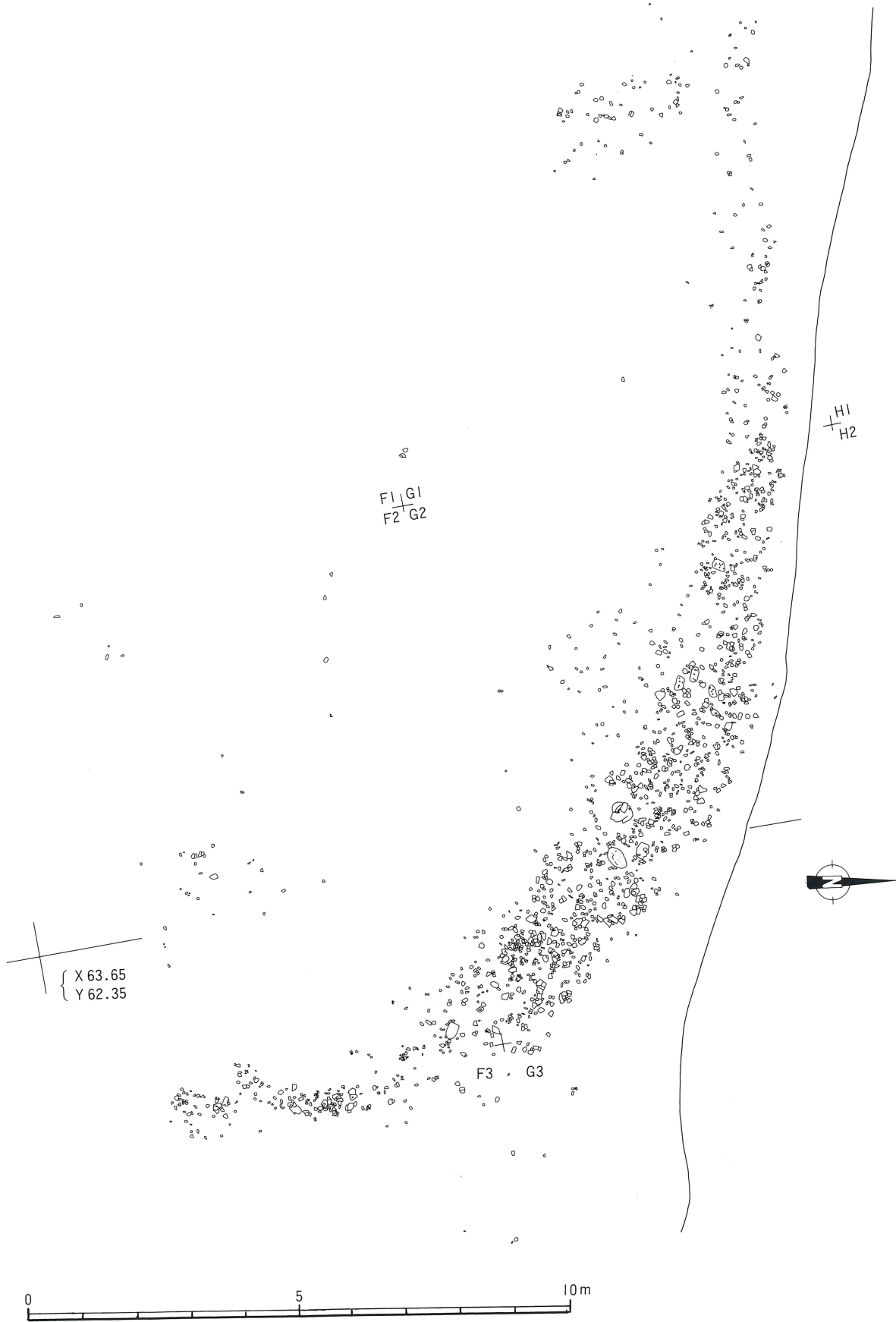
底部：底部は11例が見つかっており、それらは器壁の厚さで2種類に区分できる。これらのうち無文尖底深鉢形土器・第1類aの底部に相当する薄手の例（第43図16～19・21・22）と、無文尖底深鉢形土器第1類b・同第2類に相当する厚手の例（第41図1～4、第42図5～9、第42図10、第43図12、第43図13）がある。いずれも明確な尖底を呈するもので、丸底状のものではない。内面は「しぼり」状にたわんでいる。

調整：土器の内・外面に観察される調整は、指を使ったナデと圧痕に限られる。

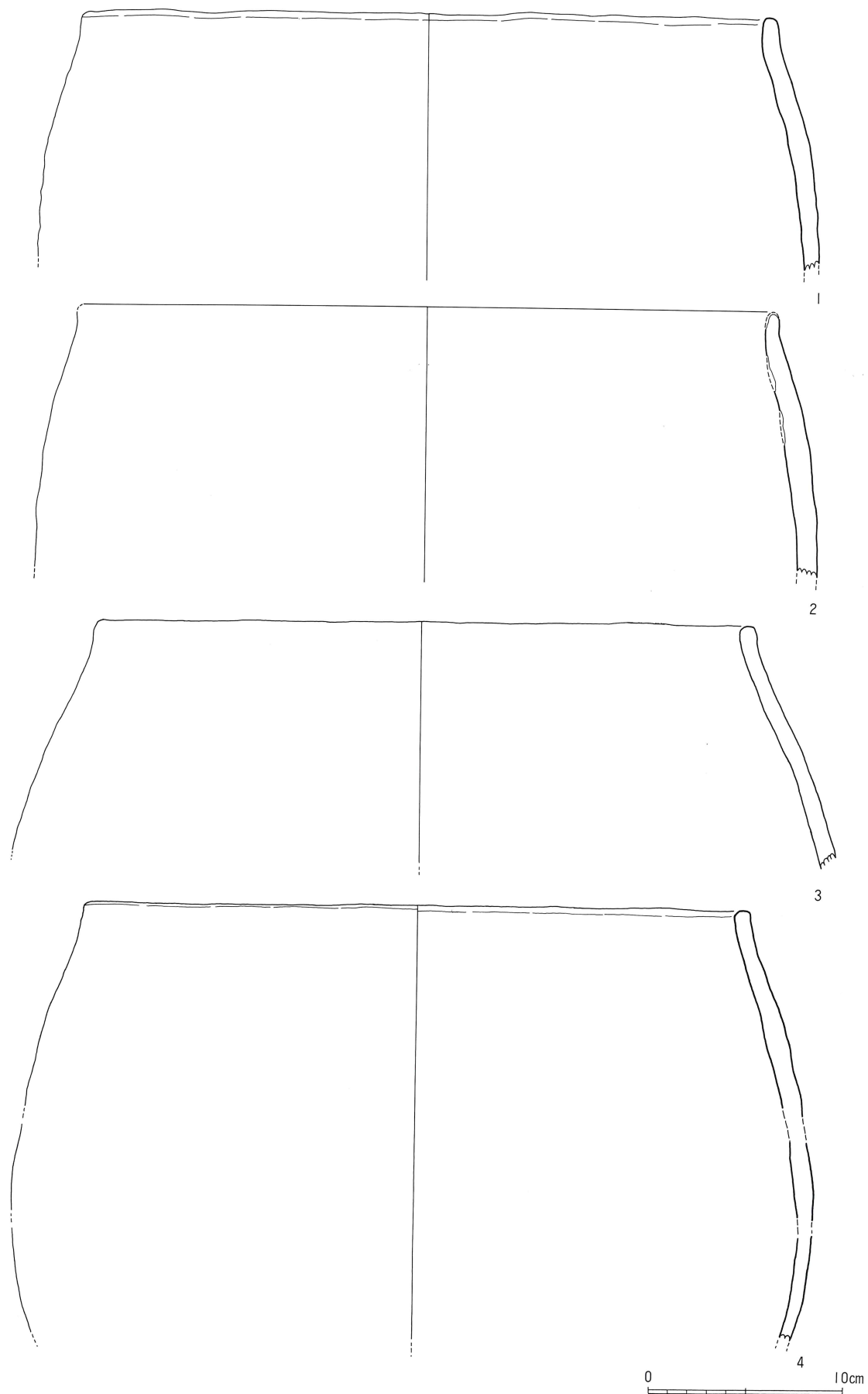
(2) 石器類

陽弓遺跡からは莫大な石器類が出土しているがそのほとんどが中世の包含層から回収されたものである。それらは、石器の石材や包含層中の土器型式から考えて、縄文時代後期の三万田式土器段階を中心とする時期に所属するものであろう。その中であって、縄文時代早期の無紋土器群が弧状に分布する包含層中には他時期の土器を一切含まない良好な一括集中部である。

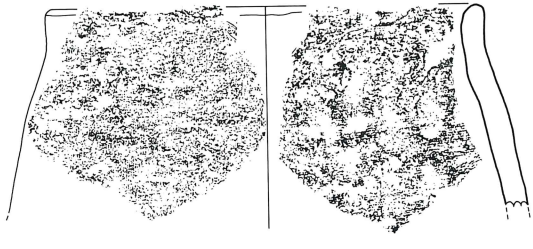
以上の経過もあって、土器の一括集中部分から回収された石器類も良好な共伴する遺物といえよう。ところが



第40図 陽弓遺跡の縄文時代早期遺物の分布図



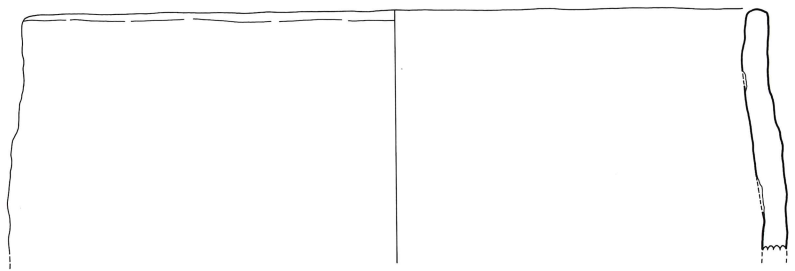
第41図 縄文時代早期の遺物（土器）



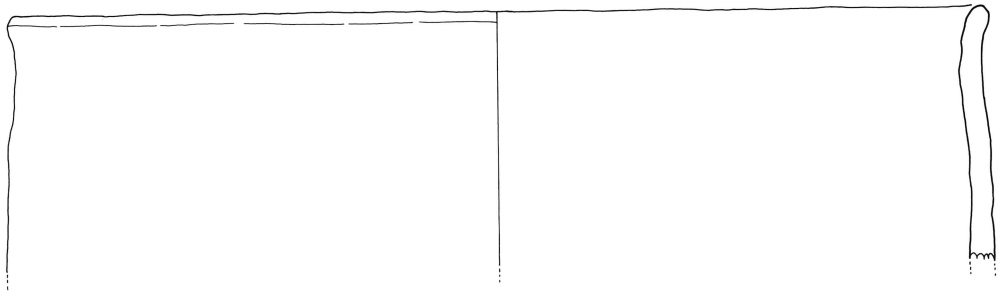
5



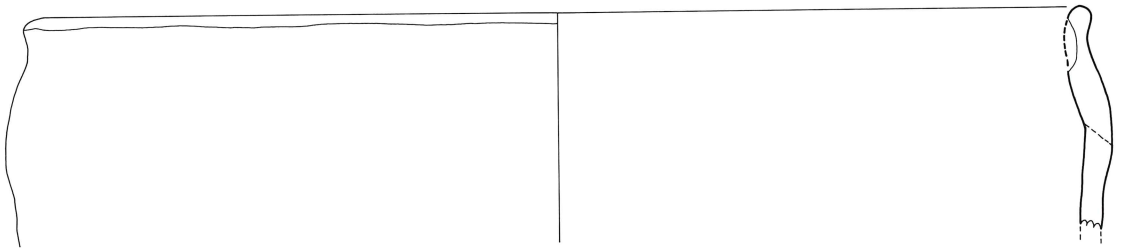
6



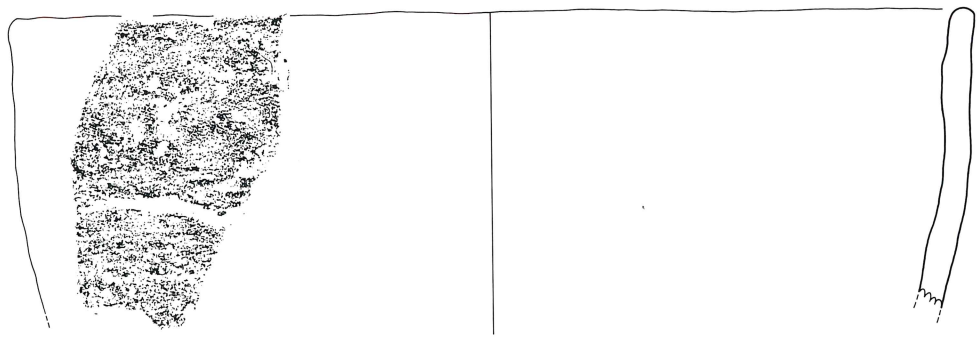
7



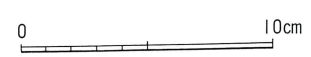
8



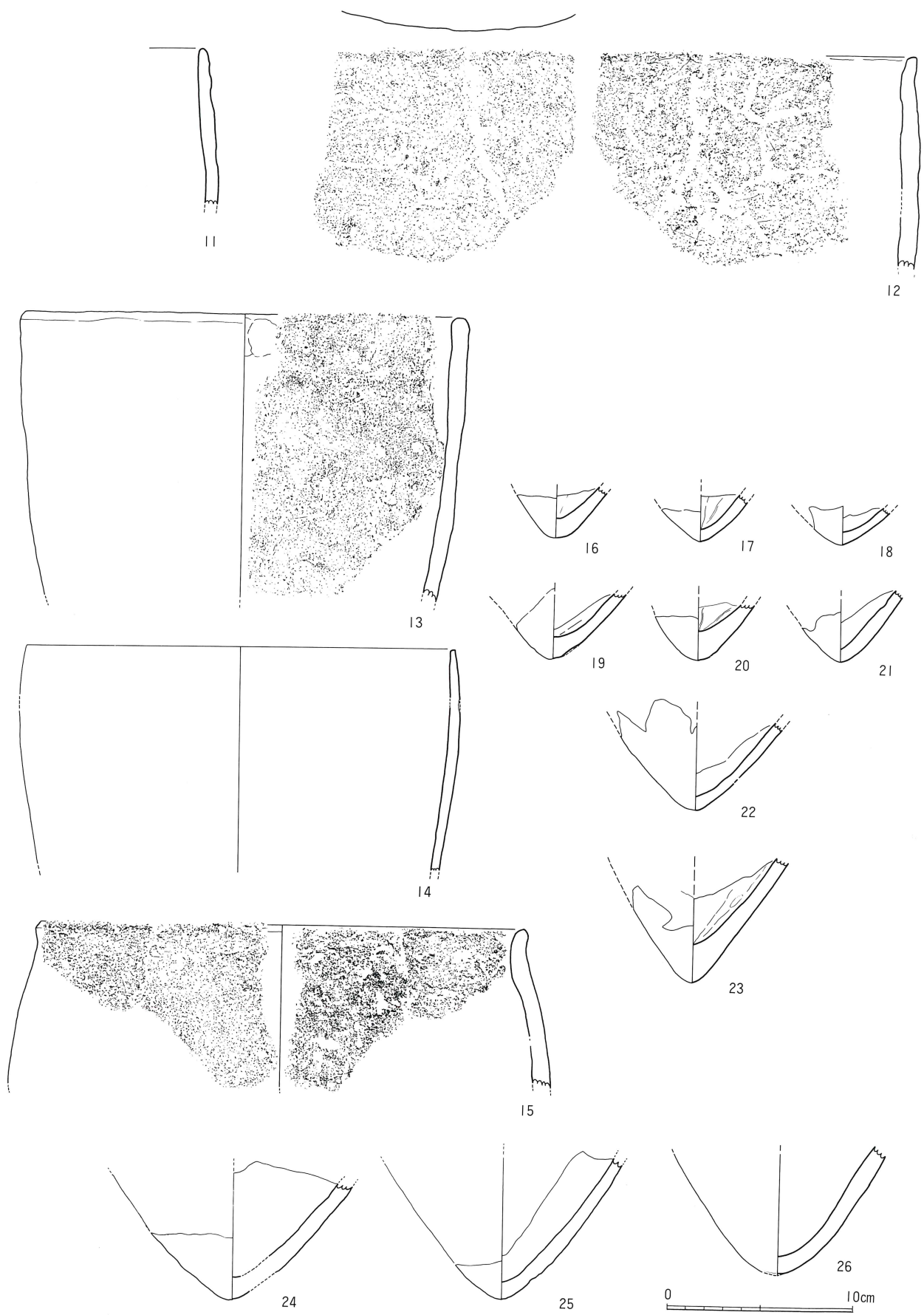
9



10



第42図 縄文時代早期の遺物（土器）



第43図 縄文時代早期の遺物（土器）

第10表 縄文時代早期の土器観察表

挿図番号	出土区	遺物番号	器種	胎土	色調		器面調整	法量(cm)			施文等
					内面	外面		口径	器高	底径	
41図1	G 2	120	深鉢	白色粒, 角閃石若干	暗灰色	暗灰色	ナデ~指頭圧痕	35.5			
41図2	F 3	17	深鉢	白色粒多, 金雲母若干	暗褐色	茶褐色	外面指頭圧痕, 内面ナデ	36.0			
41図3	G 2	260	深鉢	大形の粒, 角閃石多量	褐色	褐色	内・外面ナデ	34.0			
41図4	G 2	371・391	深鉢	白色粒	黄灰色	黄灰色	内・外面ナデ, 一部指頭圧痕	34.5			
42図5	G 1		深鉢	多量の白色粒, 金雲母微	茶褐色	暗褐色	外面指頭圧痕→ナデ, 内面指頭圧痕	17.5			
42図6	G 2	302	深鉢	多量の白色粒, 金雲母微	茶褐色	黒色	ナデ				
42図7	F 3	21	深鉢	白色粒, 金雲母微	茶褐色	褐色	内・外面指頭圧痕~ナデ	29.8			
42図8	G 2	8	深鉢	多量の白色粒	黄灰色	黄灰色	ナデ	39.0			
42図9	F 2	59	深鉢	白色・茶色の粒, 金雲母若干	暗灰色	暗灰色	指頭圧痕	42.5			
42図10	F 3	19	深鉢	白色粒多, 金雲母若干	茶褐色	暗灰色	外面指頭圧痕, 内面不明	38.5			
43図11	G 2	249	深鉢	石英粒若干	茶褐色	茶褐色	ナデ				
43図12	G 2	65	深鉢	白色粒多, 金雲母微量	赤銅色	茶褐色	内・外面ナデ, 指頭圧痕				
43図13	G 2	64	深鉢	白色粒多, 金雲母微量	暗灰色	暗灰色	外面不明, 内面指頭圧痕	24.0			
43図14	G 2	325	深鉢	若干の石英	暗灰色	暗灰色	内・外面ナデ	23.0			
43図15	G 2	107	深鉢	白色粒多量, 金雲母微量	茶褐色	茶褐色	外面ナデ, 内面指頭圧痕	26.5			
43図16	G 2	194	深鉢	白色粒	茶褐色	茶褐色	ナデ, 底部内面しぼり				
43図17	G 2	281	深鉢	白色粒若干	褐色	褐色	外面ナデ?・内面ナデ, 底部しぼり				
43図18	G 2	67	深鉢	多量の白色粒, 金雲母微量	褐色	赤褐色	ナデ, 底部内面しぼり				
43図19	G 2	159	深鉢	多量の白色粒, 金雲母微量	暗灰色	暗灰色	ナデ, 底部内面しぼり				
43図20	H0, H1		深鉢	白色粒	褐色	褐色	ナデ, 底部付近しぼり				
43図21	G 2	116	深鉢	白色粒・金雲母若干	茶褐色	茶褐色	ナデ				
43図22	H0, H1		深鉢	多量の白色粒	灰色	不明	内・外面ナデ?, 底部しぼり				
43図23	H0, H1		深鉢	多量の白色粒	黒色	茶褐色					
43図24	G 2	335	深鉢	小粒の白色粒, 金雲母若干	黄灰色	赤銅色	ナデ				
43図25	G 2	312	深鉢	白色粒多量, 金雲母若干	赤銅色	赤銅色	ナデ				
43図26	H0, H1		深鉢	白色粒, 長石多量, 金雲母微量	茶褐色	茶褐色	ナデ, 底部内面しぼり				

実際に回収された石器類は極めて少量で、莫大な数の土器と較べると、その差は歴然としており対照的である。石器類の総点数は15点で、全てガラス質安山岩を石材としている。また狩猟具としての石鏃・石器製作・剥片剥離の際の破片がないことが組成上の特徴である。

(3) まとめ

陽弓遺跡の縄文時代早期の遺物に関わる特徴をまとめると次のようになる。

- 636点の土器群は、全て指・手によるナデ調整を主体の無紋尖底深鉢形土器で占められ、押型紋土器や貝殻条痕調整無紋土器を含まない。この無紋土器の中には、押型紋土器様式に伴う例に類似する器形もある。
- 多量の土器が回収されたにも関わらず、石器類が異常に少ない。しかも破片がないことから陽弓遺跡に関しては石器製作・剥片剥離作業を行った形跡のないことがあげられる。

1の事柄は、洞穴・岩陰遺跡における層的事実と様式上の変化の方向性からみて、押型紋土器様式の直前に位置づけられることを示している。2については、通常の遺跡とは大きく異なり、土器一括廃棄場所であることの可能性も考えられよう。(綿貫)

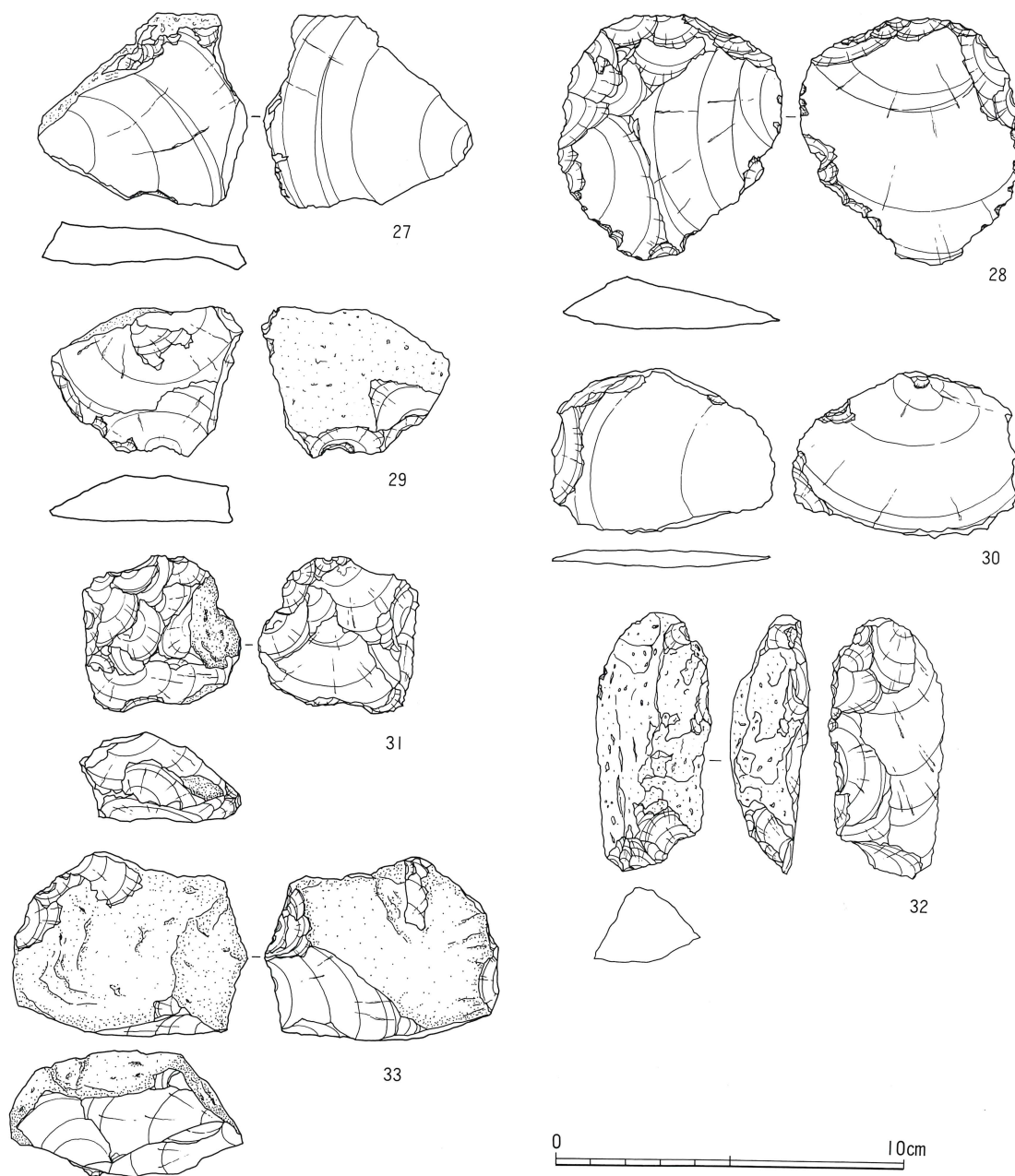
第11表 縄文時代早期の石器・石材組成表 (全てガラス質安山岩)

器種	石鏃	スクレイパー	楔形石器	石錐	RF・UF	その他	石核	剥片	数量 (総重量)
G 1区 (重量)								1 (32.9)	1点 (32.9)g
G 2区 (重量)					2 (38.4)		3 (224.0)	8 (102.4)	13点 (364.8)g
I 1区 (重量)		1 (63.6)							1点 (63.6)g
計		1 (63.6)			2 (38.4)		3 (224.0)	9 (135.3)	15点 (461.3)g

第12表 縄文時代早期の石器観察表

挿図番号	出土区・遺物番号	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材
第44図 27	G 2 区220	剥片	5.5	6.0	1.1	33.3	HG
〃 28	I - 1 区	スクレーパー	7.05	6.4	1.65	63.7	HG
〃 29	G 2 区 293	スクレーパー	4.3	5.4	1.25	33.2	HG
〃 30	G 2 区 110	剥片	4.75	6.4	0.6	17.3	HG
〃 31	G 2 区 204	石核	4.45	4.55	2.75	49.3	HG
〃 32	G 2 区 441	石核	7.4	3.3	2.15	4.49	HG
〃 33	G 2 区 155	石核	5.25	6.75	3.35	129.3	HG

※HG：ガラス質安山岩



第44図 縄文時代早期の遺物実測図

3. 縄文時代後期・晩期・弥生時代早期の遺物

(1) 土器

土器の大半は、三万田式土器に属するものが大半で、これに晩期(黒川式土器直前)の埋納深鉢形土器、黒川・上管生B式系カギ形(肥厚)口縁浅鉢の破片が若干出土している。埋納深鉢形土器を除くそれらは、中世に建物建設に伴う削平で本来の包含層から遊離し、中世包含層に混在していた。したがって小破片が多く、埋納深鉢形土器と若干の土器を除いて図示していない。大分県教育委員会の発掘区に隣接する国東町教育委員会が行った発掘区では、良好な包含層から一括廃棄された場所で大量の土器群(三万田式土器段階)が見つかっている。今回図示できなかった土器の多くは、それらと密接な関係をもった土器群であろう。

本遺跡においては上述のような三万田式土器段階の土器が主体となることが判っているが、この他、縄文時代晩期、弥生時代早期の土器群が若干出土している。

無紋深鉢形土器 第51図184・185は底部からゆるやかに立ち上り、胴部から口頸部が漸移的に上外方へ外反する。第51図185は口縁部が若干脂厚する。いずれも二枚貝による条痕調整を行っている。縄文時代晩期終末であろう。

浅鉢 第51図187は弱い内湾状態で立ち上り、口頸部が上外方に立ち上る例である。調整は2枚貝による条痕調整を内外面で行い、この後に軽い研磨を加えている。黒色磨研で縄文時代晩期終末～弥生時代早期にかけての土器であろう。

浅鉢 第51図187・188は頸部と胴部間、口縁端部がカギ形(肥厚)になる。内外面とも丁寧にみがかれた黒色研磨土器で、縄文時代晩期終末の黒川式土器群・上管生B式土器群に伴う浅鉢であろう。

有紋深鉢形土器 第51図189は底部から上外方に立ち上り、胴部上半で内湾ぎみに内傾する。ここから若干肥厚する口縁部が上方にのびる。口縁部の外面は文様帯となり、垂下する4条の沈線を中心としながらその左右に3～4条の弓形沈線を施している。この紋様から近畿地方の滋賀里1式土器系の影響も考えられる。なおこの土器は口縁部を上にして埋められ(第50図)掘り込みラインは明確ではないが、埋納深鉢(埋甕)であろう。

有紋深鉢形土器、第51図190・191は、条痕調整後に突帯を貼り付けて刻目を施した例である。第51図190は口縁部の傾きと、やや小ぶりであるところから浅鉢である可能性もある。これらは一条刻目突帯文の甕で、弥生時代早期に位置づけられる。これらの土器は中世遺物包含層中からの回収であり、そのセット関係は詳らかでない。したがって下黒野式土器段階であるのか、森本遺跡第1集中部から導き出された森本式土器段階に相当するのか、その位置づけは難しい。

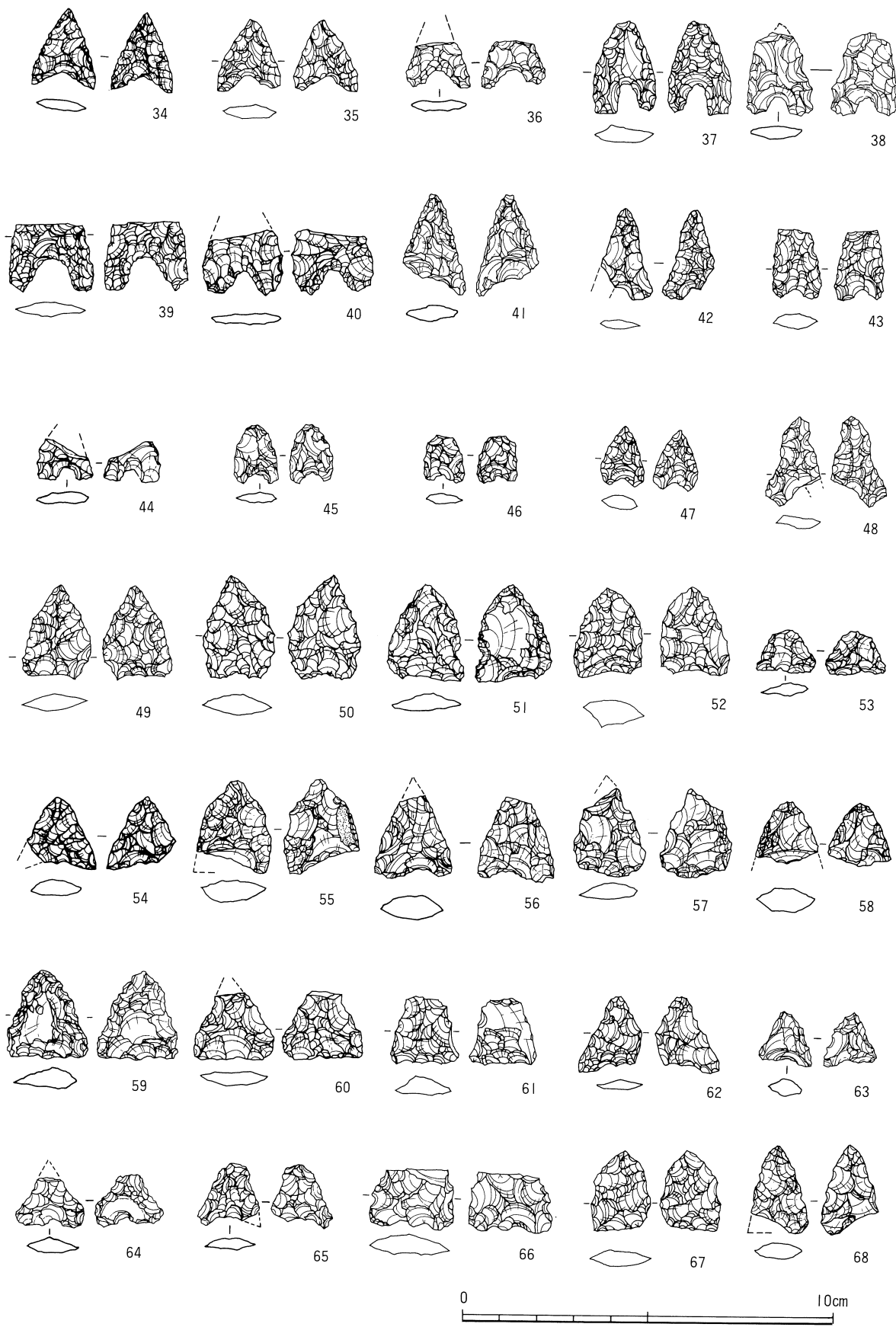
第13表 縄文時代後期の石器・石材組成表

器種	石 鏃	スクレイパー	楔形石器	石 錐	RF・UF	その他	石 核	剥片・碎片	総重量(g)	百分率(%)
石材										
姫島産黒曜石	166	31	19	18	208	1	178(3)	4584(42)	12,954.3	90.89
サヌカイト	31	1	24	1	4		8	373	1,050.1	7.36
ガラス質安山岩	1		2				2	1	115.0	1.57
黒色黒曜石	1							5	15.8	0.11
チャート	1							1	7.1	0.04
計	200	32	45	19	212	1	188	4964	14,142.3	
	磨製石斧	打製石斧								
	6	2								

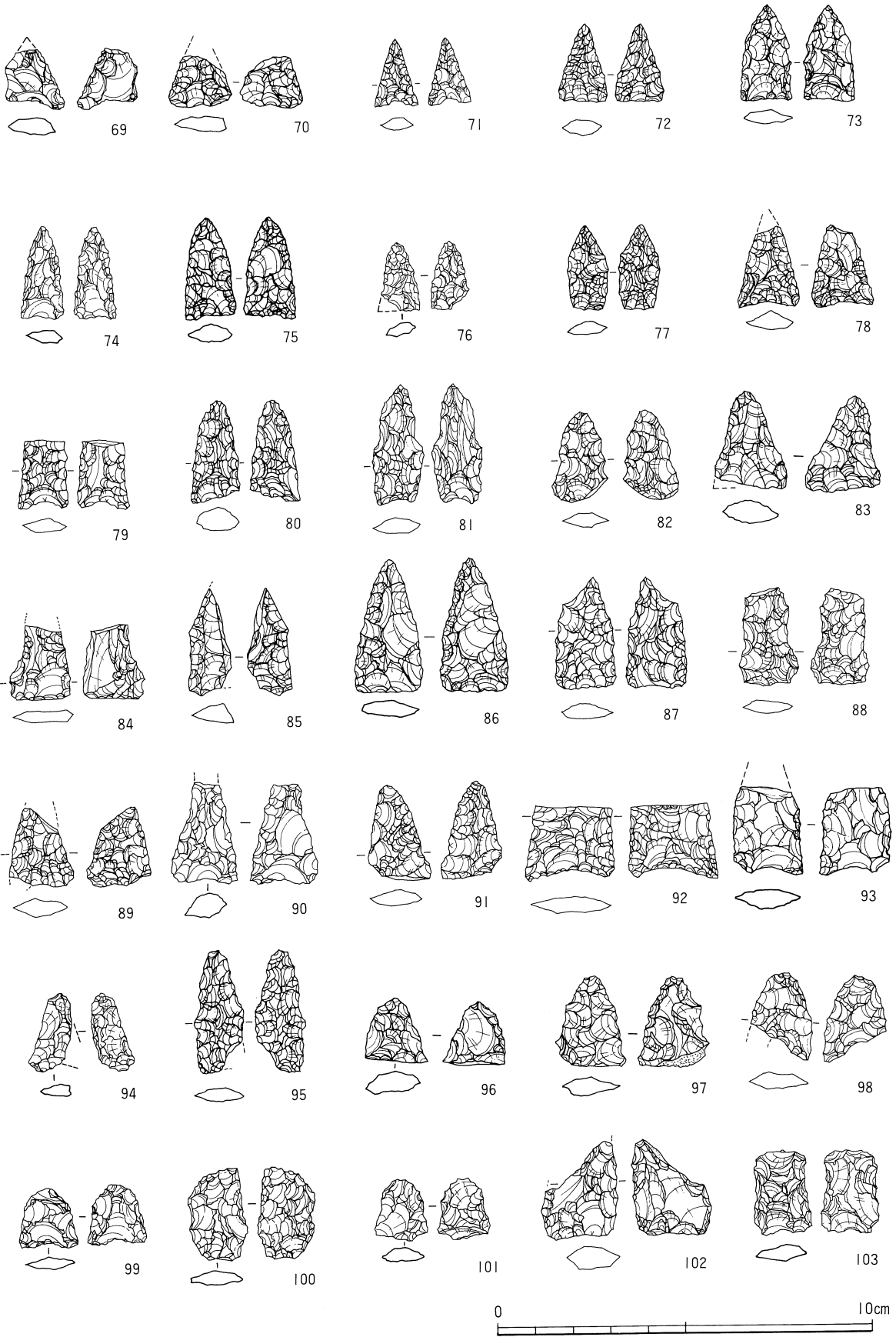
註 RF:二次加工する剥片 百分率(%)は重量からの割合である。

UF:使用痕ある剥片

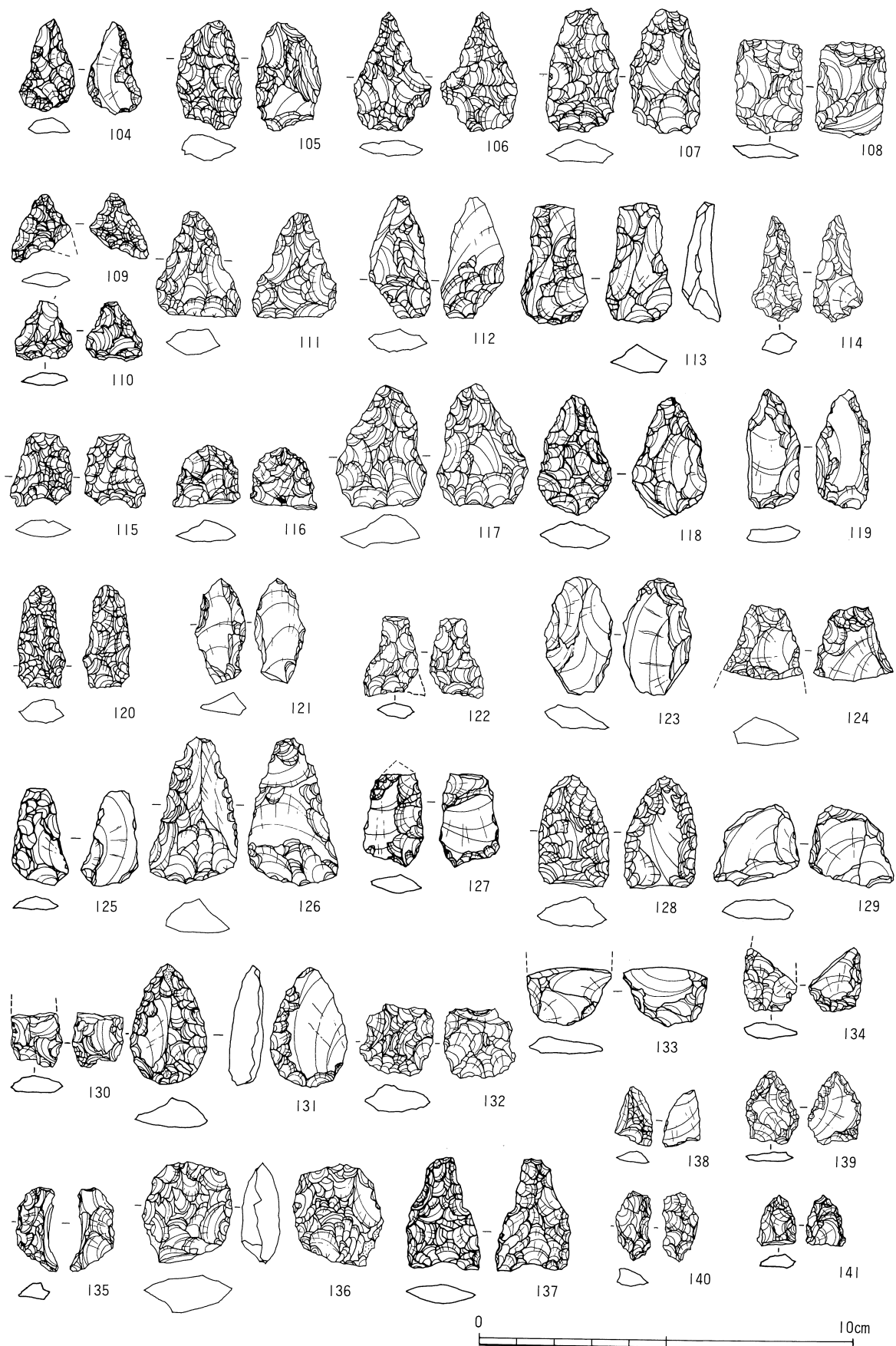
()内は円礫・自然面を有するもの



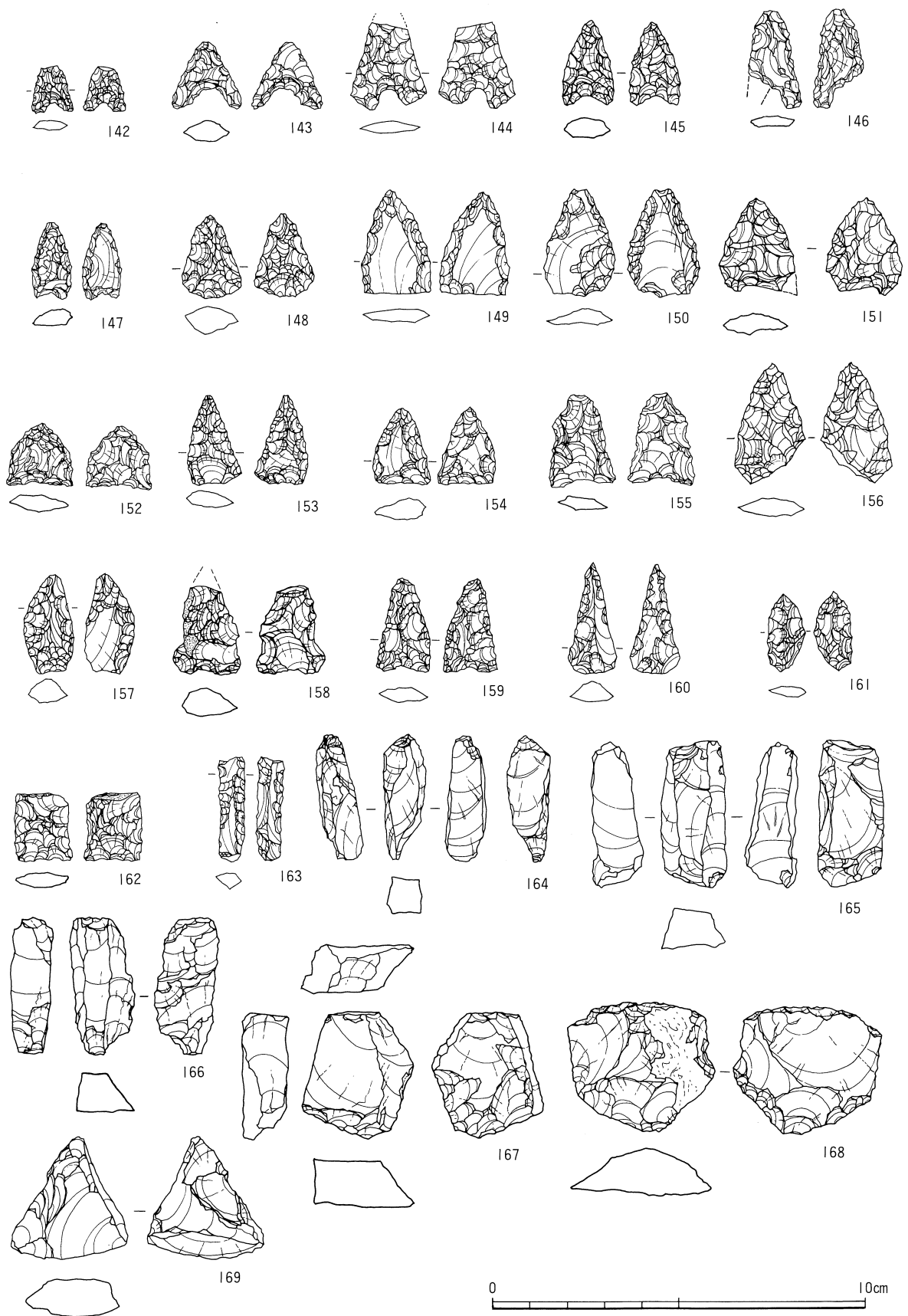
第45図 縄文時代後期・弥生時代早期の遺物実測図



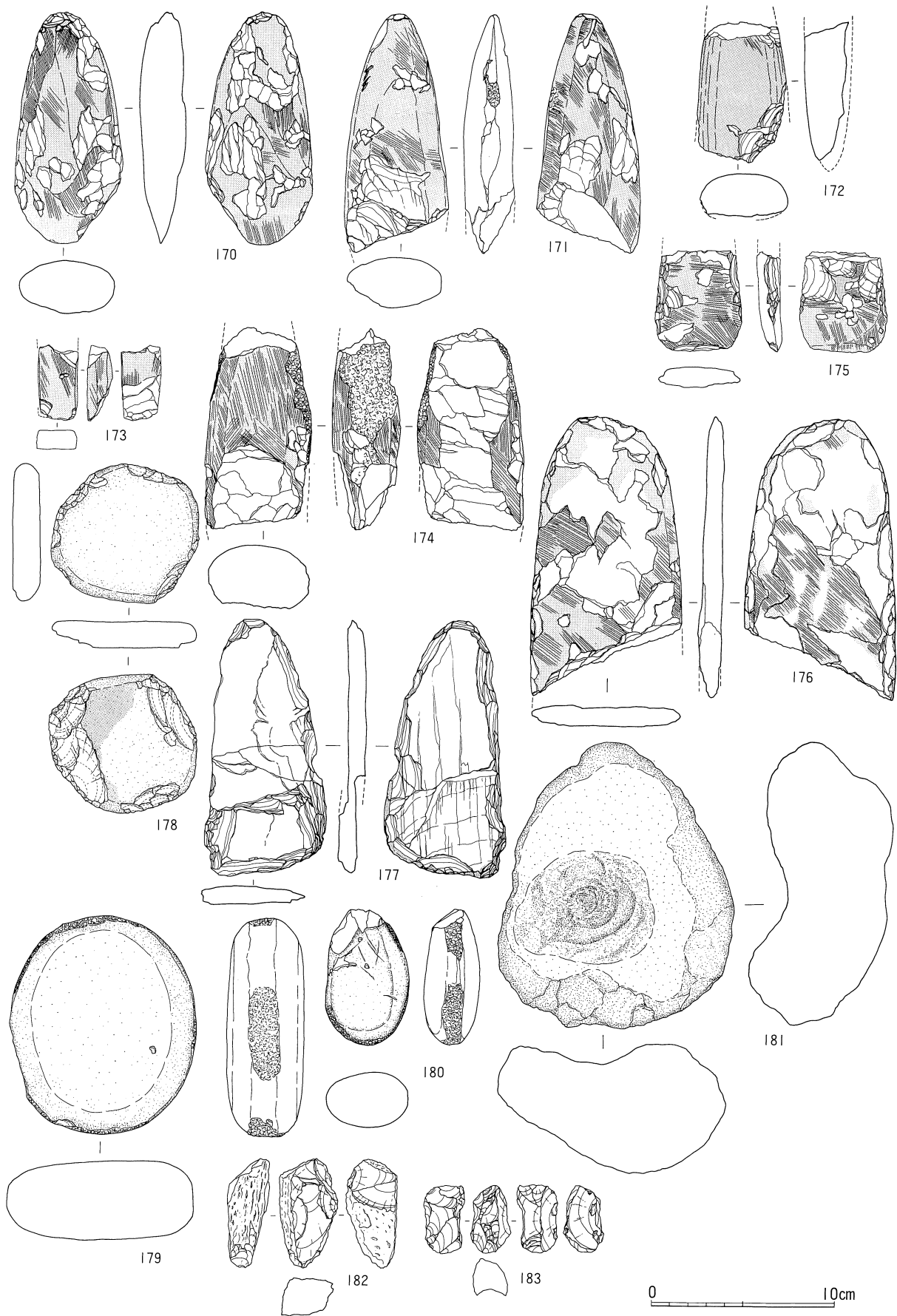
第46図 縄文時代後期・弥生時代早期の遺物実測図



第47図 縄文時代後期・弥生時代早期の遺物実測図



第48図 縄文時代後期・弥生時代早期の遺物実測図



第49図 縄文時代後期・弥生時代早期の遺物実測図

第14表 (1) 縄文時代後期・弥生時代早期の石器類観察表

挿図番号	出土区	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
第45図 34	G 2-201	石 鏃	2.1	1.7	0.25	0.7	An
35	C 1 くい周辺	〃	1.9	1.7	0.3	0.7	Hob
36	F 2 がげぎわ 6・7・8グリット	〃	1.1	1.7	0.25	0.5	Hob
37	I-2区 室町期整地層 4・5・9-10	〃	2.45	1.7	0.4	1.4	Hob
38	F0区 表土下-30	〃	2.25	1.8	0.35	1.3	Hob
39	H-3区石垣	〃	1.8	2.25	0.35	1.2	Hob
40	F0区17・18 E0区 水田耕作土内	〃	2.75	2.15	0.3	1.1	Hob
41	H-1区東西ト レ表土下-20	〃	2.7	1.7	0.4	1.2	An
42	F0区4・5・9・ 10 表土下-30	〃	2.4	1.4	0.25	0.6	Hob
43	最下層 (茶褐色土) 縄文包含層	〃	1.85	1.35	0.45	1.0	Hob
44	F1区1・2・6・7 最下層	〃	1.1	1.5	0.25	0.3	Hob
45	F-3	〃	1.55	1.2	0.25	0.5	An
46	F1区1・2・6・7 最下層	〃	1.3	1.05	0.3	0.4	Hob
47	C 1 くい周辺	〃	1.6	1.15	0.3	0.5	Hob
48	C 1 くい周辺	〃	1.9	1.7	0.3	0.7	Hob
49	G0区19・20 -30cm	〃	2.5	1.8	0.4	1.6	Hob
50	I・J-2区西側 トレ大型竪穴 状遺構下層内	〃	2.7	1.95	0.55	2.6	Hob
51	G0区11・16 G1区15・20 -20cm	〃	2.6	2.1	0.5	2.4	An
52	J-2区 5・10・15・20 南北トレ	〃	2.35	1.85	0.75	2.6	Hob
53	F1 1・2・6・7 最下層	〃	1.15	1.6	0.3	0.4	Hob
54	G0 11-16 G1 15-20 -20cm	〃	1.9	1.85	0.4	0.9	Hob
55	I・J-2区 東側トレ 黒褐色土内	〃	2.5	2.0	0.5	2.4	Hob
56	F0区4・5 -10cm内	〃	2.25	2.05	0.6	2.2	Hob
57	G0区2・3 北石垣崩壊土内	〃	2.0	1.7	0.2	0.7	Hob
58	G0 11・16 G1 15・20 -20cm	〃	1.7	1.65	0.7	1.3	Hob
59	H-1区 東西トレンチ	〃	2.4	2.2	0.5	2.4	An
60	G0区11・16 G-区15・20 -20cm	〃	1.8	2.15	0.45	1.4	Hob
61	F-1区 11・12・16・17 -10cm	〃	1.8	1.85	0.4	1.3	Hob
62	G0区2・3 北石垣崩壊土内	〃	2.0	1.7	0.2	0.7	Hob
63	F0区 4・5・9・10 表土下-30	〃	1.45	1.40	0.45	0.6	An
64	F2区がげぎわ	〃	1.4	1.85	0.4	0.7	Hob
65	H-1区・H0区 東西トレンチ	〃	1.7	1.7	0.3	0.6	Hob
66	H0区東西ト レ -40~地山内	〃	1.6	1.25	0.5	1.9	Hob
67	J-2区P-1	〃	2.15	1.6	0.4	1.3	Hob
68	G0区11・16 G1区15・20 -20cm	〃	2.35	1.55	0.4	1.1	Hob

*Hob: 姫島産黒曜石、An: 安山岩

第14表 (2) 縄文時代後期・弥生時代早期の石器類観察表

挿図番号	出土区	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
第46図 69	F0区 表土下	石 鏃	1.6	1.6	0.4	1.1	Hob
70	G0 11・16・G1	〃	1.35	1.7	0.4	0.8	Hob
71	G-1区	〃	1.75	1.15	0.25	0.4	Hob
72	G0区・G1区	〃	2.0	1.3	0.4	0.7	Hob
73	F1区	〃	2.55	1.4	0.35	1.2	An
74	G1区	〃	2.45	1.2	0.3	1.0	An
75	G0区	〃	2.15	1.35	0.35	1.2	Hob
76	F-1区	〃	1.8	1.0	0.3	0.5	Hob
77	F0区	〃	2.25	1.1	0.35	0.8	Hob
78	F0区	〃	2.1	1.6	0.45	1.3	Hob
79	C1	〃	1.8	1.35	0.4	1.0	Hob
80	J-2区	〃	2.65	1.35	0.6	1.7	Hob
81	F0区・E0区	〃	3.15	1.35	0.4	1.6	An
82	G0区	〃	2.35	1.5	0.35	1.0	Hob
83	F0区	〃	3.5	1.95	0.5	2.1	Hob
84	F0区最下層	〃	1.95	1.6	0.3	1.2	Hob
85	F0区	〃	2.85	1.65	0.45	1.1	Hob
86	G0区17・18	〃	3.5	1.8	0.45	2.9	Hob
87	G0区	〃	2.95	1.65	0.45	1.9	Hob
88	F-1区	〃	2.6	1.6	0.25	1.4	Hob
89	F0区・F1区	〃	2.1	1.7	0.45	1.3	Hob
90	F0区	〃	2.65	1.8	0.65	2.7	Hob
91	H1-2区	〃	2.5	1.65	0.55	1.5	Hob
92	F0区	〃	2.0	2.4	0.45	2.4	Hob
93	F1区	〃	2.3	1.85	0.5	2.5	An
94	F-1区	〃	2.1	1.15	0.3	0.6	Hob
95	F0区	〃	3.25	1.3	0.4	1.4	Hob
96	F-1区	〃	1.7	1.7	0.7	1.6	Hob
97	F0区 表土下	〃	2.4	1.9	5.5	1.9	Hob
98	F1区	〃	2.3	1.65	3.5	1.3	Hob
99	F0区	〃	1.6	1.55	0.3	0.8	An
100	F0区	〃	2.4	1.6	0.35	1.7	Hob
101	F-1区	〃	1.65	1.45	0.45	0.9	Hob
102	G0区	〃	2.6	2.05	0.6	2.8	Hob
103	J-2区	〃	2.25	1.55	0.4	1.5	An

第14表 (3) 縄文時代後期・弥生時代早期の石器類観察表

挿図番号	出土区	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
第47図104	G0・G1	石鏃未製品	2.35	1.55	0.4	1.1	Hob
105	K-2区・J-2区	〃	2.85	1.75	0.75	3.4	Hob
106	I-1区	〃	3.15	2.05	0.4	1.6	Hob
107	F-1区	〃	3.25	1.85	0.65	4.1	Hob
108	F-1区	〃	2.5	1.85	0.35	2.0	Hob
109	F0区	石 鏃	1.8	1.6	0.3	0.6	Hob
110	F1区	〃	1.55	1.55	0.25	0.7	Hob
111	F1区	石鏃未製品	2.8	2.25	0.65	3.4	Hob
112	H-1区・H0区	〃	3.2	1.65	0.55	2.2	Hob
113	F0区	〃	3.15	1.8	0.8	3.9	Hob
114	F-1区	〃	2.8	1.35	0.55	1.4	Hob
115	H-2区・H-3区	石 鏃	1.95	1.65	0.4	1.3	Hob
116	G2区	石鏃未製品	1.65	1.8	0.65	1.7	Hob
117	F-1区	〃	3.25	2.45	0.7	4.8	Hob
118	F0区	〃	3.15	2.0	0.65	3.7	Hob
119	G0区	〃	3.15	1.45	0.4	2.2	An
120	H-1区・H0区	〃	2.7	1.25	0.6	1.8	Hob
121	F1区	〃	2.75	1.35	0.5	1.6	Hob
122	F-1区	〃	2.15	1.45	0.35	1.0	Hob
123	F0区・E0区	〃	3.1	1.8	0.55	3.1	An
124	F0区	〃	2.0	2.1	0.7	2.6	Hob
125	G0区・G1区	〃	2.55	1.55	0.3	1.1	An
126	G0区・G-1区	〃	3.9	2.4	0.85	5.7	Hob
127	F0区	〃	2.45	1.6	0.5	1.7	Hob
128	G2区	〃	3.0	1.85	0.75	3.5	Hob
129	H-2区・ H-3区	〃	2.15	2.25	0.5	3.1	An
130	F0区	〃	1.4	1.35	0.45	0.9	Hob
131	G1区	〃	3.2	2.0	0.9	5.1	Hob
132	F0区	〃	1.9	1.9	0.8	2.3	Hob
133	G0区	〃	1.55	2.25	0.45	1.8	An
134	F1区	〃	1.7	1.4	0.4	0.9	Hob
135	F0区	〃	2.25	1.15	0.4	0.9	Hob
136	F0区 表土下	〃	2.7	2.4	0.95	5.8	Hob
137	H-1区・H0区	〃	3.0	2.0	5.5	2.6	Hob
138	G0区・G1区	〃	1.5	1.0	0.3	0.4	Hob
139	F-1区	〃	1.85	1.35	0.25	0.7	Hob
140	F0区	〃	1.85	0.95	0.45	0.6	Hob
141	F1区	石 鏃	1.35	1.05	0.4	0.5	Hob

第14表 (4) 縄文時代後期・弥生時代早期の石器類観察表

挿図番号	出土区	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
第48図142	E 6	石 鏃	0.95	0.95	0.3	0.3	Hob
// 143	F 4 区	//	1.7	1.85	0.5	0.9	An
// 144	F 4 区	//	2.3	2.05	0.2	1.0	Hob
// 145	E 6 区	//	2.25	1.45	0.5	1.5	Hob
// 146	E 6 区	//	2.6	1.45	0.25	0.9	An
// 147	E 7	//	2.05	1.05	0.4	0.9	Hob
// 148	E 5	//	2.2	1.6	0.7	1.9	Hob
// 149	E 5	石鏃未製品	2.75	1.9	0.4	2.1	An
// 150	F 4	//	2.8	1.9	0.4	2.3	Hob
// 151	F 6	//	2.45	2.05	0.5	2.1	Hob
// 152	E 6 区	石 鏃	1.7	1.75	0.45	1.1	An
// 153	E 5	//	2.35	1.45	0.35	0.9	Hob
// 154	E 5	//	2.05	1.55	0.5	1.3	Hob
// 155	F 4 区	//	2.45	1.75	0.35	1.3	An
// 156	E 6 区	石鏃未製品	3.2	1.85	0.55	2.6	Hob
// 157	F 4 区	//	2.65	1.3	0.7	2.2	Hob
// 158	E6・7・F6・7	//	2.3	1.8	0.7	2.5	Hob
// 159	E 6	石 鏃	2.3	1.35	0.4	1.2	Bo
// 160	E6・7・F6・7	石鏃未製品	2.9	1.35	0.55	1.3	Hob
// 161	E 6	//	2.05	0.95	0.35	0.6	Hob
// 162	E 6 区	//	1.8	1.55	0.4	1.2	Hob
// 163	F 0 区	石 鏃	2.75	0.75	0.45	1.0	Hob
// 164	L-3	クサビ形石器	3.3	1.15	0.95	4.9	An
// 165	F 0 区	//	3.9	1.75	1.1	10.9	An
// 166	G0区・G1区	//	3.65	1.75	1.1	8.1	An
// 167	F 2	削 器	3.35	3.0	1.2	15.9	An
// 168		//	3.4	3.95	1.25	15.1	An
// 169	F 0 区	剥 片	3.25	3.1	1.05	9.6	An

第14表 (5) 縄文時代後期・弥生時代早期の石器類観察表

挿図番号	出土区	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
第49図170	E 6	石 斧	12.5	5.8	2.6	243.1	緑泥片岩
// 171	I-2区	//	12.8	5.7	2.7	270.9	蛇紋岩
// 172	I 1 区	//	7.65	4.9	2.3	140.0	蛇紋岩
// 173	C 1		4.05	2.1	1.1	13.4	桂質泥岩
// 174	F 0 区	石 斧	10.85	5.75	3.5	333.1	蛇紋岩
// 175	G 2 区		5.5	4.7	1.3	53.5	緑泥片岩
// 176	E-5	扁平打製石斧	15.15	8.2	1.05	211.8	結晶片岩
// 177	E-8	//	13.9	6.65	0.95	147.5	結晶片岩
// 178	G 2	円盤形石器	8.1	7.5	1.45	128.4	HG
// 179	G 0 区	たたき石	11.8	10.15	4.05	824.2	
// 180	E-5	//	7.4	4.6	3.05	165.2	
// 181	H-2	凹 石	15.85	13.0	7.5	1250	凝灰岩
// 182	E-6	石 核	6.0	3.2	2.2	44.2	An
// 183	J-2区	//	3.70	2.15	1.95	17.1	HG

※Hob：姫島産黒曜石、An：安山岩、HG：ガラス質安山岩

(2) 石器類

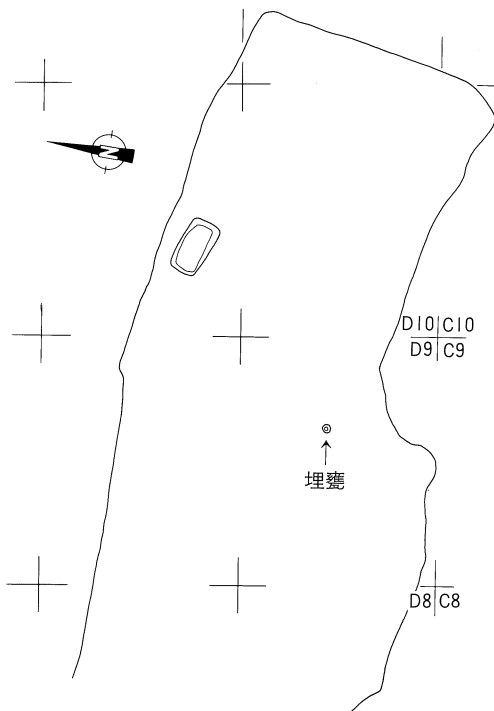
本遺跡内からは、第13表に示した石器・剥片類がある。石器素材の作出や石器製作の際、副次的に生産される剥片・碎片が最も多い。次いで加工痕のある剥片・使用痕ある剥片が216例ある。この石器は剥片に刃こぼれを残すか、簡単な二次加工を加えただけで形態や加工の程度は一定しない。狩猟具の石鏃は多く、200点が回収されている。この他、小型の石核が188点あるが、石核以外の通常石器はそれぞれ45点以下の量に留まる。

さて石鏃の大半は三万田式土器段階に属するものと考えられる。なぜなら隣接する国東町教育委員会が行った発掘区では莫大な三万田式土器段階の遺物が回収され、大分県教育委員会の発掘区回収の遺物量もその段階に帰属すると考えられる。この状況の中で、様々な形態がある石鏃のうち基部にえぐりのない平基の場合は(第45図49・51・59~61、第46図72~98)、弥生時代早期に属する可能性が高い。それは森本遺跡第1集中部の一括資料(弥生時代早期)中の石鏃のほとんどが平基で、陽弓遺跡でも弥生時代早期の刻目突帯文土器が回収されていることが理由である。

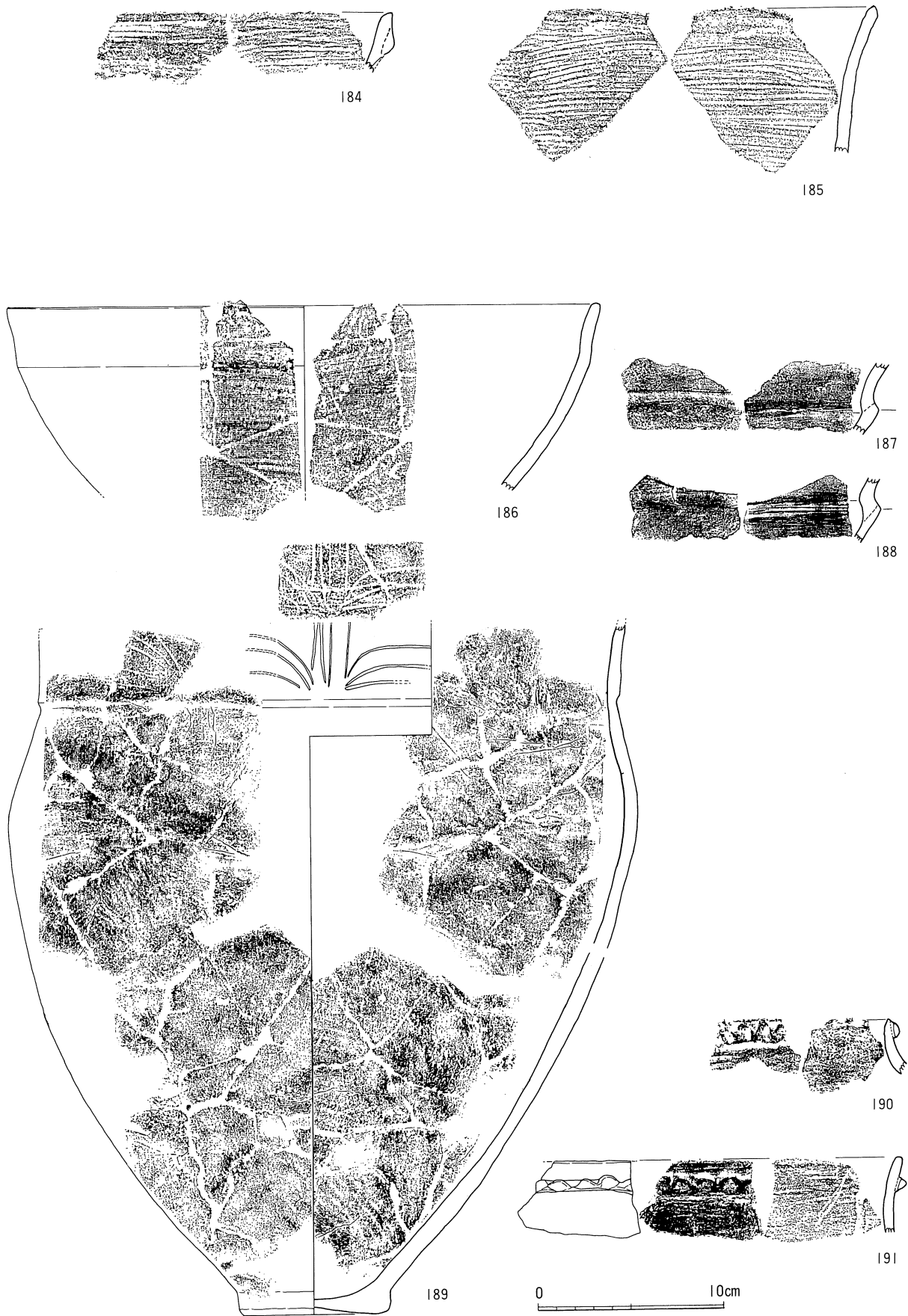
これまで見てきた小型石器類の石材は、姫島産黒曜石・サヌカイト・ガラス質安山岩・黒色黒曜石・チャートからなる。うち姫島産黒曜石が12,954.3gも回収されており、他の石材に占める割合が91%となっている。サヌカイトも1,050.1g回収されており、そのほとんどが香川県金山産と推定される。

なお旧石器時代後期に属する剥片1点(大野川原産の流紋岩)が他時期の遺物とともに回収されている。

(綿貫)



第50図 縄文時代晩期埋壙の位置



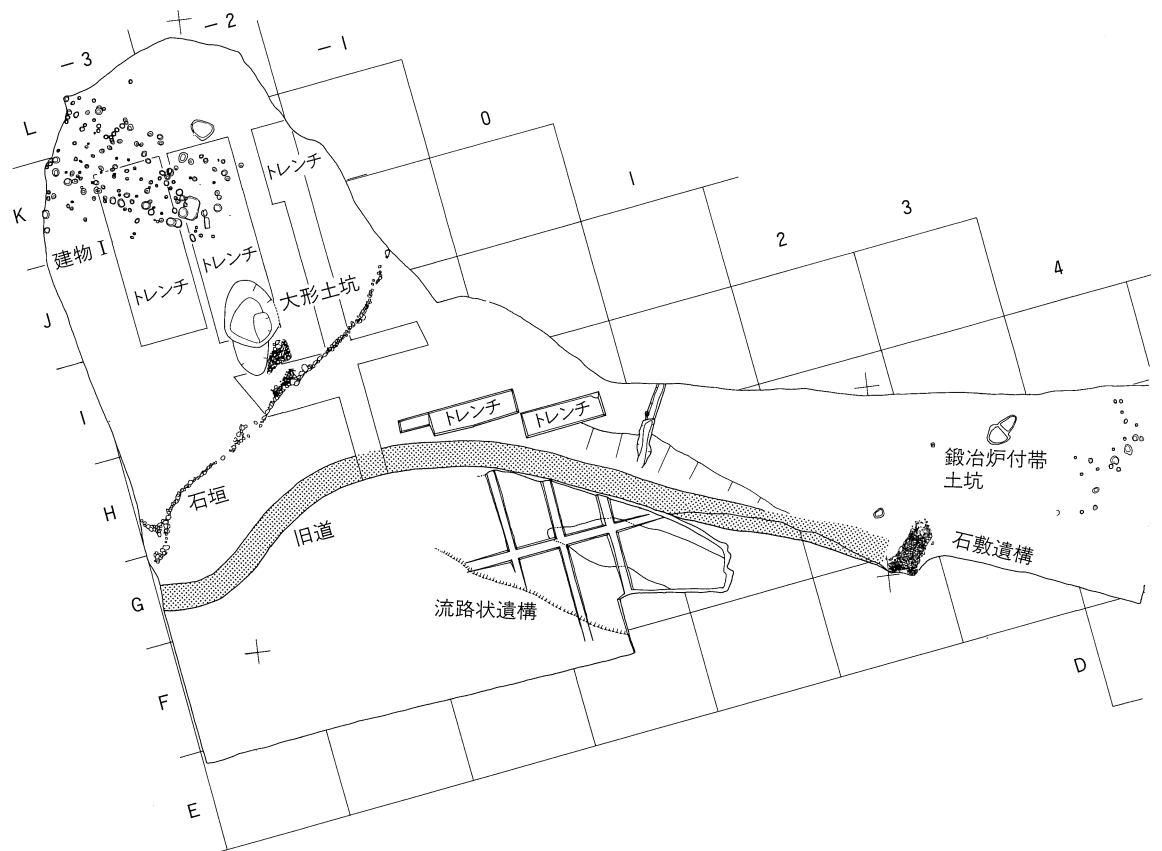
第51図 縄文時代後・晩期と弥生時代早期の遺物実測図

4. 古代・中世・近世の遺構と遺物

(1) 遺構

遺跡の概要の項において、すでに述べたが、調査区は永和元年(1375)に建立された泉福寺の南北に通る参道以西、すなわち東流する横手川の左岸及び横手川の支流である高良川左岸の約65～68mの河岸段丘上に位置する。調査前の状況は、南側の横手川に向かって石垣で区画された水田が階段状に低くなり、参道両側には寺内町状の集落(なお、この南北の参道と交差する県道豊後高田・国東線が東西に走り、この両側においても集落が形成されている。しかしこの県道は新しく近代になって新設されたもので、調査区南側で横手川に沿って走る〔第52図太アミ点〕小道が旧道であったとのことである。)が形成され、東側よりも西側の建物側が一段高くなっていた。調査区は、この参道西の建物跡(現在の宅地)から南に階段状に低くなる水田地帯、約8000㎡(東西に細長い県道部分と西側の南北に長い高良川の河川改修部分)を発掘した。

その結果、検出された遺構群は、年代によって特徴ある分布状況が明らかとなった。すなわち、平安後期から鎌倉時代(11世紀後半から13世紀後半・中心時期12世紀)の遺構群は調査区東地区(D6～8区、E4～8区、F3～7区、G3・4区)及び西地区(F0・F1・F-1区、G0・G-1区)に集中し、変わって14世紀後半から16世紀代の遺構群は、調査区北西地区(H0～-3区、I-1～-3区、J-1～-3区、K-2・K-3、L-2・-3区)において検出された。東地区の遺構は、本遺跡を特徴づけるF3区からG3区にまたがる鍛冶関連遺構(鍛冶炉の付帯施設か)やその南西の石敷き道路状遺構及びその東側に分布するピット群、さらに東へいった参道西側の近世の石組み遺構(18世紀後半以降の厩跡か)などがある。西地区は、一段低く(約2m)



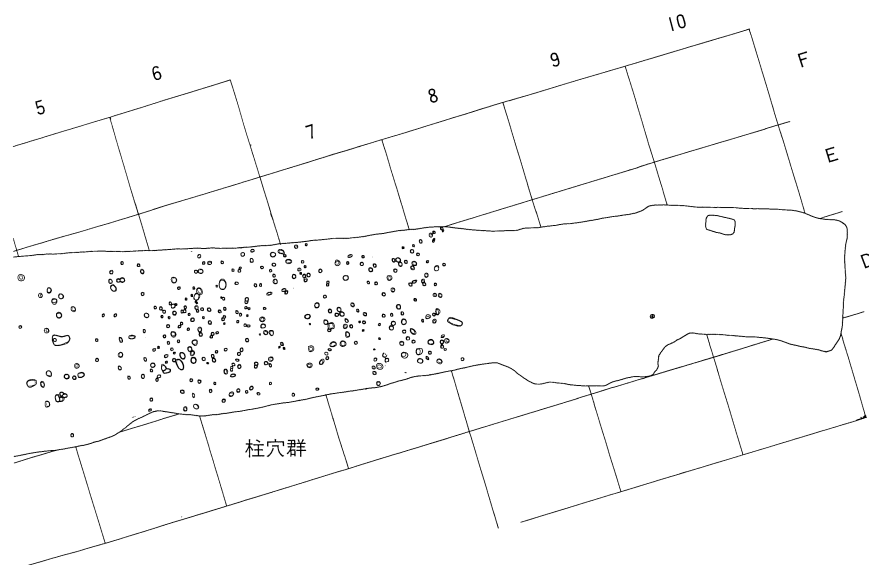
第52図 陽弓遺跡遺構分布図

しかも段下であることから、遺構の存在する可能性が薄かったが、この部分において12世紀を中心とする多量の遺物とともに鉄滓や鞆羽口・炉壁など鉄生産関係の遺物を包含する浅い幅広の流路状遺構が検出された。

北西地区では、数度の建て替えが想定される16世紀後半ころの掘立柱建物跡（建物1）及び大形土坑や土坑とともにこの建物1に先行する掘立柱建物跡に関係すると思われる14世紀後半から15世紀中頃の柱穴群、土坑がある。さらにこの地区では、水田造成に伴うと想定される（上段と下段に分かれ、その境に石垣を伴う）大規模な整地層が確認され、16世紀末以降この地区が水田化していくことが想定された。

以上が、今回検出された遺構の概要である。この陽弓地区で最も特徴付けられることは、何といたっても鉄生産に関連する遺物群の存在である。本報告書付編の大澤正巳氏によると出土遺物からみて①砂鉄を木炭で還元した時点で排出される製錬滓、荒鉄の成分調整で鍛冶炉に残された精練鍛冶滓、鉄器製作に際して派生する鍛練鍛冶滓など、製鉄一貫操業を実証できる。②鍛冶作業の内、赤熱鉄材を鍛打した時点で飛散した球状滓や鍛造剥片等の存在から鍛冶作業が裏付けられる。③さらにまた、溶解炉の炉壁や炉底滓など鑄造作業の存在も想定される。とされ、製鉄、鍛冶、鑄造の3つの作業全てが行われていたと結論付けている。

今回検出された掘立柱建物跡や柱穴群、土坑などは、鍛造剥片や球状滓が検出されたF3区の土坑以外は、鉄生産に関わる直接的な史資料は発見されなかったが、発掘区全域に分布する鉄滓や羽口などの状況からみると、やはり鉄生産に関わる何らかの施設群である可能性が高い。水田造成など後世の削平によって攪乱を受けて不明瞭なところも多いが、例えば鉄生産に従事する工人の居住や作業施設など、鉄生産関連施設域の状況を示しているとも考えられる。とすれば、本遺跡における鉄生産は、12世紀前半（11世紀後半を含むか）から16世紀後半の、実に400年もの長い期間操業し続けたことになり、鉄に関する史資料の多い国東半島地域において、鉄生産の一貫



作業と鑄造作業も行い、これほど長い期間、同一場所で鉄生産が行われた事例は管見の限りは知らない。

このことが事実であれば、きわめて重要な事柄となるため、今少し事実関係を整理する。検出された遺構群は、所属年代からみて大きく2つの地区に分かれて分布していることはすでに述べた。すなわち、東地区は、江戸時代を除き南北朝から室町（戦国）時代の遺物は検出されておらず、遺構群は11世紀後半から13世紀に所属すると考えられる。さらに西地区の流路遺構の埋没時期は、13世紀後半代であり、この埋没土の中に多量の鉄滓や炉壁・鞆羽口が流入している。さらに、F3区では唯一鍛冶作業関連遺構と考えられる土抗が存在している。

したがって、東地区及び西地区の調査から言えることは11世紀後半から12世紀前半の早い時期に鉄生産の操業が開始された可能性が高く、13世紀の後半代には、不必要となった鉄生産関係の遺物群が西地区の流路状遺構に流入（投棄も想定できる）埋没したことになる。

では、北西地区はどうであろうか。検出された遺構群の年代は14世紀後半から16世紀後半に所属し、前述した地区の状況と大きく変わっている。この地区から明確な鉄生産に関わる遺構は検出されなかったが、整地層や土坑・柱穴などから鉄滓や羽口が発見されている。整地層から出土する遺物をみると石垣を挟み上段と下段では下限遺物が異なり、上段が16世紀後半（この整地層の上半部は削平を受け消失している。）までで、下段は18世紀後半以降（この層の下層には近世の遺物は包含してない。したがって上段・下段と16世紀末以降に一度造成され、その後18世紀後半以降に再度造成された可能性がある。）の遺物がある。上限は、いずれの整地層も11世紀後半から13世紀の遺物が混入する。従って、この地区においても直接的な遺構は検出されなかったが東地区と同時期の遺構が存在していた可能性がある。とすれば13世紀以前については製鉄や鍛冶に関連する施設がこの地区にも分布していたとも想定できる。しかしながら、東地区で検出されなかった14世紀以降の遺構について、これらが鉄生産に関係するかどうかについて、判断する根拠（確かに、土坑や柱穴から鉄滓が出土しているが、その量は極端に少ない。）は実のところ発見されていないのである。

以上考古学的成果から言えることは、東地区では製鉄・鍛冶・鑄造作業段階で派生する鉄滓や鑄造炉の炉壁、羽口、さらにはF3区土抗など鍛冶関係遺構など製鉄一貫操業を裏付ける遺物・遺構の存在から11世紀後半から13世紀前半段階には鉄生産が行われていたとすることは間違いない。しかし、それ以後の遺構や遺物がこの地区から姿を消していることが、北西地区の14世紀中頃から後半以降の操業を裏付けることが難しい。確かに整地層の中に鉄滓など鉄生産関係遺物も多いのであるが、平安後期から鎌倉時代の遺物も相当量包含しており、その位置付けが流動的で決定資料とならない。だからといって鉄生産は13世紀後半段階に廃絶し、北西地区に新たな集落の形成が図られたと断定することも問題を残す。なぜならば、天文18年(1549)、国東郷大工識源薫次覚書に総大工持ち分として「横手村⁽¹⁾」の名が確認でき、大工と横手村の関係があることは実に興味深い。すなわち、古代・中世の鑄鉄鑄物について五十川信矢氏は、大工とは番匠、石工など中世の手工業集団の長を呼ぶ普遍的名称であるが、梵鐘や湯釜などの鑄物の銘文に「大工」は頻出し、「鑄物師」と「大工」が併記されるものが多数存在することから、統率者としての大工と協業を前提とする鑄物師とが生産体制をとり、この両者こそが、鑄鉄鑄物師の担い手であった⁽²⁾としている。陽弓遺跡においては時期的に対応しないが溶解炉の炉壁の存在から、鑄造品の生産が行われているので、16世紀中頃には国東郷大工源薫次との生産体制がとられていたとも考えられるからである。さらにまた、本報告書は付篇1で紹介しているように永和元年(1375)に建立された泉福寺には、「妙徳山可中公用月谷派待真堂存置也 永正22(1506年)卯月 日大工正次」の銘⁽³⁾をもつ鉄の香炉台が残っており、この香炉台の製作地についても気になるところである。いずれにしても、国東町横手の陽弓地区において、鎌倉時代前半代ころまでに鉄素材から鉄器（鑄造を含む）にいたるまでの一貫生産が確認されたことは大きな成果であった。

中世の豊前・豊後の金属器生産を論じた飯沼賢司氏によると、宇佐宮の放生会や行幸会の金属奉納儀礼のみならず大規模な寺・社においては、金物の調達に神事・仏事において必ず必要とされる。宇佐宮にも銅細工や鑄物師、鍛冶が組織され、神仏事において重要な役割を果たし、古代から中世のある時期までは宇佐八幡宮が掌握していた⁽⁴⁾とする。平安時代後期の国東半島は、紀氏や大神氏さらに宇佐宮神官などが、各地の開発領主として勢力を伸ばし、武士化が進んでいた。この横手地区の開発は、本報告書付篇2よると宇佐宮勢力の一翼を担い、さら

には国東郡司であった紀氏が、国崎津・郡衙所在地と推定される現在の国東町田深・吉本地区を本拠地とし、国衙領である国東郷の開発に当たり、その中心部を貫流する田深川を遡上するように押し進め、この横手地区についても別名的開発が行われたと推定している。このことが事実であるとする今回明らかとなった横手陽弓の工人は、紀氏に仕え国衙や宇佐宮へ鉄製品を貢納していたとすることもできよう。このような鉄生産遺跡は近年国東や中津・日田地方で相次いで調査されている。製鉄炉（豎形炉）が検出された国東町由井ヶ迫遺跡⁽⁵⁾やワラミノ遺跡⁽⁶⁾、原Ⅳ遺跡⁽⁷⁾、製鉄炉の検出がなかったが製錬滓とその廃滓場遺構（土坑等）が検出された原Ⅱ遺跡⁽⁸⁾や重藤遺跡⁽⁹⁾、製錬滓はないが鍛冶炉そして精錬鍛冶滓が検出された国東町七郎丸遺跡⁽¹⁰⁾など製錬や大鍛冶に関する遺跡とともに、鍛冶（小鍛冶）や鑄造に関連する遺跡として中津市安平遺跡⁽¹¹⁾（鍛冶）、日田市長者原田迎遺跡⁽¹²⁾（鑄造遺跡で、現在のところ2遺跡が確認される。）などが調査されている。これらの調査から製鉄遺跡の内容をみると、今回調査された陽弓遺跡やワラミノ遺跡、原Ⅱ遺跡など製鉄炉や製錬滓、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓などが検出され製鉄から鉄器生産まで一貫した生産体制をとった大規模なものと、由井ヶ迫遺跡の鉄製錬や七郎丸遺跡の鉄精錬、安平遺跡の鍛冶、さらには長者原田迎遺跡の鑄造など生産工程の一部を行う分業型の小規模な遺跡とに分類されそうである。遺跡の年代は、13世紀後半から14世紀初頭の七郎丸遺跡、14～15世紀ころの安平遺跡、16世紀の長者原田迎遺跡など鎌倉以降の遺跡も検出されているが、その大半が12～13世紀それも13世紀前後に集中する傾向にあり、この国東地方では14世紀以降は検出されていない。

このように、現在のところは平安後期から鎌倉時代前半以降の検出例は極端に少ない。別言すれば鎌倉時代後半以降同一地区での操業は継続してないことを意味するもので、工房及び工人の移動等大きな各期をこの時期に求めることができるのではなかろうか。もし、陽弓遺跡が戦国期まで操業していたとするならば本地方では初例となり、新たな視点が構築されるところであった。

大友時代の鉄生産についても、飯沼氏は、「志賀文書」や「余瀬文書」・「佐藤文書」・「岐部文書」等の分析から、豊後国国東郡には、諸田名（安岐町）・夷（香々地町）・岐部（国見町）などの鉄生産拠点があったことを具体的に明らかにしている。諸田名などは鉄製品を年貢とする特殊な名であり、鎌倉時代から守護大友氏やその一族（志賀氏）が鉄生産に関わる名を掌握し始めた。戦国時代になると、夷谷では、大友氏の庶流吉弘氏が熊井氏を通じて鉄（鉄製品）や切鉄・地鉄（鉄素材）を、岐部浦では岐部氏が鍛冶を掌握して、大友家に太刀や切金・切鉄を上納した。さらに、大野郡三重郷においても賀井本（甲斐本）鍛冶を御用鍛冶として掌握し、三重郷一帯の鍛冶集団を編成した。そして、このような鉄生産の上に立脚したのが、豊後刀の生産であり、大友氏の拠点豊後府中に近い高田鍛冶がその編成の頂点⁽¹³⁾にたったとする。すなわち、鉄生産は中世のある時期までは宇佐八幡宮が掌握したが、大友氏が豊後の守護に任命されて下向してくると、その掌握権は大きく変わっていったものと考えられる。宇佐宮勢力の一翼を担う平安時代以来の開発領主が在地に深く根を下ろしている状況は、大友氏にとって好ましいことではなかった。大友家は、大友庶流をこうした旧来勢力の中核部近くに楔を打ち込むかのように配置⁽¹⁴⁾し、南北朝の動乱後、各地の国人や土豪を被官化し領国支配の体制を整備する過程で、武器及び土木工事・新田開発に必要な工具や農具など生産に従事する職人を直接又は間接的に編成・掌握したと想定されるのである。

国東半島には、鉄生産に関わる地名や鉄滓の出土地が多く、また製鉄や鍛冶に関する伝説も数多く残っている。さらにまた、鎌倉から戦国時代にかけての文書史料も比較的多い。しかし、14世紀の中頃田原別符の直貞流田原氏が国東郷飯塚（飯塚城）へ本拠を移したこの国東郷地域は史料が乏しい。その原因はよくわからないが大友庶流である国東田原氏は戦国時代には本地域最強の国人に成長していることから見ると、田原氏においても吉弘氏や岐部氏と同じように鍛冶集団を掌握していたと考えるのが自然であろう。しかしすでに述べたように、近年国東町が実施している膨大な面積を対象とする圃場整備事業に伴う試掘・発掘調査において検出された鉄生産に関わる遺跡の年代は、13世紀前後ばかりであり、鎌倉・南北朝以降のものは極端に少ない。

したがって、今後は田原氏段階の鉄生産遺跡がどのようになっていったのか注視する必要がある。旧横手村から約2 kmほど東の岩屋村（横手村と接し、田深川と横手川の合流点を中心とする）の岩屋地区では、鍛冶屋台・

金彦様などの地名があり、鉄滓が出土しているとのことである。文明年間（1469～1486）の宇佐宮再建に釘を献作したと伝えられ、現在も鍛冶屋の一統である栗林姓が多く残っている⁽¹⁵⁾。このことが事実であるとすれば、15世紀段階に鉄生産を行っていたことになり、岩屋鍛冶の操業開始年代が注目される。この岩屋には、田原氏の飯塚城、田深伊予館が天文13年（1544）の大洪水によって破損を受けたため、岩屋の山上に新城（城川・亀城）を築いたと伝えられており⁽¹⁶⁾、岩屋鍛冶と田原氏とのつながりが想定される。もしかすると田原氏は直接掌握した可能性が強い。すなわち、戦国後半代になると国人やその家臣の拠る城館（館城）を中心とした「館廻り」集落の形成（真玉城・尾崎屋敷など）が想定でき、国東田原の拠る館（館城）周辺についても、今後城下町の存在も含めて十分検討していく必要がある。こうした製鉄や鍛冶・鑄造に関わる職人集団が、館廻り集落の内や外を含めた周辺にどのように分布するのかを把握することは、村落や都市（町）の空間構造を解明していく重要な視点となり、さらには国人領主の支配体制をも規定することになる。

それでは、次に検出された遺構について具体的に述べていく。

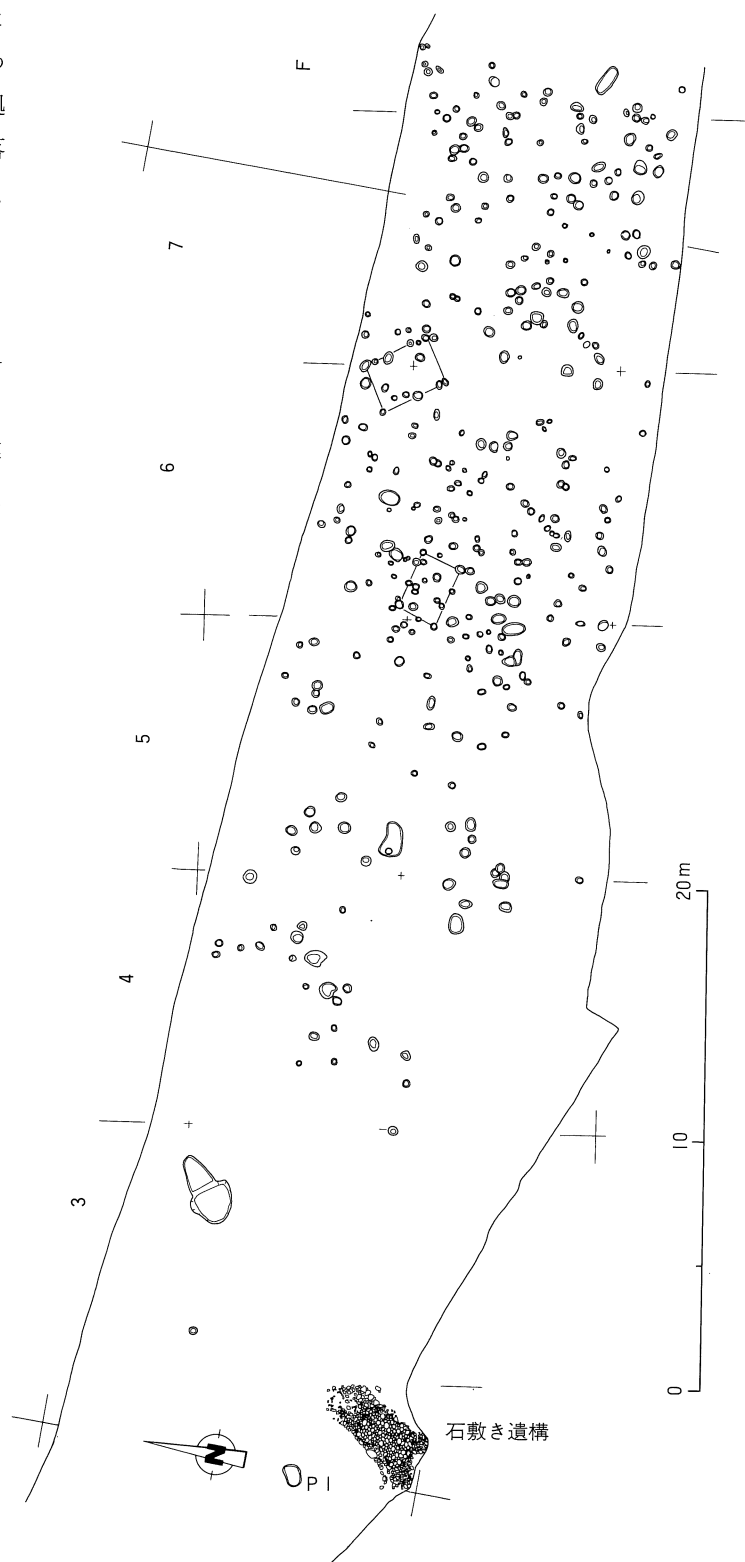
1) 調査区東地区の遺構（D 6～8区、E 4～8区、F 3～7区、G 3・4区）

調査区東地区では、製鉄関係土坑、石敷き遺構、柱穴群、石組遺構などがある。

a. 製鉄関係土坑

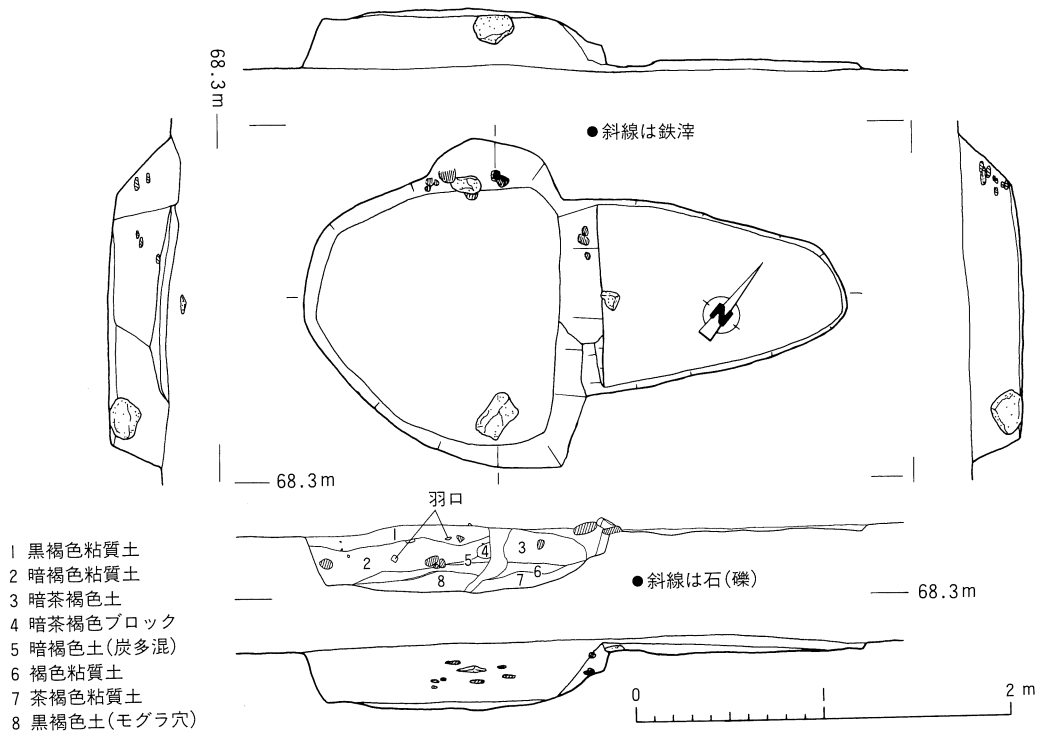
F 3区とG 3区にまたがって検出された。平面プランは、南西－北東方向に長軸をもち、南西側の扁平な隅丸二等辺三角形と北東側の細長の隅丸二等辺三角形プランが底辺を共有して左右に広がって連結したような形態の土坑である。規模は長軸方向で約2.9mであるが、南西側では約1.6m×1.7m、深さ0.35m、北東側は1.05m×1.3m、深さ0.1mあり、北東側が浅く南西側が深くなっている。当初この二つの落ち込みは切り合い関係にあるのではないかと想定したが、平面及び断面の土層などの観察からこの遺構は一体のものであると判断された。なお、この調査区では土坑に接して他の遺構は検出されていない。

土坑内の覆土は、基本的には粘土質の褐色系統の土が流入し、焼土や木炭粒、粘土ブロックなどの混入が認められた。床面は被熱痕



第53図 中世遺構（東地区）分布図

跡は認められなかった。遺構に伴うものとしては南西側の落ち込み内に台石状の河原石を据えた状態で検出された。遺物は、覆土内から羽口とともに多量の鉄滓が出土した。鉄滓には椀形鍛冶滓（精錬鍛冶滓）などがある。これら遺物は、いずれも二次的堆積であり、この遺構は最終的に廃滓場となったと想定できるが、本来は、椀形鍛冶滓とともに台石（作業台か）などの検出から鍛冶炉に関連する付帯施設であったと考えられる。

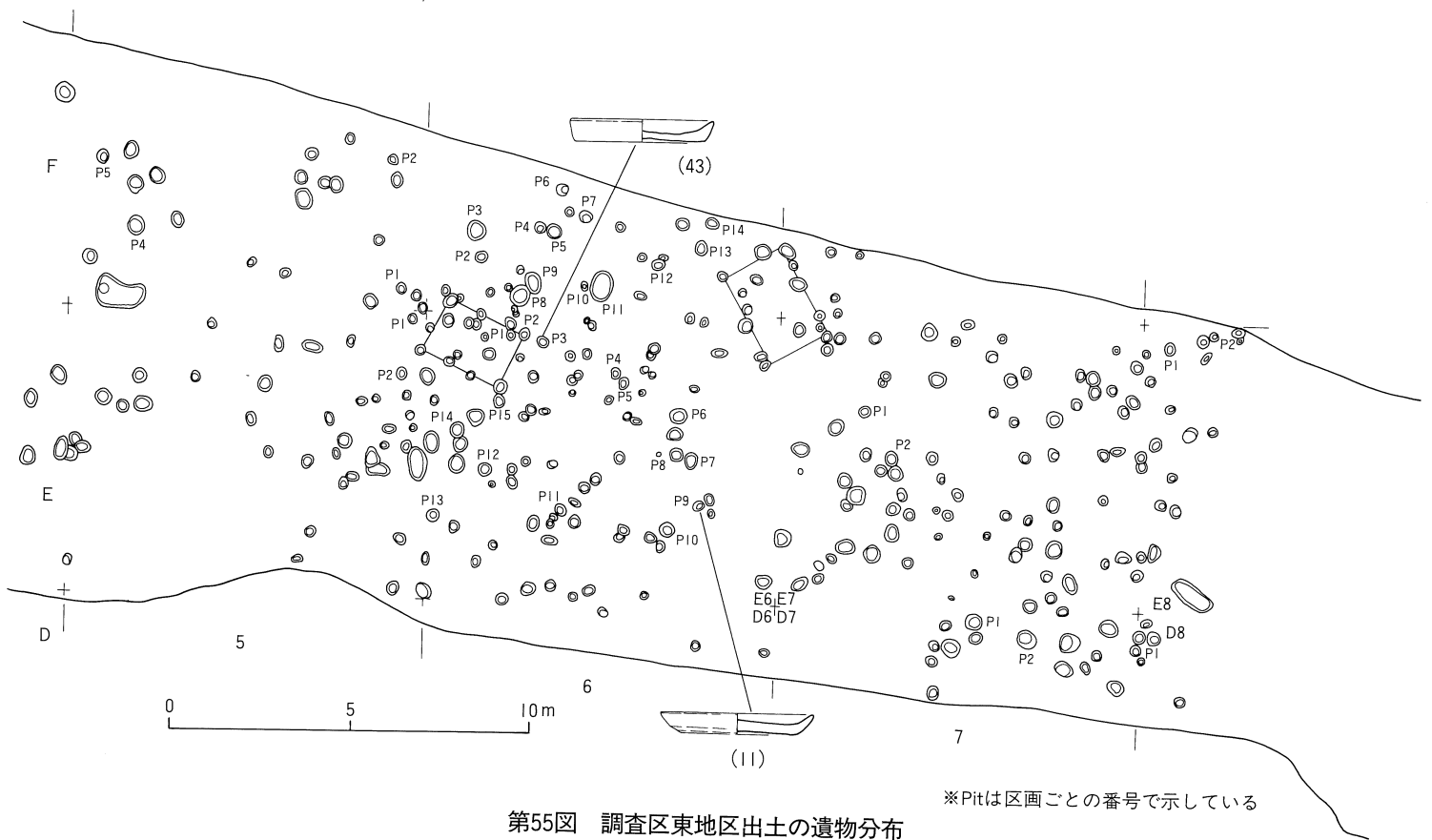


第54図 製鉄関係遺構（F3区）実測図

b. 石敷き遺構・柱穴群

石敷き遺構は、鍛冶関連土坑の南西側E2区・F2区・F3区で確認された。石敷きは南西-北東方向に検出され、南西側が扇形状に広がり、この部分の幅が約2.5mと広く、他の部分は約1.7mとやや狭くなっている。石敷きは、両側に大きな縁石（河原石）を配し、内側にやや小さめの石を敷き詰められており、北東方向にのびる道ないし通路施設と想定される。後世の攪乱のためか北東側の石が消失しているが、縁石がわずかに痕跡をとどめ、全長約8m（敷石部約5m）が確認された。幅広くなっている南西側には、幅2mほどの旧道が東西に走っていたとされ、位置的にはこの旧道に接する。旧道の成立年代は不明であるが、県道ができるまでは使用されていたらしい。旧道部分にはこうした石敷きは確認されていないが、この道が中世までさかのぼるとすれば、本来は石敷きのもので、この部分から北東方向へ分岐していた道の可能性がある。ただ、実のところ石敷き遺構の年代はわからない。石敷きの中に鉄滓が混入していたが、この鉄滓の混入は、東地区で鉄生産が操業された鎌倉後半までとそれ以後（水田化していくと想定される。）と、どちらでも起こり得ることであり、決め手とならない。ちなみに東地区から検出された遺物には、平安後半から鎌倉時代と江戸時代(18世紀以降)の遺物で構成される。

柱穴群は、鍛冶関連土坑から東のD6・7・8区、E4・5・6・7・8区、F4・5・6・7区の東西約40m、南北約13~16mの間に集中して検出された。しかし、この地区の地山は、礫層となっており遺構の検出が難しく、明確な掘立柱建物跡を検出（1×2軒の小規模な建物が2棟ほどまとまりそうであるが）することができなかった。ただ、柱穴群の分布はこの一定範囲に集中することや、検出数かみると明確な建物跡としてまとまらないにしても、ここに数棟の建物跡が存在していたことは容易に想定できる。出土遺物は、約41の柱穴から土師器環・皿片が出土したが、その大半が実測不可能な細片であった。年代は、12世紀から13世紀前半である。さら

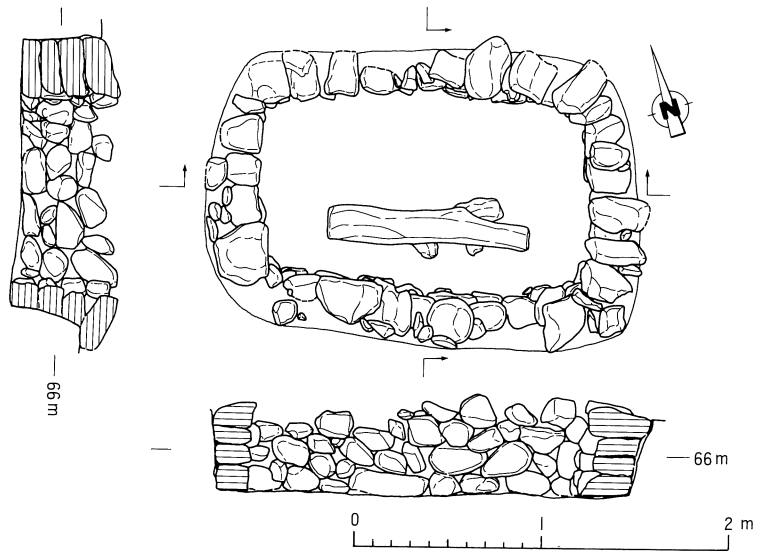


第55図 調査区東地区出土の遺物分布

に、この地区から土鍾や多くの鉄滓・炉壁溶融物・鉄塊系遺物が出土した。鉄滓には製錬滓や精錬鍛冶滓、鍛冶滓、鍛冶系ガラス質滓、炉内滓、溶解炉炉底滓などがあり、その内、溶解炉炉底滓（F 4区）と炉内滓（E 5区）が比較的多い。

c. 石組み遺構

調査区東端部のE10区に位置する。この場所は泉福寺から南北にのびる参道両側に形成された集落の一面を占めるところにあたり、調査前は屋敷があったところである。その跡地から江戸時代の遺物群とともに、石組み遺構が検出された。遺構は、長軸をおおむね東西方向にとり、長径2.3m、短径1.6mの隅丸長方形の掘り方に控えをとらず接するように、川原石を垂直に乱積みするものである。深さは現状で約0.5m、石積みは4から5段が残存する。中から、上部構造物と思われる長さ約1.1m、幅約0.2mの板材が検出され、規模や構造などから屋外に設置された厠跡の可能性が強い。外に、18世紀後半から幕末にかけての肥前磁器や土人形などが出土した。



第56図 石組み遺構実測図

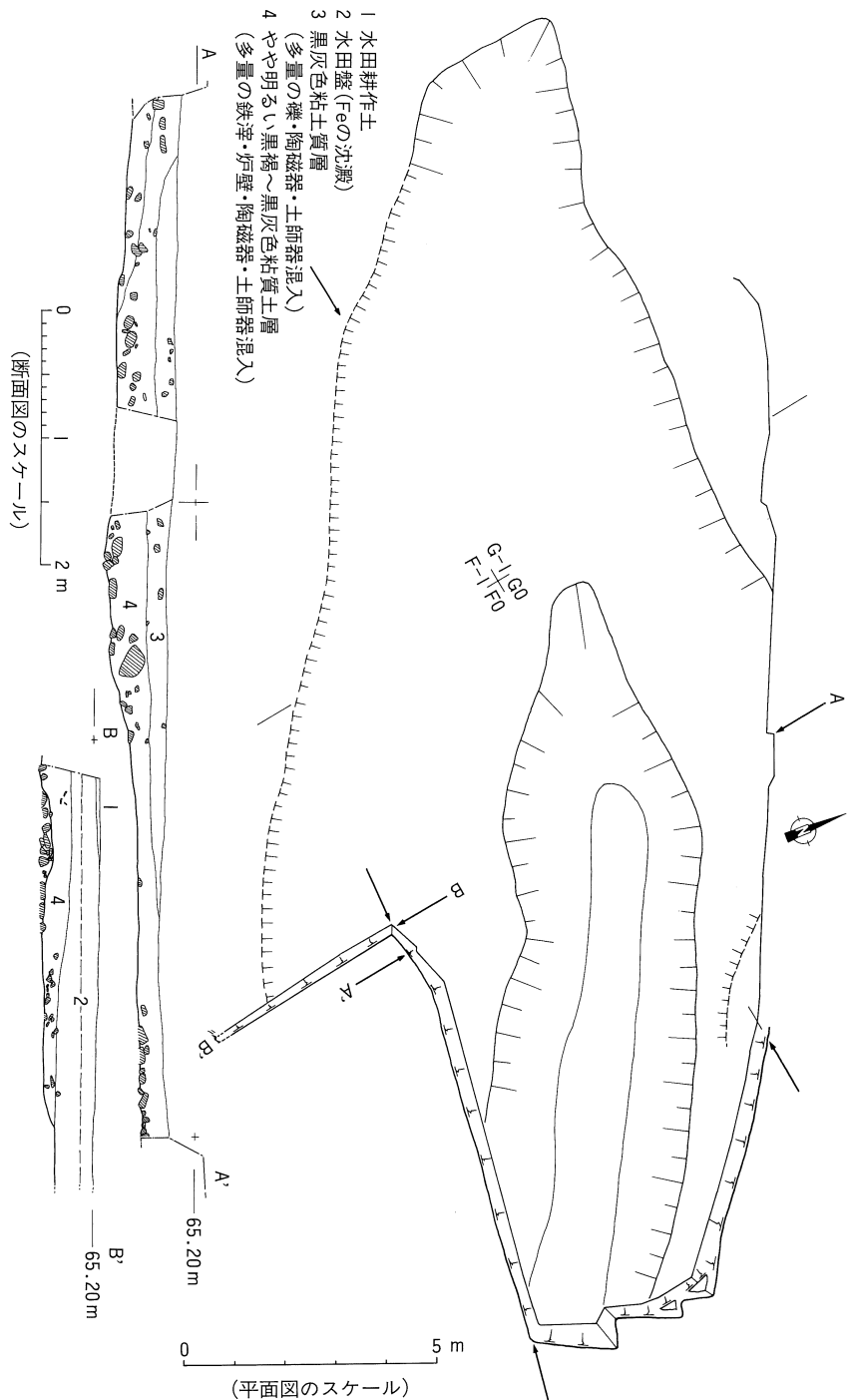
2) 調査区西地区の遺構 (F0区・F1区・F-1区、G0区・G-1区)

調査区は、東西に走る小道(旧道)南側であり、調査前は小道側の水田面より約2mほど低くなっていた。したがって、この地区は水田造成等によって削平を受け、遺構は存在する可能性は薄かった。しかし、小道段下で多量の遺物を包含する層が検出された。当初、この地区がもともと低く、一段高い北側から遺物が流れ込み、包含層が形成されたものと想定し調査を開始した。その結果、西から東に向かって深くなる幅広で皿状の細長い窪みが検出された。そして、窪みに堆積した包含層の年代は11世紀後半から13世紀後半(中心時期12世紀)と判断された。下段部調査とともに北側の上段部分(G1区、H0区)の調査が進んでくると、この区から南へ傾斜していく方(縁)が検出(第52図参照)され、この検出によって窪み

状の遺構は、幅約15m(南側の縁はわずかに痕跡をとどめる程度である)、深さ約3mの流路(川)状の遺構であることが明らかとなった。おそらく、横手川の支流高良川の旧流路と考えられる。とすれば、13世紀後半段階にはこの流路は埋没したことになる。遺物は、調査区の中で最も多く、土師器小皿、坏土師器碗、瓦器碗、須恵器系鉢、土鍋、石鍋、輸入磁器(白磁碗・皿、青磁碗・皿)などの土器や陶器、輸入磁器とともに、ここでも多量の鉄滓、さらには鑄造に関連する溶解炉の炉壁が出土した。

3) 調査路北西地区の遺構 (H0区～3区、I-1区～3区、J-1区～3区、K-2区、K-3区、L-2区、L-3区)

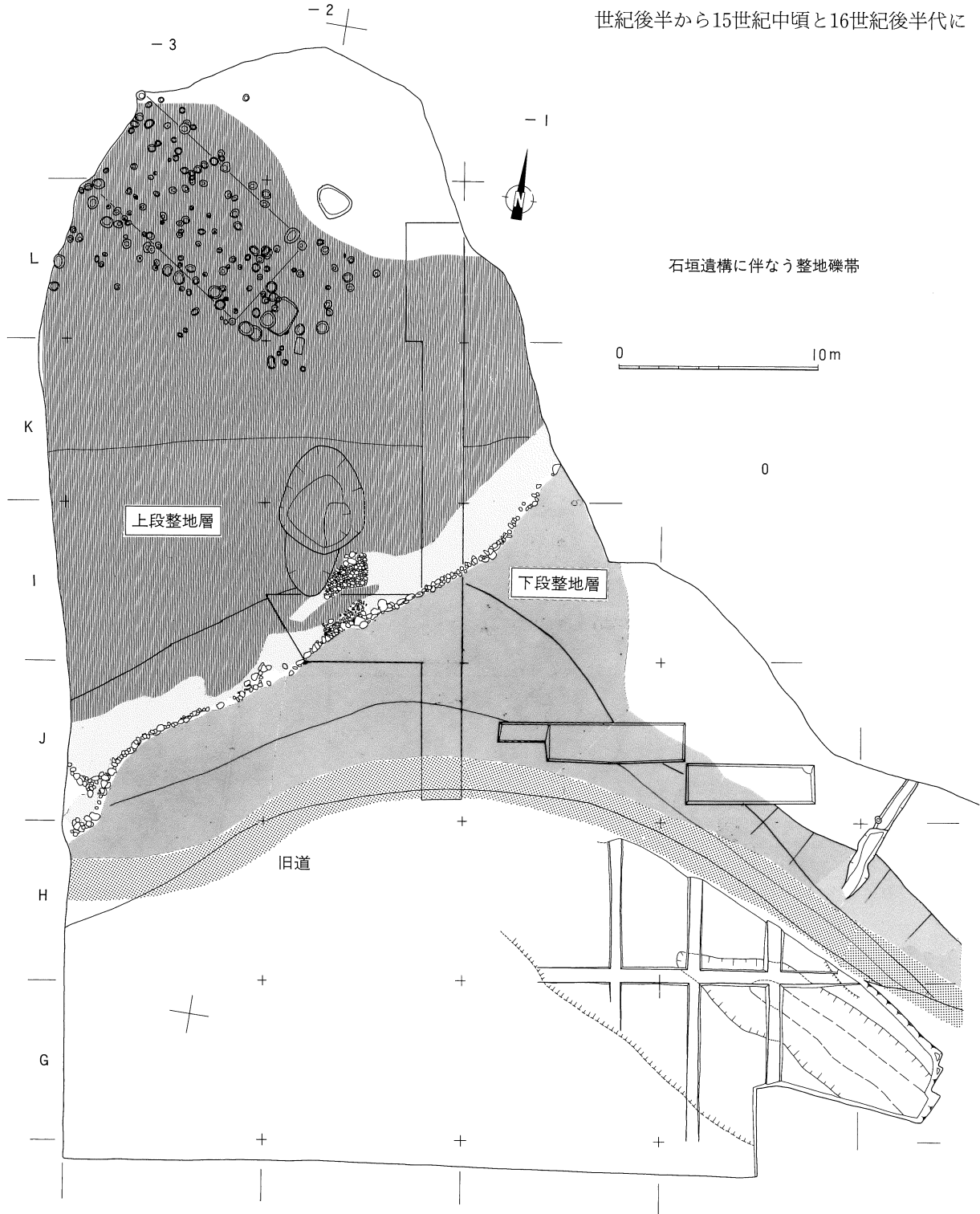
北西地区では、レベル的にもっとも高い北西隅にまよって、多数の柱穴や土坑が検出された。その内、掘立柱建物跡1棟が確認された。他に、重複する建物が想定されるが残念ながら柱列を確認しえなかった。また、この柱穴群よりやや南で大形土坑が発見された。この地区は、こうした遺構とともに、水田造成と想定される大規模な整地層が検出され、前記した遺構群を黒褐色系の粘質土が全域を覆っていた。



第57図 流路状遺構(旧河道)実測図(G-1区・G0区・F-1区・F0区)

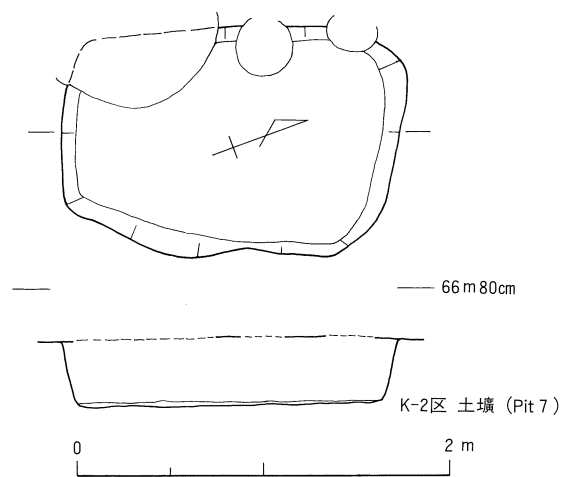
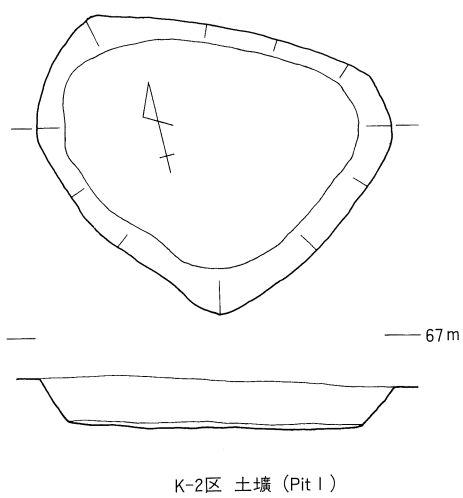
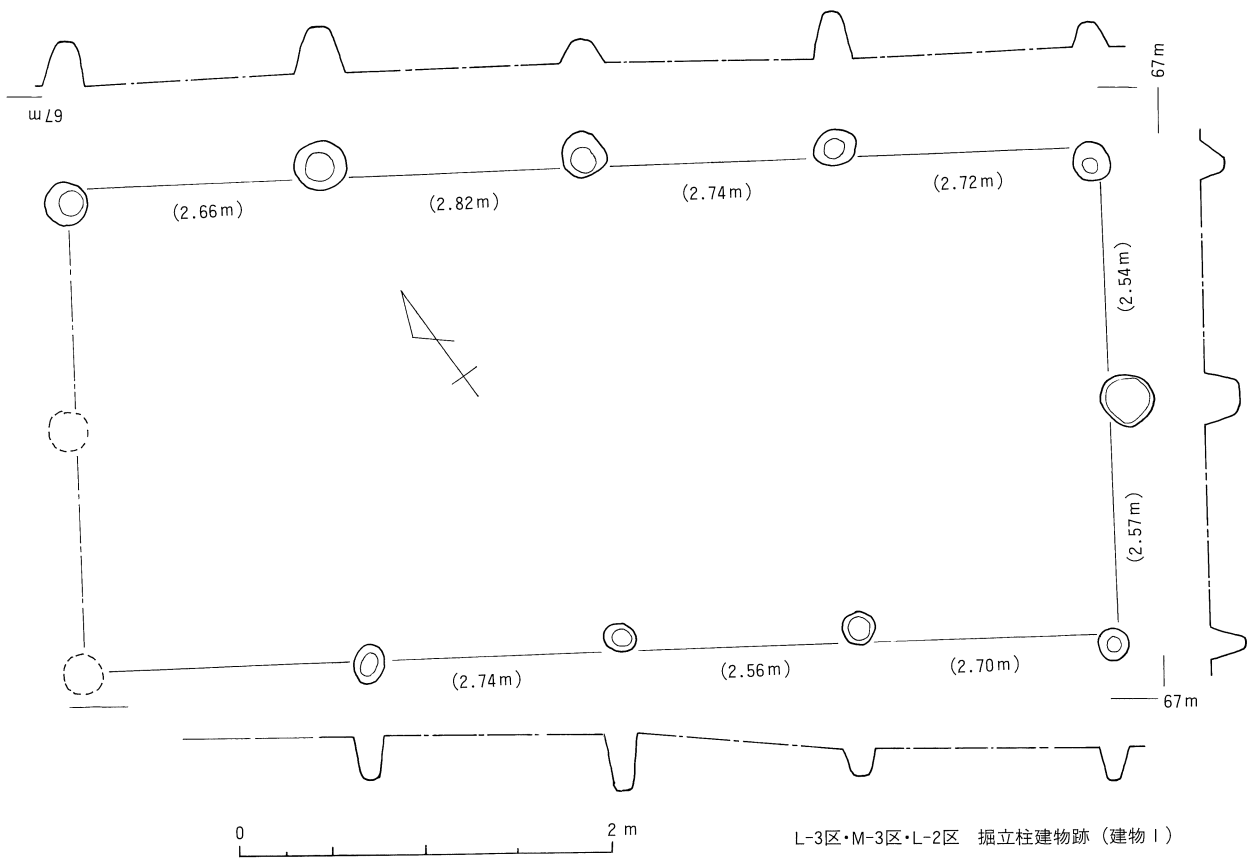
a. 掘立柱建物跡（建物1）・柱穴群

掘立柱建物跡は、長軸を北西―北東方向にとり、梁行約5.11m、桁行約10.94mあり、柱穴は径0.3～0.1m、深さ0.3～0.15mである。その外の柱穴群は、この建物方向に沿うように、長方形の範囲にまとまっている。さらに、この建物の柱穴周辺の柱穴には重複関係がある。これらのことから、若干の移動はあるもののほぼ同一地点で幾度かの建て替えが想定された。年代は、柱穴内の出土遺物（第61図参照）から大きく14世紀後半から15世紀中頃と16世紀後半代に



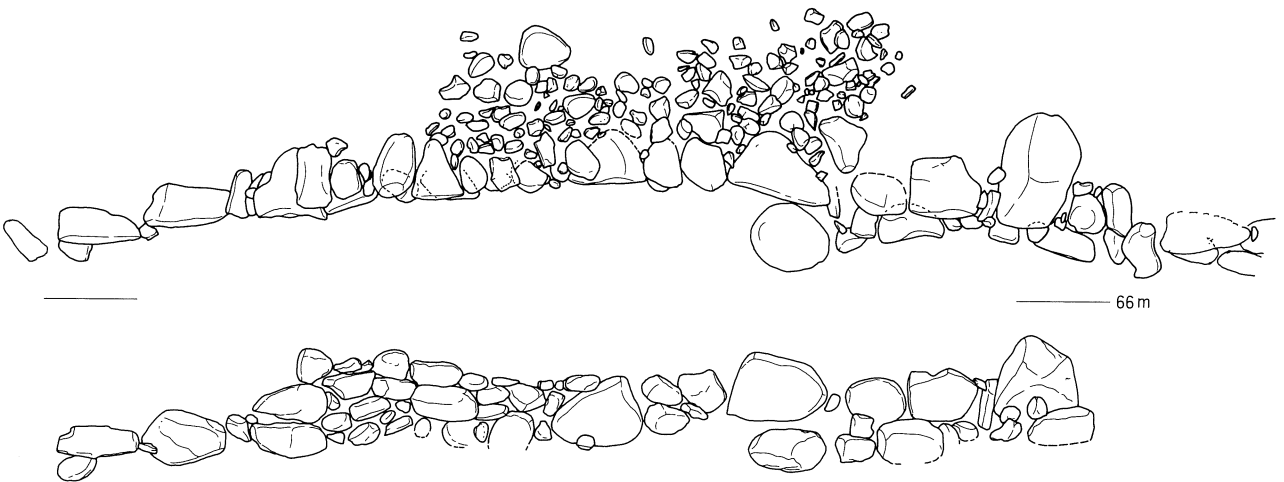
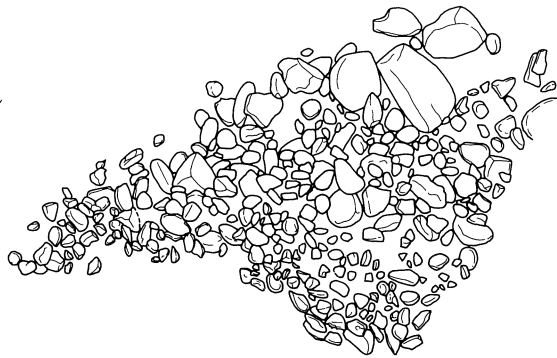
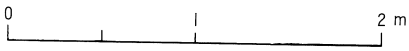
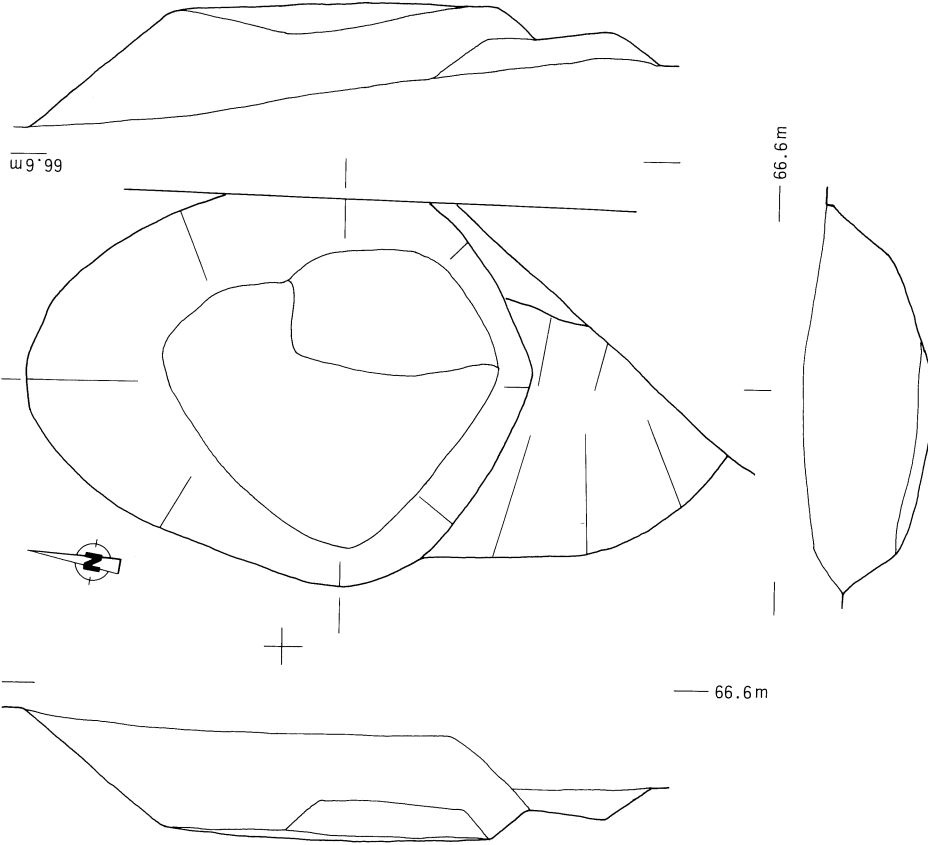
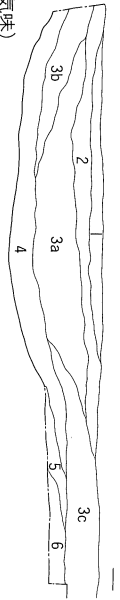
第58図 北西地区の中世遺構分布図

分けられる。確認された出土遺物は細片で実測できなかったが土師器の特徴から16世紀後半であろう。柱穴から出土した遺物は、土師器小皿、坏、瓦質すり鉢・火鉢、備前大甕、輸入青磁などの破片が出土した。



第59図 北西地区の主要遺構実測図

- 1 黒褐色粘質土層
- 2 // (白色粒・黄色気味)
- 3a // (白色粒・円礫多混)
- 3b // (白色粒・少)
- 3c // (砂質強い)
- 4 黒褐色土粘質土層(砂質・炭多混)
- 5 暗褐色土層(若干の炭混)
- 6 暗黄褐色粘質土層(地山)



第60図 J-2区・1-2区大形土坑 1-2石垣遺構実測図

b. 土坑

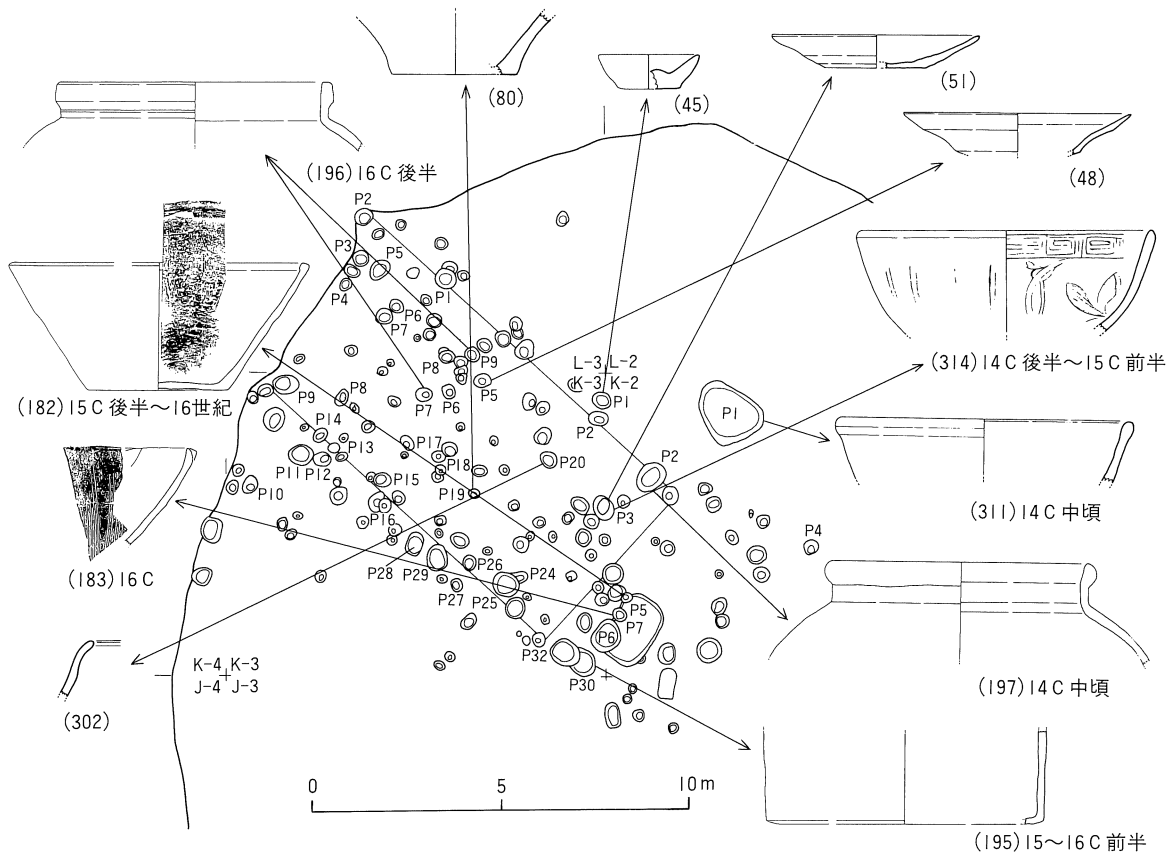
北西隅の掘立柱建物跡や柱穴群に接する位置に2基（K-2区）とやや南に位置（I・J-2区）する大形土坑1基が検出された。

K-2区土坑（Pit 1）は、長径約1.9m、短径約1.5m、深さ約0.25mの不定楕円形を呈す土坑である。なかから、14世紀中頃の青磁碗と製錬滓1点が出土した。K-2区土坑（Pit 7）は、長径約1.8m、短径約1.2m、深さ約0.35mの隅丸長方形を呈する。遺物は、16世紀後半代の瓦質すり鉢と羽口破片が出土している。

大形土坑は、長径約2.7m、短径2.1m、深さ約0.55mの長楕円形を呈するすり鉢状の土坑である。遺物は、土師器小皿、坏、土師器碗、瓦質鉢、備前すり鉢など12世紀から16世紀代の土器や陶器とともに、製錬滓、炉内滓、鉄塊系遺物、炉壁溶解物など鉄生産関係遺物18点が出土した。

c. 整地層

北西地区全体に検出された。整地層はH・I-1・2・3区あたりで上段と下段の二段に分かれており、その境に南西-北東方向に積まれた石垣が新たに検出された。この石垣はおおむね東西方向に区画される現水田区画と方向を異にするものであった。石垣の構築は整地後掘方を設け積み上げていく工法ををとらず、整地作業に伴って随時河原石を積み上げるといった工程で、石垣裏には裏込めに準じる礫を幅約2mに渡り帯状に敷き詰めていた。現状の整地層の厚さは上下段とも約0.7mから0.8mで、石垣は良好なところで4段ほどが残存していた。この整地層から出土する遺物は、上段と下段とはその下限時期が異なっていた。すなわち、上段が16世紀後半までで、下段は18世紀後半以降の遺物が混入している。しかし、下段の18世紀後半以降の遺物は下層には認められず上層の水田造成に関わるものと考えられ、下段についても上半部はなくなっている。したがって、整地層は上段、下段とも16世紀末以降に一度造成され、18世紀後半以降に再度上層部が造成されたものと考えられる。



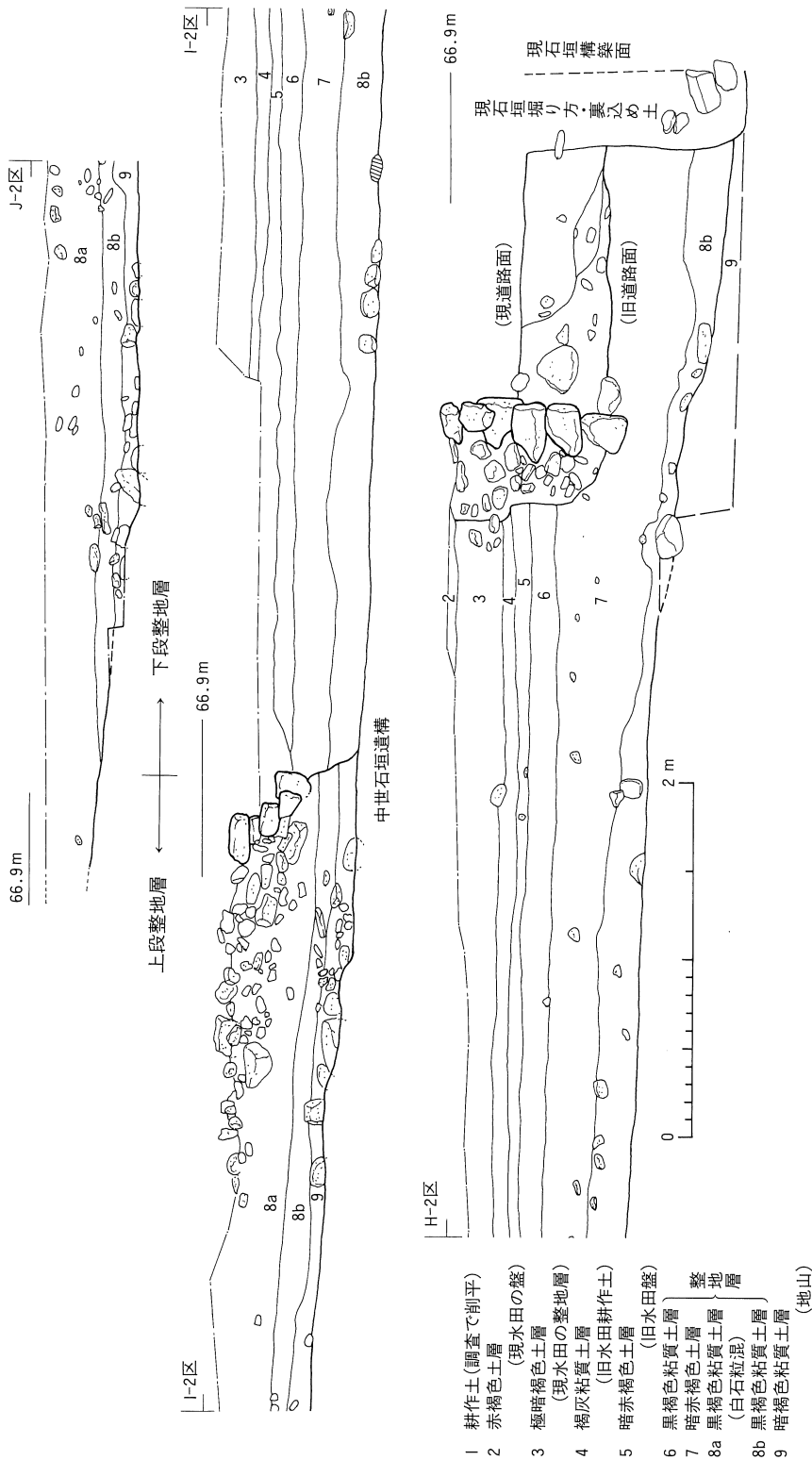
第61図 調査区西地区の遺物分布

※Pitは区画ごとの番号で示している

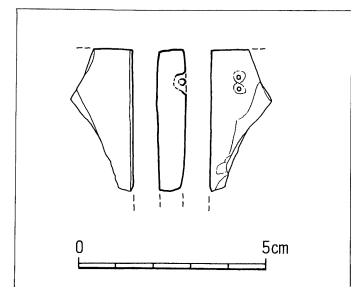
整地層出土遺物の下限は、上記の通りであるが、上限についてみると11世紀後半から13世紀後半にかけての遺物も相当数混入しており、この地区においても東地区と同様な遺構が存在していた可能性が強い。遺物は、こうした11世紀から18世紀にかけての土器や陶器、輸入磁器、土錘などとともに、羽口や鉄滓など鉄生産関係遺物も数多く検出された。その内、炉内滓、炉壁溶解物。鉄塊系遺物が量的に多い。

最後に、注目される遺物としてI-2区の石垣内から石帯1点が発見された。大部分が欠損しており、現状で長径3.8cm、短径1.7cm、厚さ0.6~0.8cmである。形態は方形の石巡方（潜り穴）タイプと考えられる。色調は漆黒色で、石材は奈良県二上山産のサヌカイトと思われる。全体的に研磨され、表面は光沢を有している。裏面左側には潜り穴の内、一対穿たれているのが確認できる。

さて、石帯などの腰帯具は、一般に8世紀後半から9世紀前半ころ出現し、律令体制の官位や位階などの上下を示すと考えられていたが、近年の研究によれば、こうした腰帯具の大小と官職はかならずしも対応しないとの見解⁽¹⁷⁾もある。田中広明氏によれば、在地社会において人格的にも経済的にも優位にあった郡司層や富豪層は、自己の社会的経済的地位を安定させ、さらに高めていくため、位階と官職を欲し、結果的に国府や郡家に出仕する際、朝服、制服を着用し、腰に腰帯を締めた。ところが、地方の末端支配が、郷司制へと転換する10世紀から11世紀



第62図 K-2区・J-2区・I-2区・H-2区南北トレンチ東側土層断面図



第63図 石帯実測図

のかけては、国府や郡家の政庁の姿は不透明となり、社会全体も官僚制から主従制へと変わる中、律令制的な身分表象の場は、宮内から貴族の政所、国府、郡家政庁の前庭から国司の館へと移り、「配列」から「着座」へと転換していくことで、腰帯の機能は失われていった⁽¹⁸⁾とされる。

この横手川流域の開発が、郡司紀氏に関わる可能性が高いことはすでに述べた。とすれば検出された石帯はこの紀氏及びその一族に下賜されたものとする事もできよう。しかし、調査区内からは11世紀後半を遡る遺構・遺物は検出されておらず、出土地点も16世紀末頃の整地層に伴う石垣内であることから、その性格や位置付けについては不明と言わざるを得ない。今後、調査区周辺地区の調査に注視していく必要がある。

註

- 1 渡辺澄雄 『豊後国荘園公領資料集成(3)』別府大学図書館1986
- 2 五十川信矢「古代・中世の鉄製遺物」『国立歴史民俗博物館研究報告第16集』1992
- 3 国東町史刊行会『国東町史』1973
- 4 飯沼賢司 「『鍛冶の翁』と『炭焼小五郎』伝説の実像—中世豊前・豊後の金属生産の問題—」『中世の風景を読む 7—東シナ海を囲む中世世界』網野善彦・石井進編1995
- 5 金田信子・藤本啓二編『国東地区遺跡群発掘調査概報I 由井が迫製鉄炉遺跡・安近炭焼き窯』国東町教育委員会1990
- 6 藤本啓二 「大分県国東町原第IV遺跡調査報告」たたら研究会レジメ1994
- 7 注6の資料
- 8 注6の資料
- 9 金田信子・藤本啓二編『重藤遺跡・下平遺跡』国東町教育委員会1991
- 10 国東町教育委員会の藤本啓二氏よりご教示(未報告)
- 11 小林昭彦編「安平遺跡」『中津市伊藤田地区遺跡群』大分県教育委員会1987
- 12 行時志郎編『長者原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集日田市教育委員会1992
- 13 注4の文献
- 14 小柳和宏 「鎮西における居館の出現と展開—豊後大友一族を中心として『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社1994
- 15 注4の文献
- 16 注3の文献
- 17 亀田 博 「鏝帯と石帯—出土鏝・石帯研究ノート」『考古学論叢 関西大学考古学研究室開設参拾周年記念』1983
栗田勝弘 「会下遺跡」『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書1・大分県文化財調査報告第83輯』1991
- 18 田中広明 「官衙及び関連遺跡と腰帯」『日本考古学協会1995年度茨城大会 シンポジウム3 地方官衙とその周辺』レジメ1995

(2) 遺物

この遺跡を代表する遺物は何といっても調査区全域で検出された大鍛冶、小鍛冶に関連する鉄屑(鉄滓)である。この鉄生産に関する鉄滓については次項で述べることにして、ここでは生活遺物について整理する。

検出された遺物群の大半は、いわゆる包含層出土である。なかでも発掘区の南西地区(C・D・E・F, -1・0・1区)で約2mほど低い水田の、北側の湾曲した畦畔に沿うように検出された幅約8mの流路状の浅い窪地内、北西地区で検出された石垣の築成にともなう整地層内(I・J・K, -2・-3区)、さらには、石垣南側(H0~3, I-1区)の整地層内において多量の遺物が出土した。その外、量的には少ないが調査区東地区のピット群や石組み遺構、北西部の掘立柱建物跡(建物1)周辺のピット群、大形土坑などの遺構内から遺物が検出された。

検出された遺物には中世と近世のものがある。中世の遺物には、土師器碗、土器(かわらけ)坏・小皿、灯火器、鉢、土鍋、土釜、滑石製石鍋、瓦質釜、瓦質火鉢、瓦質火入れ、瓦質すり鉢、陶製すり鉢、陶製甕、陶製壺、土錘など多量の国産製品とともに、白磁碗・皿・合子、青磁碗・皿・香炉など中国製の貿易磁器、銅銭がある。出土量は多くない。近世の遺物は中世に比較して出土量は少量であった。唐津皿、陶製すり鉢、急須、焜炉、鉢、

瀬戸美濃系植木鉢、土製人形、肥前系磁器の碗・皿・瓶などの日常雑器類とともに銅製の小柄が検出された。

遺物群の年代は、大きく中世と近世に大別できるが、いますこし細かくみると①11～13世紀（平安後半～鎌倉時代）、②14～15世紀（南北朝～室町前期）、③16世紀（室町後期・戦国後期）、④17世紀前半、⑤18世紀後半～19世紀の5つの時期に分類され、①の時期に所属する遺物群が最も多く、次に⑤→③→②→④の順となり④は数点の出土であった。これら各時期に所属する遺物群の分布は、最も出土量の多い①は、鍛冶遺構の検出された調査区東地区のピット群周辺と西地区の流路状の窪みや調査区北西部の整地層内（主にH-0区・H-1区・H-2区・I-1区・I-2区・J-2区）で出土しているが、後者の地区では14～16世紀の遺物も多く包含し、前者は14世紀以降のものは含まない。②・③は、①と異なり調査区北西部で検出された石垣遺構北側の整地層や掘立柱建物跡周辺に集中する。近世期の遺物は、泉福寺参道側の調査区東地区及び北西部石垣南側の下段整地層内でその大半が検出された。それでは、次に各遺物について見ていくことにしよう。

1) 土器・瓦質土器・焼締陶器

a. 土器（かわらけ・1～83）・第64図～67図

坏、小皿、特小皿の3器種が出土した。中世期の土器は、近年の調査によって数多くの形式が認識されてきており、地域差（おそらく郡単位程度か）のあることが次第に明らかとなってきた。しかし、現在のところ一地域において古代から中世にかけて系統的な型式変化（法量変化等）をおえるところはほとんどなく、不十分であるが宇佐神宮を中心とした宇佐地域が最も進んでいる。

筆者は、以前、大分の中世土器について3系統設定した⁽¹⁾ことがある。すなわち、A系列—古代のヘラ切り離し技法の坏から糸切り離し技法の坏に転換し（10世紀後半代）、法量の縮小化にともなって小皿が出現する。さらに、14世紀に特小皿が出現する。このロクロ系坏・小皿に系譜をもとめるもの。B系列—京都系の精良粘土を使用した非ロクロ系土器に系譜をもとめるもの。この土器は、15世紀後半ころ豊後の大友館跡周辺地域でまず出現（九州では外に肥前名護屋城・陣屋跡群等で検出されている。）し、若干の型式変化をとげながら戦国から近世期にかけて豊後を中心に拡散していく。出現段階から4～5形式程度の法量分化をおこしている。C系列—糸切り離し技法のロクロ系土器である。底径が小さく底径と口径の比が1：2程度で直線的に開き、ロクロ痕を良く残すもの。おそらくB系列の非ロクロ系土器と同時期かやや後出して出現すると思われ、16世紀には北部九州など広範囲の地域で認められる。

以上であるが、その外、10世紀後半ころ豊後地域のヘラ切り離し技法から糸切り離し技法転換に影響を与えたと思われる防長系の円盤高台の坏（臼杵市堂メキ遺跡、大分市豊後国分寺跡、大分市地藏原遺跡など）や宇佐地方に認められる太宰府系坏などが確認される。

今回検出された坏・小皿を、体部の形態や法量から分類すると小皿は3種10類、坏は2種8類に細分でき、A系列を中心に一部C系列が検出された。さらに、このようなA・B系列以外のものに、器高が高く体部が大きくラッパ状に開く坏（78～83）が検出された。この坏は、近年佐伯市古市遺跡や安岐町安岐城跡など大分の沿岸部で散見できる坏であり、現在のところ高知県中部地域の芳原城、田村遺跡群、岡豊城跡などで、C系列の坏（この地方では16世紀前半から中頃にかけて非ロクロ系土器から転換する。⁽²⁾）とともに類似の坏が確認される。これを今回D系列と仮称する。

1～53が小皿及び特小皿、54～77が坏ですべて回転糸切り離しによるものである。1・2（小皿a I）は、底部と体部の境が不明瞭で全体的に丸く、口縁部が内湾するもの。3～21（小皿a II）は、底部と体部との境がやや不明瞭で、内湾気味に立ち上がるが、口縁中位でやや外方向に開き、口唇部先端が基本的に尖るもの。22～28（小皿a III）は、a I・a IIと異なり底部と体部との境が明瞭で、口縁部中位で稜をもちかるく屈曲して外方向に立ち上がるもの。29～33（小皿a IV）は、体部はa IIIと同様であるが、回転糸切り離しによる底部が厚く、円盤高台状のもの。34～41・47（小皿a V-1）は、底部と体部の境は明瞭であるが、口縁の立ち上がりが短く、三角形の断面のもの。42・43（小皿a V-2）は、形態は小皿a V-1とほぼ同様であるが、口径が1cmほど小さいもの。以上の小皿は、調査区西部の流路状の窪みと東地区ピット群周辺で集中して出土した土器で、形態はやや異なるが色

調は灰黄褐色ないし淡黄褐色を呈し、胎土・焼成にも共通性があり、小皿a V-2を除き、器高(1.6~1.2cm)や底径(7.3~6.1cm)にややバラツキがあるものの口径は9.1~9.2cm前後に集中する。44(小皿a VI)は、推定口径が11.4cmで器高が高く(2.4cm)、口縁部の立ち上がり大きいもの。45(小皿b2)・46(小皿b1)は、特小皿に属し、色調は褐色ないし橙色で、法量の差により細分する。48~53(小皿c)は、C系列に属する小皿である。きわめて薄くシャープな造りである。灰白色ないし白黄褐色を呈す。この小皿b・cは、小皿a I~Vの土器と分布範囲が異なり、北西地区の整地層や掘立柱建物跡周辺のピットから検出されている。

54~63(坏A I-1・2・3)は、体部と底部の境が不明瞭で、口縁部が内湾気末に立ち上がるもので、法量の差によって口径16cmほどの坏A I-1(61~63)、口径14.5cm前後の坏A I-2(57~60)、口径12.8cm前後の坏A I-3(54~56)に分類される。64~69(坏A II-1・2)は、厚く安定した底部にをもち、体部下位で屈曲するもの。これも法量の差によって口径16cmほどの坏A II-1(68・69)と坏A II-2(64~67)がある。70~75(坏III)は、口径15.5cm前後の坏で、底部から直線的に開く体部のもの。76(坏A IV)は、推定口径17.7cmで底部と体部の境が不明瞭で、体部も坏A Iと同様の特徴をもつが、器高が3cmほどで浅い。77は底部が厚く円盤高台状を呈し、口径は16cm前後と想定されるが体部の形態は不明である。78~83(坏B)は、今回D系列として仮称した土器で、法量のわかる78では口径12.7cm、器高4.4cm、底径7.7cmあり、他の坏に比べ器高が高い。これら、坏の分布は、坏Aは調査区西部の流路状の窪みに集中し、一部調査区東地区のピット群周辺に見られる。したがって小皿aと組み合わせる。坏Bは、小皿b・cと重なる分布を示し、特に小皿b1は色調・胎土・焼成がきわめて類似し、形態も相似形である。

これら小皿・坏の時期についてみると、まず分布が重なるA系列の小皿aと坏Aは、何れも単品や包含層内出土といった性格から一括品として捉えることができない。包含層から出土した後述する輸入磁器の時期幅は、11世紀後半から14世紀前後の約200年の幅があるが、12世紀前半~13世紀前後に属するものが大半である。次に一括資料によって当該期の型式や法量変化の流れがある程度把握できる宇佐地方と比較してみると、弥勒寺跡SK8(小皿一口径9.7cm~8.9cm、平均口径9.3cm、確立95%による信頼区間8.9~9.6cm、坏一口径17.1cm~14.4cm、平均口径15.5cm、確立95%による信頼区間14.8~16.3cm)→藤田遺跡SK5(小皿一口径8.4~9.4cm、坏一口径15.5~15.9cm)→藤田遺跡SK17(小皿一口径8.2~9.5cm、坏一口径14.3~15.5cm)→藤田遺跡SK31(小皿一口径8.1~9.1cm、坏13.9~14.9cm)→弥勒寺跡SE3(小皿一口径7.7~8.7cm、確立95%による信頼区間7.9~8.1cm、坏一口径12.6~14.3cm、確立95%による信頼区間13.2~13.8cm)の5遺構⁽³⁾の法量変化の幅にはいり、時期は12世紀第2四半期から13世紀第1四半期の間と考えられる。ただ、小皿a I~Vの法量差はあまりなく9cm前後を中心としており、宇佐地方の法量変化と完全には一致しないが、小皿a I・IIは12世紀中頃を中心とし、小皿a IIIを12世紀後半、小皿a IV・Vを12世紀後半から13世紀前半頃、坏A I-1・坏A II-1・坏A III・坏A IV(これらは生産地・工人の差によると考えられる。)を12世紀前半から中頃、坏A I-2を12世紀後半、坏A I-3・坏A II-2を12世紀後半から13世紀前半ころと考えたい。小皿a VIは、分類上では小皿としたが、宇佐市大楽寺跡で類似の坏が出土しており、むしろ小皿b1とセットにしたほうがよさそうである。とすれば15世紀前半なる。次に、調査区北西地区に分布する小皿b2・小皿c・坏Bであるが、この地区からは、14世紀後半から15世紀の輸入青磁、16世紀の備前等が出土しており、この時期幅のいずれかに所属すると思われる。C系列出現時期は、15世紀後半から16世紀前半ころで、16世紀後半代を中心にすると考えられるが、小皿cの特徴は、16世紀末から17世紀前半と考えられる杵築小学校校内遺跡出土のものに類似する。小皿b2・坏Bも出現は小皿cほぼ同時期で、やはり16世紀後半を中心にすると考えられる。

b. 黒色土器・土師器碗(84~110)・第67図

84・85は、黒色土器A(内黒土器)である。84は、推定口径16.6cmで浅い体部に復原され、口縁端部がやや外反し、内面にヘラミがきがある。85は、底部破片で、内面にヘラミがき、断面三角形の高台をもつ。86~110は、土師器碗である。底部破片が多く全体の形態を把握できるものが少ないが、体部は少し内湾しながら立ち上がり、口縁端部がやや外反するもの(87)としないもの(86・88・89)があり外反しないものが多い。推定口径をみると、

11,6と15,9～16,8cmの大小の壺がある。高台は、1cmを越える高いものはないが、比較的しっかりと安定するもの(90～107)と低いもの(108～110)がある。高台断面も、四角形状(97～104・108～110)と三角形のもの(90～96・105～107)がある。内外面の調整は基本的に平滑ナデ仕上げで、95の外表面及び107内面の一部にヘラみがき調整がある。色調は灰黄褐色ないし淡黄褐色を呈し、100・102・107は精良粘土を使用し、他の壺の胎土も比較的きめの細かい良質粘土である。注目すべき事項として、大半の高台内面はナデ消されており不明であったが、96・98・104・105において、糸切り離し痕(回転か)が確認された。このことにより、壺部(体部)ロクロによる成形→糸による切り離し→高台の貼付→平滑ナデ仕上げ・ヘラ(一部みがき)調整といった製作工程が想定された。96の高台内にはヘラ記号がある。出土範囲は、土器(かわらけ)と同様に大きく二つの地区に分けられ、大半が調査区西部の流路状窪みと東区ピット群周辺であるが、86・99・101・109が調査区北西部である。なお、86・89・96・110は、土師器の色調であるのに、胎土や焼成は、次に述べる瓦器壺ときわめて似た特徴をもち、特に86の小型壺は瓦器壺132と酷似している。

さて、これら黒色土器・土師器壺の年代であるが、両土器とも一部の時期以外豊後地方の状況があまり、はっきりしないので、宇佐地方(12世紀になると深壺から浅壺が多くなる。両黒のB類壺は激減し、A類壺が中頃まで定量存在し、比較的遅くまで残存する。⁽⁴⁾)との関係でみると、黒色土器は藤田遺跡SK6出土のA類壺に近く12世紀中頃であろうか。土師器壺は、86の小型壺を除く、体部が浅く口縁部が内湾して立ち上がり、高台断面が四角形状と三角形のものがあり、三角形の高台には高くしっかりとした段階からやや低い段階のものなどがある。こうした特徴からみると、12世紀前半から13世紀前半の間(土師器壺は、太宰府周辺では12世紀初頭段階で消滅し、瓦器壺が取って変わるが、豊前北部・南部地域では、激減するものの12世紀後半から13世紀中頃まで残存する⁽⁵⁾)に比定でき、高台断面が四角形段階のものは12世紀前半、三角形で高くしっかりとした段階を12世紀前半から中頃、低いものを12世紀後半から13世紀前半頃と考えられる。86の小型壺は、本地方において注目される土器であり、次の瓦器壺のところで述べる。

c. 瓦器壺(111～134)・第68図

111は、他の壺に比べ器壁がきわめて薄く、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部外面の横ナデにより端部がやや直立する。浅壺タイプで底部は欠損しているが小規模な高台と考えられる。胎土は精良粘土を使用し、内面に幅2mm程度のヘラみがきがあり、器表面はやや光沢をもつ平滑仕上げである。灰黒色を呈し、軟質だが焼成は堅緻である。九州において13世紀以降顕著になる関西系の和泉型壺の可能性が高い。112～134は在地系と考えられ、形態や糸切り底(ナデ消されているが122・129・130・134などに顕著に残る)、ヘラ記号(134)の存在など前述した土師器壺との共通性が多い。112・113・129～132は、体部が内湾しながら立ち上がるタイプであるが、調整や高台、法量によって分類する。113は、浅壺で高台が四角形状、調整は平滑ナデ仕上げであるが、体部外面下半部に指頭圧痕がわずかに残る。112も同形態と考えられる。129・130は、坏AⅠ-1の体部にわずかに三角形の高台をつけたような壺である。貼付高台ではなく、糸切り離しの後、底部周辺を強く水びき引っ張り出すことにより形造る。131も同形態であろうか。132は、すでに述べたように、小型の土師器壺86と酷似するもので、口縁端部がやや肥厚し、シャープな三角形の高台に、丁寧なナデ・ヘラみがきを施すが、外面下半部にわずかな回転ヘラケズリ風の調整痕を残すことを特徴とするもので、焼成はきわめて堅緻である。114・115は、体部上位でやや屈曲し口縁が外反するものであるが、114は深壺的で三角高台に不明瞭だが体部下半に指頭圧痕が認められ、115は指頭圧痕がなく四角高台の浅壺である。116～134は底部破片で断面四角形と三角形の高台があり、高いものと、低い(125～128)ものがある。

さて、年代であるが、115・129・～131は11世紀後半か12世紀初頭頃出現する内・外面の入念なヘラみがきに安定した四角高台の瓦器壺に比較すると、内外面の入念なヘラみがきがなく回転ナデ仕上げであるが、まだ体部下半に圧痕が見られない段階であり、12世紀中頃であろう。ただ、129・130タイプの壺は類例に乏しく得意な形態である。この期の安定した貼付高台とは大きく異なるが、形態や調整から13世紀後半以降の退化型ではなく、例えば土師器工人が瓦器壺を模倣しようとしたとき生じる現象とは考えられないだろうか。112・113は、まだ丁寧な造

りであるが体部下半に若干の圧痕が認められ、12世紀後半、114は13世紀前半から中ころに比定され、底部破片の内、さらに高台が小さく退化した125～128は13世紀後半であろう。132は、形態的には土師器碗86に酷似することはすでに述べたが、この瓦器碗（小型碗）は、豊後高田市船塚横穴墓の調査によってはじめて認識されたものであり、国見町鬼塚古墳、宇佐市下林遺跡等の4遺跡目となり、現在のところ宇佐から国東中部以北で検出されている。以前この瓦器碗について、黒色土器B類から派生する出現期の瓦器碗に類似するものの、宇佐市弥勒寺跡や高森城跡、安岐町安岐城跡など16世紀代の遺物とともに出土する瓦質の小型碗の先行型式と想定し、別系統（例えば木碗の模倣形態）の碗の存在を指摘した⁽⁶⁾。しかし、その出現時期についてははっきりしなく一応14～15世紀の間としておいた。再度この瓦器碗を発見したことからその位置付けに期待されたが、検出地区が86・132とも14～16世紀の遺物で構成される北西地区であり、今回も供伴遺物から明確な出現時期を決定することは難しい。ただ、12～13世紀の遺物集中地区では検出されなかったことは確かである。とはいっても出現期の瓦器碗との共通性も捨てがたく、国東地域において今後注視していく必要がある。

今回12世紀代に比定した瓦器碗は、いわゆる還元燻焼（炭素の吸着）が弱く、器表面が黒くないし灰黒色を呈するものは少なく、灰褐色を基調とするものが多い。一見土師器碗的である。しかし、重ね焼き痕や外面指頭圧痕の有無、焼成の差などから瓦器碗と認定した。百瀬正恒・橋本久和氏は、11世紀中頃を前後する時期に焼成法や胎土の改良がなされ、碗と大小の坏・皿に器種構成が集約され、畿内と北部九州を含めた瀬戸内全域の中世土器が成立する。すなわち、畿内では瓦器が、岡山から広島県東部地域と山口県から北九州にかけての地域では土師器碗が出現する。この土師器碗には前代の須恵系土師質土器と技術的に断絶する岡山・広島地域と、関連の認められる山口・北九州地域と差があることから、前者を吉備系土師器碗（早島式土器）⁽⁷⁾、後者を防長系土師器碗と呼ぶ⁽⁸⁾とし、この焼成法の改良について谷口俊治氏は、土師器の色調が赤褐色から白っぽい灰褐色に変化することに注目して、土師器焼成窯が開放窯から閉塞可能な窯（煙管状窯）へ移行し、土器をやや還元気味に焼成し始めた結果であるとし、そしてこの変化は、瓦器の製作を可能にするだけでなく、多様な中世軟質土器の製作をも可能にしたとする⁽⁹⁾。前述した土師器碗は、百瀬・橋本両氏の分類にしたがえば広義の防長系土師器碗にあたり、色調の特徴から谷口氏の言う還元気味に焼成された結果であると言える。さらに、この土師器碗と共通点の多い瓦器碗が遺構一括ではないが同一地区でまとまって出土するといった状況は、国東地域においても閉塞可能な新しいタイプの焼成窯へ移行した可能性が強く、今回検出された瓦器碗は、まさにこの段階の瓦器生産の状況を物語っていると考えられる。しかし、この地域は、本報告書付篇2で述べているように宇佐宮勢力の一翼を担う、在地領主紀氏の開発に関るところとであり、宇佐周辺からの持ち込みとも考えられ、今後十分な比較検討が必要であろう。

d. 須恵器（質）鉢・瓦質鉢・釜（135～155）・第69図

135～143は、神出・魚住窯系のいわゆる東播系須恵器（質）片口鉢の口縁と底部の破片である。そのため、全体の姿は不明であるが、口縁部の形態によって分類すると、口縁端部を水平に仕上げる136、口縁端部が凹み上下にやや張り出す135、口縁端部上位をわずかにつまみ出し肥厚する139・140、口唇部上位をさらにつまみ出し玉縁状の137・138などがある。これを荻野繁春氏の編年観に従って消費地（福岡地方）での分析を行った井沢洋一氏の年代⁽¹⁰⁾によると、136は12世紀前半、135は12世紀中頃前後、139・140は12世紀後半から末、137・138は、13世紀前半から中頃とすることができる。一般にこの東播系須恵器が西日本に普遍的に普及するのは13世紀前半以降とされていることからみると、12世紀代の早い段階にこの国東地方に流入していることは注目される。144～148は、瓦質（瓦質A）の鉢（こね鉢）である。これも口縁部破片で全体の形が不明であるが、おそらく在地における東播系鉢の模倣型と考えられる。147・148の年代は東播系の模倣であれば12世紀代となる。しかし、この段階で在地で瓦質鉢が生産されたとするには現在のところ無理がある。144～146は13世紀後半から14世紀前半代であろう。149～152は、焼成が瓦質（149・150）と土師質（151・152）に分かれるが、同形式であるので土師質もここで扱う。器種は釜である。口縁部に上面がやや窪み、断面逆「L」字状を呈するもので、151・152は赤焼けの瓦質（瓦質B）釜であろう。宇佐市城遺跡（29土坑）や大田村岡ノ前遺跡（4号溝）等で出土しており、瓦器碗等の供伴遺物から

14世紀前半代である。153・154は、瓦質Bの鉢であが、154は類例がないが、153は、宇佐市弥勒寺S D 9 や安岐町安岐城出土のものに口縁部が類似し、15世紀後半から16世紀であろう。155は、大形の浅鉢で近世高村焼(宇佐市)こね鉢の初源的なタイプ⁽¹¹⁾と想定される。断面四角形の高い高台をもつ体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を小さく外方向に曲げ面をなすもので、16世紀前半代に比定される中津市ズリヤネ城跡第4号土坑出土の鉢に最も近い。

e. 石鍋・土鍋・土釜(156~178)・第70・71図

156~159は、滑石製鍋である。156・157は、口唇部の断面が四角形に整形されたもので、156は推定口径31,4cmの大型の鍋で、器壁が2cmと厚い。両側穿孔の蔓取手穴がある。157は中型と考えられ、器壁が10,4cm前後で薄い。おそらく口縁下に台形状の鐔をめぐらすと思われる。158・159は、口唇部を丸く整形したもので、口縁下に台形状の鐔をめぐらしているが、159の鐔はやや垂下がる。

これら滑石製鍋の産地は、長崎県西彼杵半島周辺と考えられており、数多くの製作跡が確認されている。木戸雅寿氏の分類⁽¹²⁾によれば、鐔がやや垂下がる159はⅢ-b類、他はⅢ-a-2類となり、鐔付きの瓦質釜や土師質土器釜の影響を色濃く受けたと考えられるもので、年代は13~14世紀である。160~178は、土鍋・土釜である。160・161は釜で、体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は内側に斜めに面取りするもので、口縁よりやや下に貼り付けた鐔をめぐらす。このタイプの釜は、一般に三足をもち、胎土・焼成の特徴から162はこの釜の足(脚)であろう。県内における初源タイプは、おそらく11世紀前半ころの弥勒寺S K-3出土の畿内系釜(報告書では鼎⁽¹³⁾)・やや後出的な弥勒寺S K-6・野津町水地遺跡出土の釜と考えられ、ひしゃげた半球形状の体部に、大きく内湾する口縁をもち、やや上向きで幅広の鐔を口縁下にめぐらす、その位置はかなり下位にある。その後、鐔の位置がしだいに上り、幅は縮小化の方向へ推移し、最終段階には貼付けず口唇部から引伸ばしわずかに痕跡を残す程度に形骸化(臼杵石仏遺跡群出土釜などがあり、全て瓦質化している。)する。その時期は14世紀代であろう。今回検出の釜は、谷口氏のⅡ類⁽¹⁴⁾にあたり、弥勒寺S E-3・三光村佐知遺跡などで同様のものが出土しており、12世紀後半~13世紀前半頃である。163~166・168・169は、防長系の足付土鍋である。体部から外方向に一度屈曲して立ち上がる口縁部の端をつまみ上げ肥厚するもの(163~165・その内、口縁部の短い164とやや長い163・165がある。)、口縁部が内湾するもの(166・168・169)などがある。163~165は岩崎仁志氏⁽¹⁵⁾の足鍋Ⅲ型式にあたり、口縁部の短い164は弥勒寺S K-9出土の鍋と同タイプであり、岩崎足鍋Ⅱ型式に近く12世紀後半から13世紀初頭前後、口縁部のやや長い163・165は、14世紀代⁽¹⁶⁾であろう。166・168・169は岩崎足鍋Ⅳ型式、谷口Ⅲ類にあたり、岩崎氏によれば15世紀初頭以降、谷口氏では166は14世紀後半、168・169は15世紀代となる。167は口縁部がやや屈曲し、外反するが口縁部を丸く仕上げている。おそらく岩崎足鍋編年Ⅵ型式(16世紀代)の鍋Aタイプのもと思われる。

170~178は土師器(質)鍋である。

170~173は逆「L」字状の口縁で、170・171は肥厚する。174~178は内湾する胴部から小さく外反する「く」字状の口縁をもつ。174は胴部が深く鉢形、177・178は半球形を呈する。灰褐色系統の色調に、基本的には内外面ともナデ仕上げであるが、176の体部内面にヨコ方向のカキ目状刷毛、178の体部外面・口縁内側に刷毛調整がある。このタイプの鍋について佐藤浩司氏は、豊前国企救郡の煮沸具を整理するなかで、8世紀後半に成立(出現)する特徴ある企救型煮沸具の甕の系譜を、畿内古代都城域にもとめ、10世紀の球形胴部に外面タタキの甕を経て、11世紀にタタキが消失し、胎土の改良された浅い鍋形の煮沸具となり、12世紀に大量生産されるようになる⁽¹⁷⁾とする。そして谷口氏によると11世紀から14世紀にかけて、口縁部は縮小していき、体部がさらに浅く変化(鍋AⅠ~Ⅵ類)していくとする。すなわち、この鍋は広義の豊前型鍋(企救型鍋)とすることができ、出土した鍋の時期は、佐藤・谷口に従えば、175・176・178は11世紀、174・177は12世紀、170~173などは12世紀後半から13世紀前半となるが、出土地点(調査区西地区流路状落ち込み内)の遺物群から見た年代観は、12世紀以降と考えられ、上がっても11世紀後半であろう。

f. すり鉢・火鉢・甕・壺・天目碗・皿・焜炉・鉢・急須・灯火具・土人形 (179~220・318・342・343)・
第72~75・78・79図

179~188はすり鉢である。瓦質で口縁部が内側に肥厚するいわゆる周防型のもの(179~182)、口縁部がやや肥厚し内湾気味にたち上がる在地産と思われるもの(183)、焼締陶器で備前焼すり鉢(184・185)・堺焼すり鉢(186・187)・高台をもつ底部に小さく外反する口縁部をもち全面に鉄釉をかけた唐津すり鉢(188)などがある。周防型のすり鉢には、内側の肥厚が小さいタイプ(179)と四角形状に大きく肥厚する(180~182)がある。この周防型すり鉢は、15世紀後半頃在地産の土師質すり鉢が、瓦質に転化し16世紀を中心にして、一部17世紀まで生産⁽¹⁸⁾される。出現期は口縁部の内側の肥厚が小さいが、しだいに大きくなり、口唇部上に面を持つタイプに変化する。183は在地産としたが実のところ類例に乏しく今後の課題である。15~16世紀であろう。備前すり鉢の184・185の内、184は摺り目は8本を単位としてその間隔を広くとり、口縁部を三角形状に仕上げるもので15世紀中頃から16世紀前半である。185は直線的にのびた体部に、口唇部を内側に傾かせ面をつくり、断面四角形状の有段口縁には2条の沈線を持つ。摺り目はほとんど全面に施している。16世紀末頃であろう。堺焼すり鉢の186・187は、備前すり鉢と似た形態であるが、口縁の形態や焼成などから一応分類した。とすれば口縁部の肥厚化が最も顕著になった段階のもので、全面密に摺り目がある。堺焼すり鉢の最終段階のもので18世紀後半以降である。唐津焼のすり鉢も18世紀後半以降である。189~195・208・210は火鉢で、在地産のものと思われる。形態は深鉢形のもの(189~191・195)、浅鉢形のもの(210)・小型の鉢形のもの(192~194・208)などがある。深鉢形の火鉢は、口縁部と底部の破片が出土し、190・192・195がいわゆる赤焼けの瓦質火鉢で、外は灰色の瓦質火鉢である。これらの底部には小規模な逆台形の板状脚が3箇所つくと考えられ、口縁部や突帯の形態によって分類される。189・190は口縁下に2条の三角突帯をめぐらし、その間に巴文(189)・菱文(190)などのスタンプを押捺するが、突帯は低く細い。大分市植田市遺跡、玖珠町冷酒庵B遺跡溝1、安岐町安岐城跡、弥勒寺SD-9・SE-1等々広範囲の地域で確認され、15世紀後半から16世紀前半に位置付けられる。191は肥厚した断面「L」字状の口縁下に1条の三角突帯をめぐらし、その間に菊花文のスタンプを押捺するものである。玖珠町切株山城跡第5号土塁で数多く出土しており、他に冷酒庵B遺跡33土坑や臼杵市臼杵石仏群遺跡、安岐城、宇佐市下林遺跡SD-5・SE-1などこれも広範囲に分布する。

火鉢口縁部の肥厚化は、16世紀中頃以降と思われ、今のところ唐津溝縁皿(16世紀末~17世紀前半)と共伴する下林遺跡⁽¹⁹⁾のものが最も新しい。191はこの下林遺跡例に比較すると、肥厚度がやや弱く16世紀後半頃と考えられる。210は浅鉢形のものと考えますが適当な類例を知らない。16世紀であろうか。192~194・208は口径約10cm前後の小型のものであり、火鉢とするよりは香炉か火入であろう。口縁直下に菊花文(192)、花卉文?(193)、梅花文(194)などのスタンプを押捺するもので、体部が直口する192・208と内湾する193・194がある。年代は16世紀であろう。

196~200は備前焼甕である。口縁部が玉縁状のもの(197・199・200)、玉縁がやや垂れ下がりやや幅広のもの(196・198)などがあり、前者が15世紀から16世紀前半代、後者が16世紀後半である。

201は備前焼壺で、小さな玉縁口縁をもつ。16世紀後半であろう。202~205は須恵器(質)甕である。頸部及び胴部破片で全体の形は不明であるが、東播系と思われる平行タタキの甕(202~204)、亀山焼と思われる格子タタキの甕(205)がある。204は出土地区から12~13世紀と考えられるが、205は14世紀以降としか言えない。214は透明釉を掛けた壺であり、在地産と思われ18世紀後半以降であろう。

206・207は、土師質(赤焼けの瓦質)の焜炉と思われる。府内城三ノ丸遺跡SK33・SK34遺構や杵築小学校校内遺跡C区出土のものと同類似し、口縁部に窓を有し、ずんどうの体部に高い輪高台がつくものと思われ、在地産で19世紀後半から中頃⁽²⁰⁾である。

209・212・215・216・217は、鉢である。209は土師器質(赤焼けの瓦質)の鉢であるが、産地・年代は不明である。212は褐釉の小鉢で福岡系、19世紀であろう。215は唐津焼二彩鉢で、17世紀後半~18世紀前半である。216は幅広の玉縁口縁をもつ関西系陶器鉢である。胎土が黄灰色でを呈し、透明釉を掛けるもので19世紀前半から中頃であ

ろう。217は、竹田市上家跡⁽²¹⁾（武家屋敷）など近年県内においても散見されるもので、18世紀後半から19世紀前半の瀬戸美濃産陶器植木鉢⁽²²⁾である。

211は、瀬戸美濃産陶器の天目碗で16世紀後半から末である。216は関西系陶器急須で18世紀後半以降である。218・219は、土師器の灯火具と考えられ、出土地区の遺物群からみると12～13世紀であるが、大田村岡ノ前遺跡出土の3類に類似し、小柳和宏氏によれば14世紀後半以降に属するもの⁽²³⁾である。220は、関西系の土人形であろうか。時期は、共伴遺物（E10区石組み遺構）から18世紀後半から19世紀中頃である。342・343は18世紀後半以降の松葉文をもつ関西系（信楽系）陶器であ小杉碗と言われるものである。318は1610～1730年代の砂目唐津皿である。

2) 輸入磁器

a. 白磁（221～272・299）・第76・77・78図

221～267は、中国宋代の白磁で、江南地方の産とされる一群である。221～225・229～231は口縁部を外反させ、端部を水平にする森田・横田氏の分類⁽²⁴⁾（以下森田・横田分類）で碗Ⅴ－4類か碗Ⅷ－1類である。226・227・232は口縁部を外反させ、端部を丸くする碗Ⅴ－3類か碗Ⅷ－3類、228は口縁部が直立気味にたつもので、Ⅷ－2類であろうか。233は高台付近まで施釉し、丸みをもつ体部に口縁はやや外方上向に開き、内面口縁付近と内面見込みに沈線をめぐらす碗Ⅴ－1類である。234～240底部破片で、その内238は内面見込の釉を輪状にカキとる碗Ⅷ類で、他は碗Ⅴ類等の底部と思われる。243は体部中央に沈線をめぐらす皿Ⅱ－1類、244は見込みの釉を輪状にカキ取る皿類、245は皿Ⅱ類か皿類、246は類例がなく不明である。もしかすると皿Ⅲ類で実測の傾きミスかもしれない。247・248は体部上位で内湾し、その屈曲部の内側に沈線状の段をもつ皿Ⅷ－1類、249は見込みに片彫りの草花文を配す皿Ⅷ－1類、250は体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段がある皿Ⅳ－1 aである。

241・242・251～269はいわゆる口縁部が玉縁を呈するもので、体部下半部が露胎となる碗Ⅳ類の口縁部と底部である。口縁部破片は、やや玉縁が小さい碗Ⅳ－1類（251～255）と大きい碗Ⅳ－2類（256～259）とがある。底部は、高台が厚く、削り出しがわずかな碗Ⅳ－1類の底部（260～269）と削り出しが高く碗Ⅳ－2類の底部と思われるものなどがある。299はいわゆる口禿の皿類である。

以上の江南産とされる白磁の年代は、森田・横田氏や山本信夫氏⁽²⁵⁾によれば、碗Ⅴ－1類、碗Ⅴ－3類、碗Ⅴ－4類、碗Ⅳ類、皿Ⅱ－1類、皿Ⅳ－1 a類などは11世紀後半から12世紀前半を中心とし、碗Ⅷ類、皿Ⅲ類、Ⅷ類などは後出し、12世紀中頃から後半を中心とするが、玉縁の大きい碗Ⅳ－2類や皿Ⅷ類などは13世紀代まで残存する。口禿の皿類は13世紀後半から14世紀初頭である。なお、図化できなかったが、H－2区やI・J・K－3区でも出土（2点）している。

270～272は、白磁（青白磁）の合子（蓋と身）であり、蓋上面に花文の陽刻がある。12世紀後半～13世紀である。

b. 青磁（273～298・300～317）・第77・78図

273・274・277～281・283・300～316は、龍泉窯系青磁の碗と皿である。273・274・277～281は、高台が断面四角で高台壘付及びその内部は露胎で、体部内面に片彫りの草花（蓮華）文を配す森田・横田分類の碗Ⅰ－2類である。283は体部中位で屈曲する皿である。これらは、12世紀中頃から12世紀後半である。275・276・291～298は、いわゆる体部外面に蓮弁文をもつ碗である。275は見込みに「金玉満堂」の文字をスタンプしたもので、森田・横田分類碗Ⅰ－5 c類の底部。291～294は、蓮弁文様に鎬がないⅠ－5 a類であり、294は偏平な花卉文となっている。295～298は鎬蓮弁のⅠ－5 bである。年代は、片彫りで鎬蓮弁文の碗Ⅰ－5 b類は、13世紀前半から14世紀前後である。鎬と間弁を失ったⅠ－5 a類や偏平な蓮弁文の碗は14世紀から15世紀前後である。300～302・304～309・312は口縁部がやや外反し、端部が丸味を持つ無文の碗で、上田秀夫氏の碗D－Ⅱ類⁽²⁶⁾、310は口縁部が内湾する碗E類で、312の底部は釉が高台内部まで掛かっている。14世紀後半から15世紀中頃である。303・311は無文の腕で口縁部を丸く肥厚されるもので、14世紀中頃前後である。314～316は口縁部に雷文をめぐらす上田分類碗C類である。314・315は口縁部外面に退化（便化）した雷文をめぐらすものであるが、316は内湾する体部外面は蓮華文の退化した線描状の文様があり、内面には草花文と口縁部に比較的右回り雷文の連続文を配すもので、内側に雷文をめぐらす例はめずらしく、管見の限りでは見当たらない。いずれにしても、雷文碗は14世紀後半頃出現し、

15世紀前後をピークに中頃までとされる。313は腰折皿で14世紀である。317は底部をアーチ状に削り脚とする火入れか香炉である。16世紀後半から17世紀初め頃である。

282・284～290は、同安窯系の青磁碗・皿である。284～287は台形状の高台に体部は高台からやや内湾気味に外方向へ立ち上がり、体部上位で内側に屈曲する。内底見込みと体部との境に段をもち、体部内外面に櫛目を施す森田・横田分類の碗Ⅰ－1b類である。282・288～290は、体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段をもち、見込みに櫛描文をもつ皿で、288は体部下半が露胎で皿Ⅰ－1b、289・290は底部施釉後カキ取る皿Ⅰ－2bである。これらは片彫りの草花文をもつ龍泉窯系碗にやや後出し、12世紀後半を中心とする。

3) 国産磁器 (319～341・344～347)・第78・79図

染付 (319～321・323～326・328～332・335～340・344～347) に青磁染付 (322)、青磁 (327・334) が出土している。製作地は、肥前である。319は外面に雨降り文を描く碗で1690～1780年代。320～322は、内面に便化した五弁花文のコンニャク印判湯飲み碗である。320は丸形、321・322は筒型の碗であり、320・321は染付、322は青磁染付である。染付は、外面に秋草文(320)や菊花文(321)を描いており、青磁染付(322)には内面口縁部に四方襷文をめぐらす。いずれも年代は1750～1790年代と考えられるが、染付碗は1810年代までであろうか。323～326・328～332は丸形の碗である。325は外面に二重網目文を描くもので1740～1780年代。326・332は外面に丸文を描き、見込みを蛇ノ目状に釉をハギ(蛇ノ目釉ハギ)とっている。328～330はいわゆる長崎県波佐見地方を中心とする外面に梅樹文を描く厚手のくらわんか碗である。331は外面草花文を描く。いずれも18世紀後半を中心とする。327・334は青磁の瓶と鉢である。327は内外面とも青磁釉を掛け、胴部中央に片彫り文様がある。1630～17世紀末であろう。334はやや厚い青磁釉を掛けるもので底部は露胎である。18世紀以降であろうか。333は染付小形瓶で仏具と思われる。外面に梅花文と竹筴文を描くもので18世紀後半～19世紀前半である。335・336・344～347は染付皿である。335は外面に連続唐草文様、内面草と蝶(?)、見込みに五弁花文のコンニャク印判、裏銘に「寿」もつ。18世紀後半。336は内面に石榴(?)を描くもので18世紀後半。334・335はいわゆる「紅猪口」と呼ばれる紅皿である。呉須で「大阪新町お笹紅」の文字が書かれており、長崎県長与窯産である。346は見込みや内面に線描の草花文を描き、蛇ノ目凹型高台の皿である。1810～1860年代である。347は内面に便化した唐草文を描き、見込み蛇ノ目釉ハギに蛇ノ目凹型高台皿である、18世紀後半以降である。337～341はいわゆる広東碗の蓋(337)と碗で、1780～1820年である。

4) その他・第80・81図

その他遺物に、銅銭、小柄、土錘が出土している。348～351は銅銭である。348はL-3区のピット(P3・第61図)出土。「明道元寶」(北宋)銭で、初鑄年代1032年(明道元年)、重さ2.7gである。349はH・I-2区石垣南南北トレンチの水田盤下約20cm出土。「嘉祐元寶」(北宋)銭で、初鑄年代1056年(嘉祐元年)、重さ1.1gである。350はI・J・K-3区南北トレンチ出土。「至道元寶」(北宋)銭か。初鑄年代995年(至道元年)、重さ現状で1.2gである。351はL-2区のピット(P1・第61図)出土であるが大部分が欠損しており銘や初鑄年代は不明である。

352は、H-3区の石垣出土。銅製の小柄で、陽刻と彫金文様に、金箔(一部残存?)を施したもので幅1.4cm、長さ9.5cm、重さ22gである。江戸時代の作であろう。

353～369は、漁網用の土錘である。調査区北西地区で4点(H0・H-1・I・J-2区)、東地区5点(E6・E7区)、南西地区8点(F0・F-1・C-1区)の合計17点が検出された。所属年代は、北西地区は11世紀後半から16世紀の幅であるが、東及び西地区、特に流路状の窪み内出土の土錘は、11世紀後半から13世紀の間に位置づけられる。土錘の形は、一部欠損するものもあるが、全て管状を呈する。大きさは、最大長4.7cm、最少長3.15cm、最大重量9.5g、最少重量2.2gであるが、長さは、大きく4.2～4.7cmと3.15～3.8cmの2群、重量では7.6～9.5g、4.7～5.3g、2.2～4.2gの3群に分類される。(玉永)

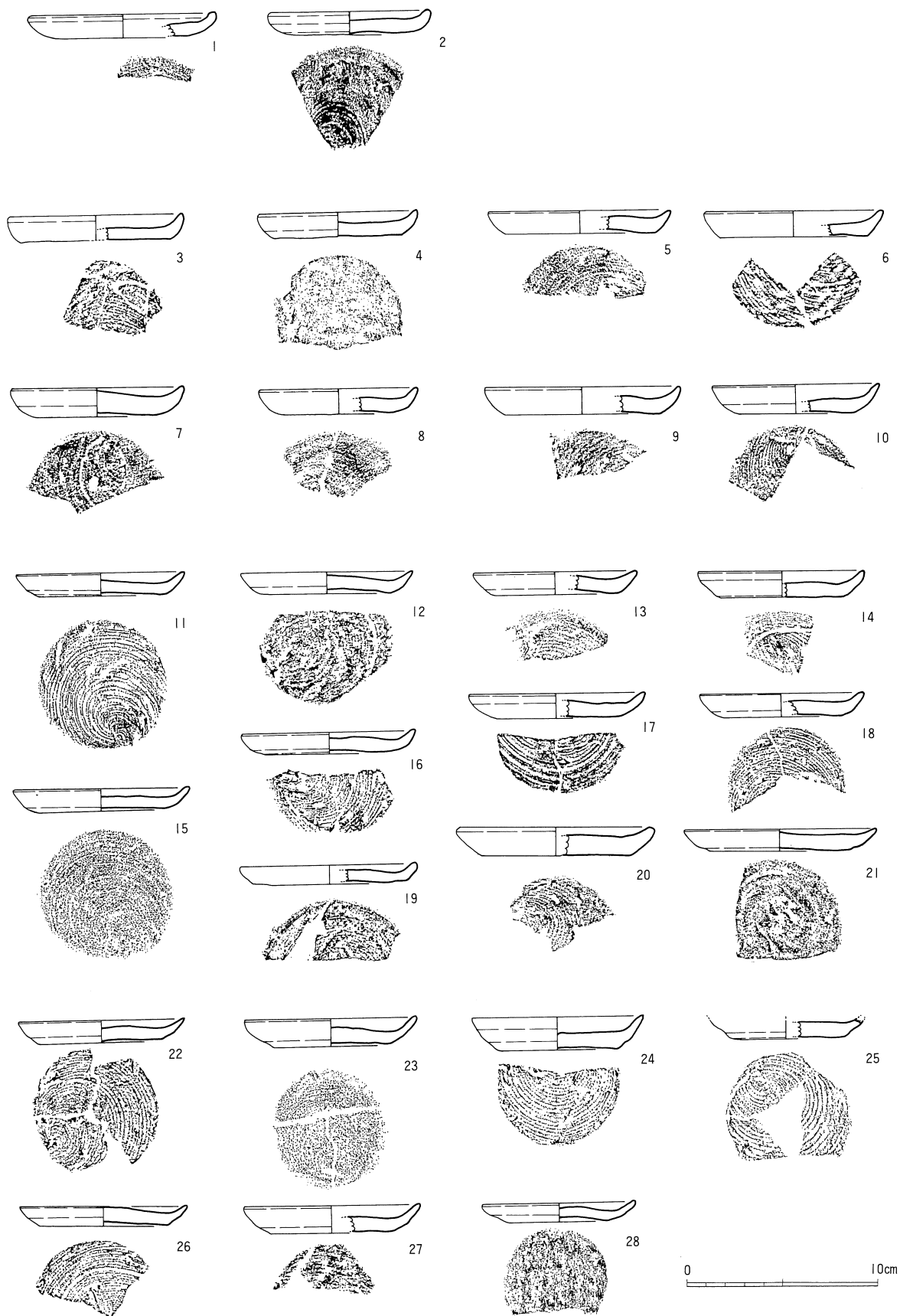
註

- 1 玉永光洋・小林昭彦 『安岐城跡・下原古墳』大分県教育委員会1988
- 2 松田直則 「高知県における中世土器の様相—15・16世紀を中心に—」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1987
- 3 真野和夫・宮内克己編 『弥勒寺』大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館1989

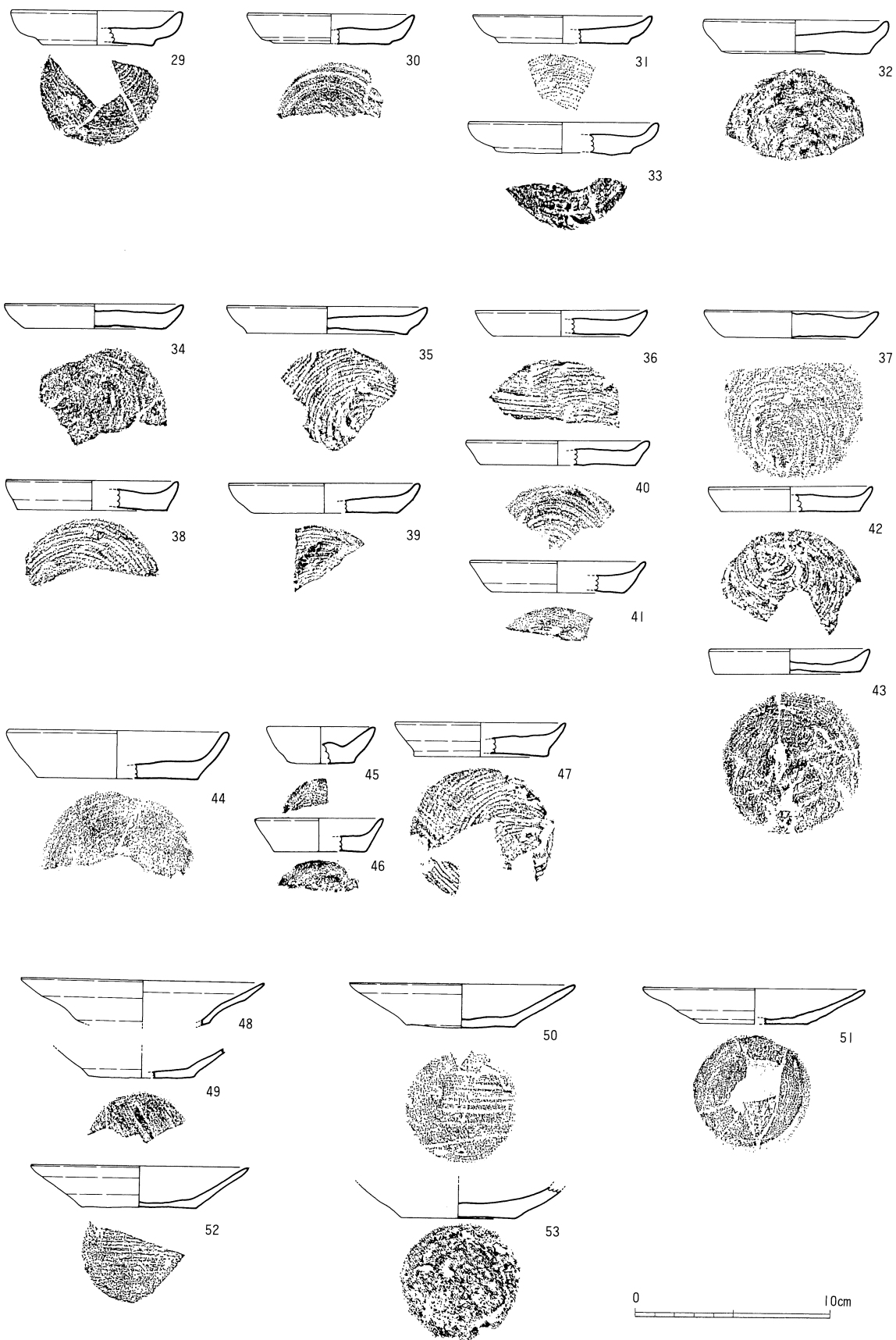
- 4 森 隆「西日本の黒色土器生産（上）・（中）・（下）」『考古学研究146・147・148』1990～1991
佐藤浩司「北九州における黒色土器の生産と流通―豊前北部地域とその周辺」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ
生産と流通の考古学』1989
- 5 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集Ⅱ』1976
佐藤浩司「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』1991
- 6 吉武 学編『船塚遺跡』大分県教育委員会1985
- 7 （早島式土器）は筆者
- 8 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナルNO. 229・1988』
- 9 谷口俊治「豊前企球郡における中世土器成立の契機について」『東アジアの考古と歴史（下）』1989
- 10 井沢洋一「福岡地方の須恵器・瓦質土器について」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1987
- 11 小柳和宏「宇佐高村と中世雑器生産」『大分県地方史第159号』1995
- 12 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』1993
- 13 註3の文献
- 14 谷口俊二「豊前地域の中世雑器―山陽道西部地域の設定に向けて」『北九州市文化事業団・埋蔵文化財調査室研究
紀要第9号』1989
- 15 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古第17号』1988
- 16 大田村岡ノ前遺跡で14世紀代の第4号溝から、本遺跡の土師器釜（151・152）・土鍋（163～165）が共伴している。
調査者は、この溝の所属年代を14世紀前半代とする。しかし、第36図165の瓦器碗は底部が欠損しているが、いわゆる丸底の碗（小倉分類のⅣ―A類）に復原されそうである。とすれば14世紀後半代まで考慮する必要がある。
小柳和宏編『豊後田原別符の調査Ⅰ』大田村教育委員会1994・小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について―型式・
編年に関する試案―」『古文化談叢第14号』1984
- 17 佐藤浩司「ケズリのない甕―豊前企球型煮沸具の語るもの―」『北九州市教育文化事業団・埋蔵文化財調査室研究
紀要第6号』1989
- 18 荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼物―西日本の摺鉢―」『国立歴史民俗博物館研究報告第25集』1990
- 19 註11の文献
- 20 吉田 寛編『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会1993
- 21 平成6年度稲葉川河川改修に伴う調査によって出土している。
- 22 成瀬晃司・堀内秀樹「東京大学構内遺跡病院地点出土の陶磁器―その変遷と組成―」『江戸の陶磁器』1990
- 23 小柳和宏編『豊後田原別符の調査Ⅰ』大田村教育委員会1994
- 24 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料館研
究論集4』1978
- 25 山本信夫「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』1990
- 26 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究2』1982

参考文献

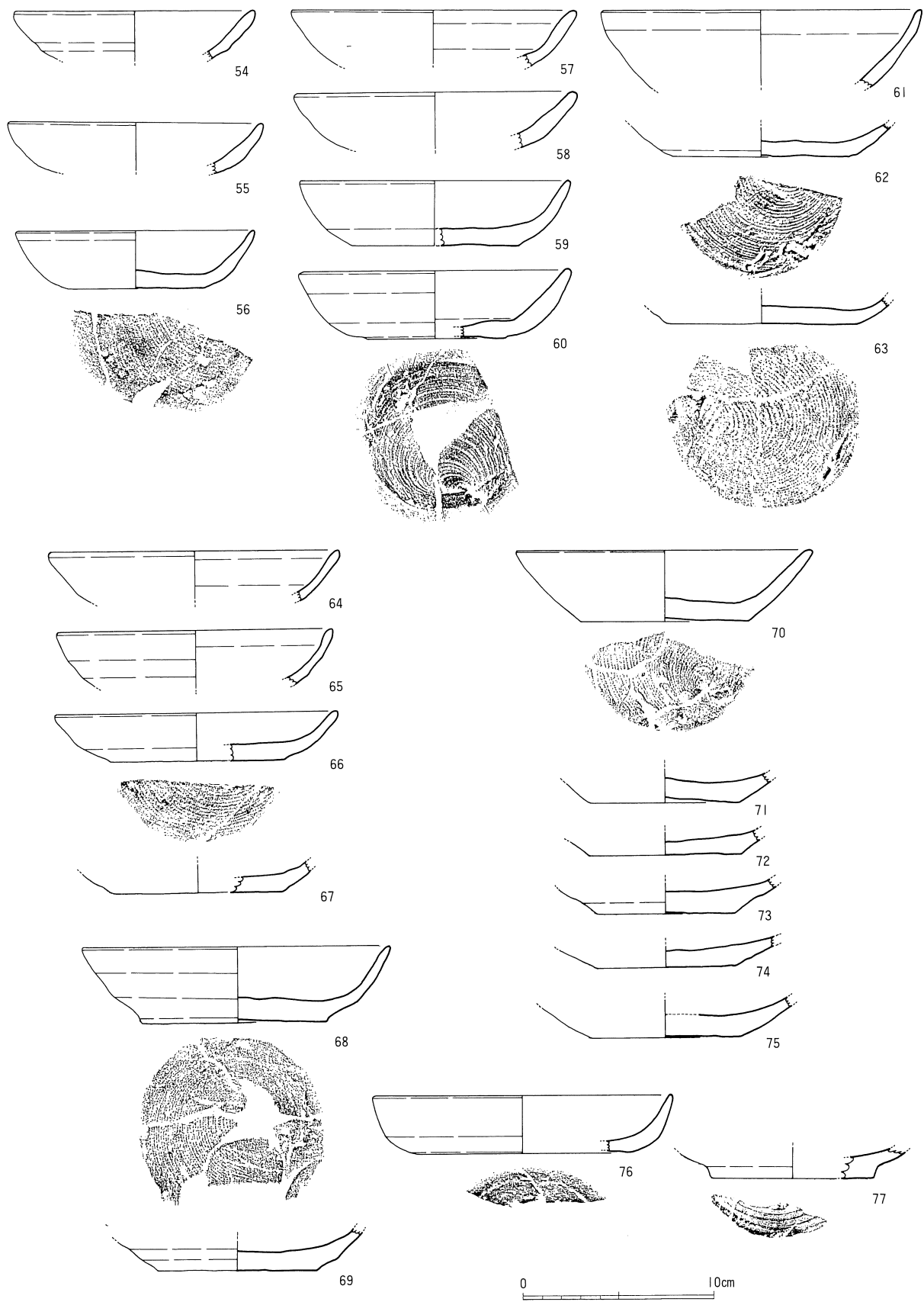
- 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』1989
- 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯址群を中心に―」『神戸市立博物館研究紀要第集』1986
- 坂本嘉弘『佐知遺跡』大分県教育委員会1989
- 村上久和「大分県中津地域出土の瓦器碗について」『古文化談叢第14集』1984
- 村上久和編『ズリヤネ城跡』『三光村の遺跡』1989
- 吉瀬勝康「周防における古代・中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988
- 後藤一重『切株山城跡』玖珠町教育委員会1984
- 高橋信武編『杵築小学校校内遺跡』杵築市教育委員会1989
- 吉田 寛編『植田市遺跡Ⅰ』大分県教育委員会1988
- 渋谷忠章編「水地遺跡」『大分県内遺跡群詳細分布調査概報1』1982
- 菊田 徹編『堂メキ遺跡』白杵市教育委員会
『白杵石仏群地域遺跡』白杵市教育委員会1982
- 小倉正五編『藤田遺跡』宇佐市教育委員会1983
- 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論功』1980
- 大橋康二「肥前磁器碗の形態の変遷」『九州上代文化論集』1990
「肥前陶磁の変遷と出土分布―発掘資料を中心として―」『図録国内出土の肥前陶磁』1984
- 有田町史編纂委員会編『有田町史古窯編』1987
- 江戸陶磁研究グループ編『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』1992
- なお、近世陶磁器については、大橋康二氏・吉田 寛氏にご指導いただいた。



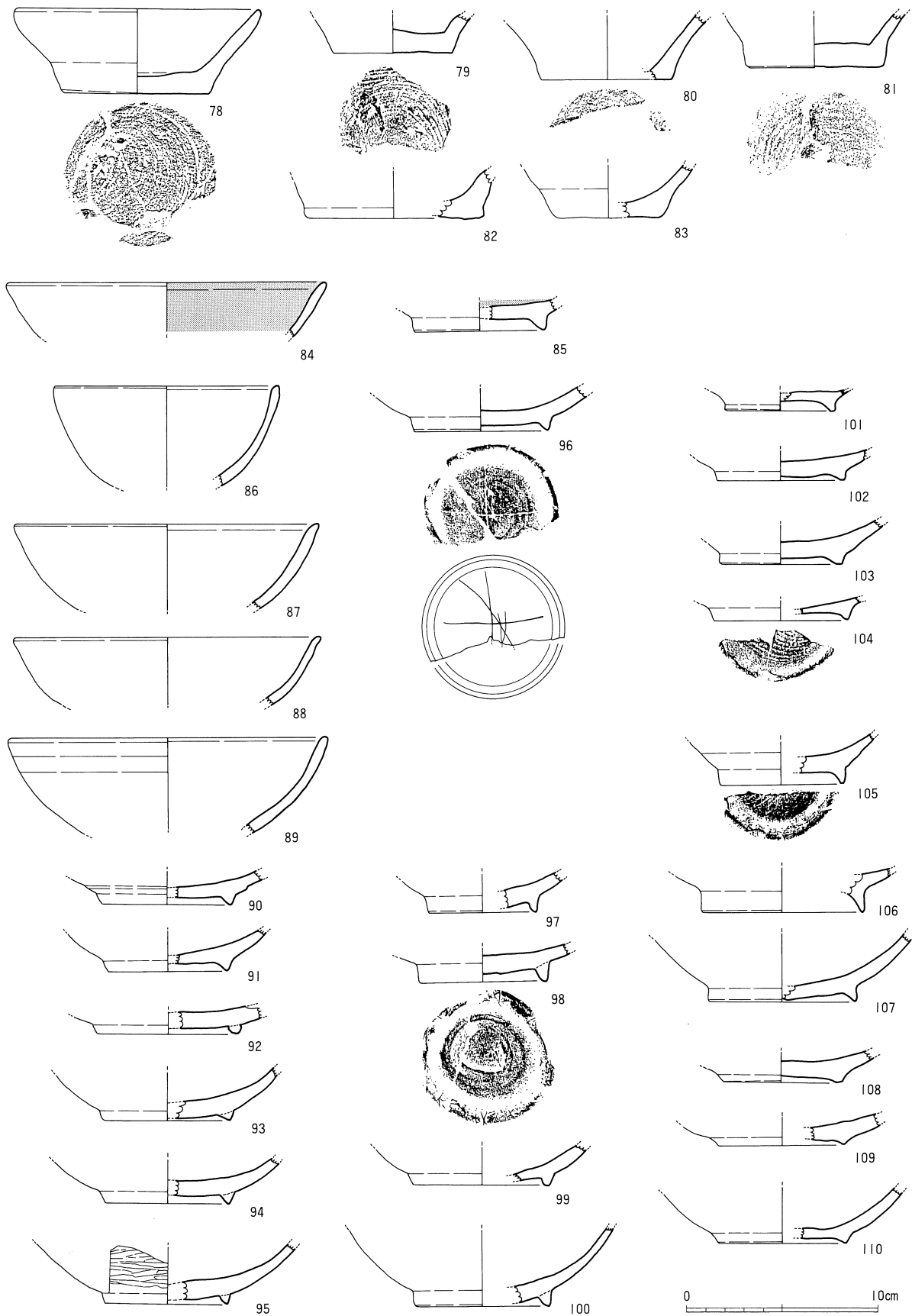
第64図 出土遺物実測図1 (土師器小皿)



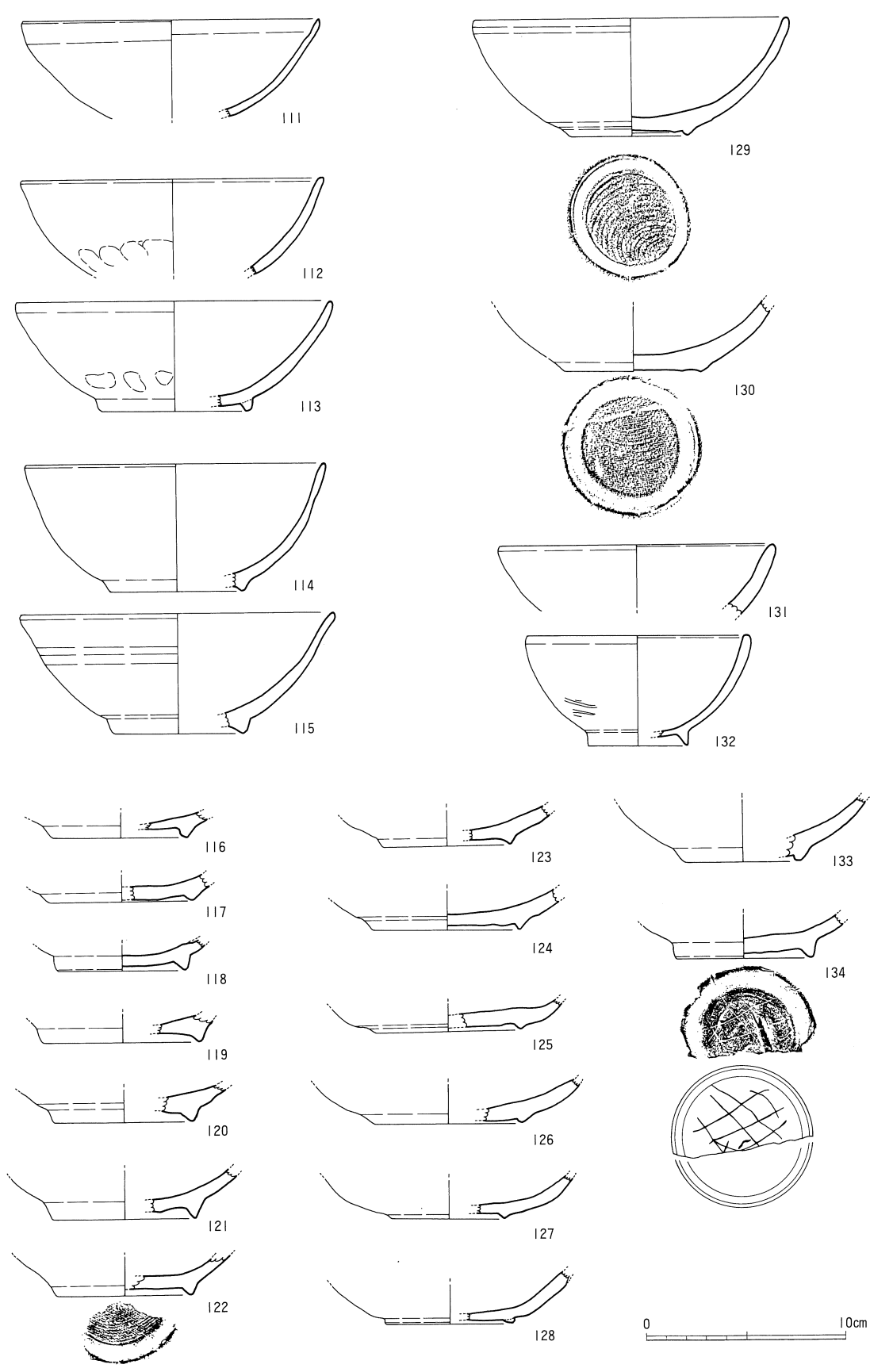
第65図 出土遺物実測図2 (土師器小皿)



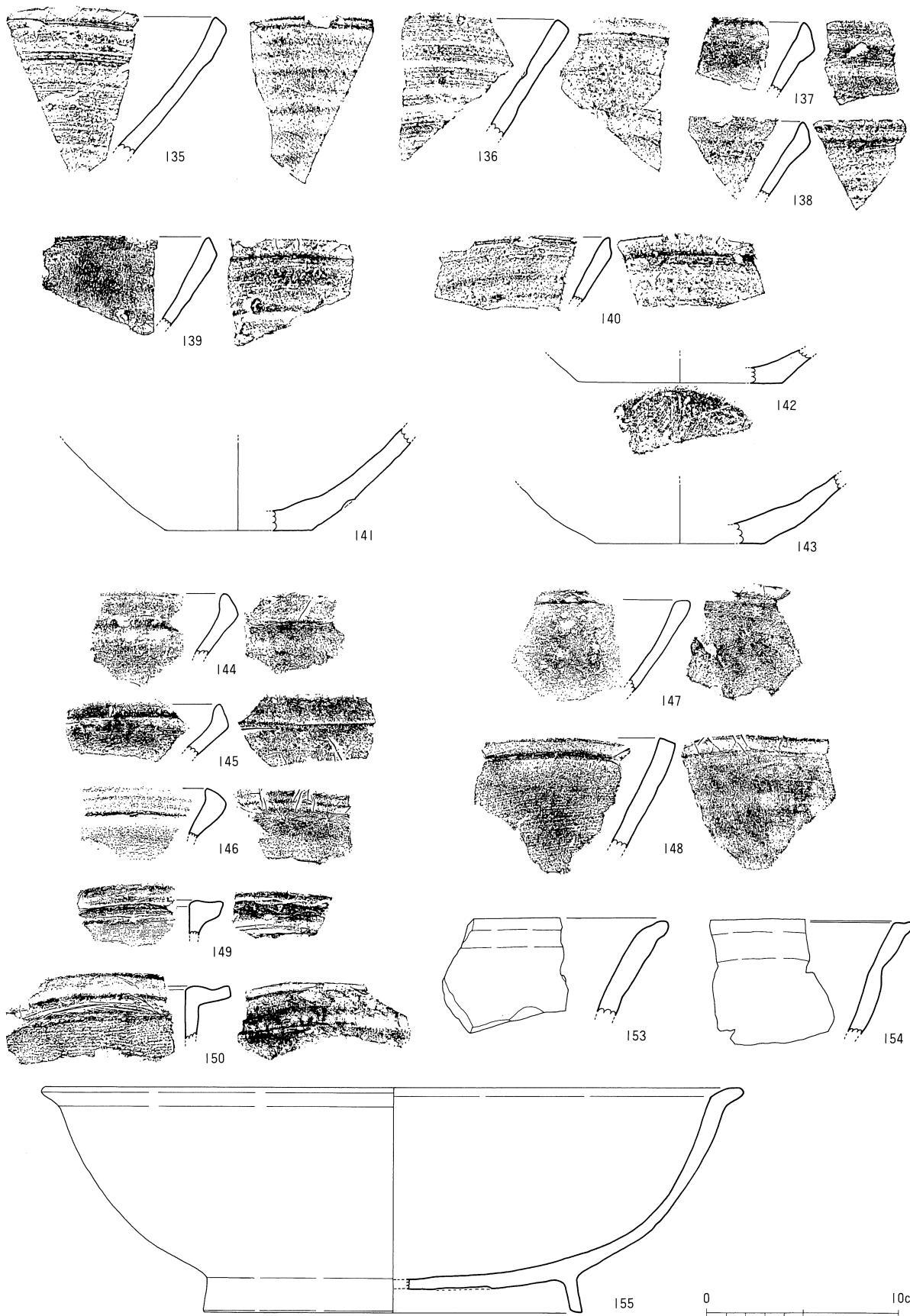
第66図 出土遺物実測図3 (土師器坏)



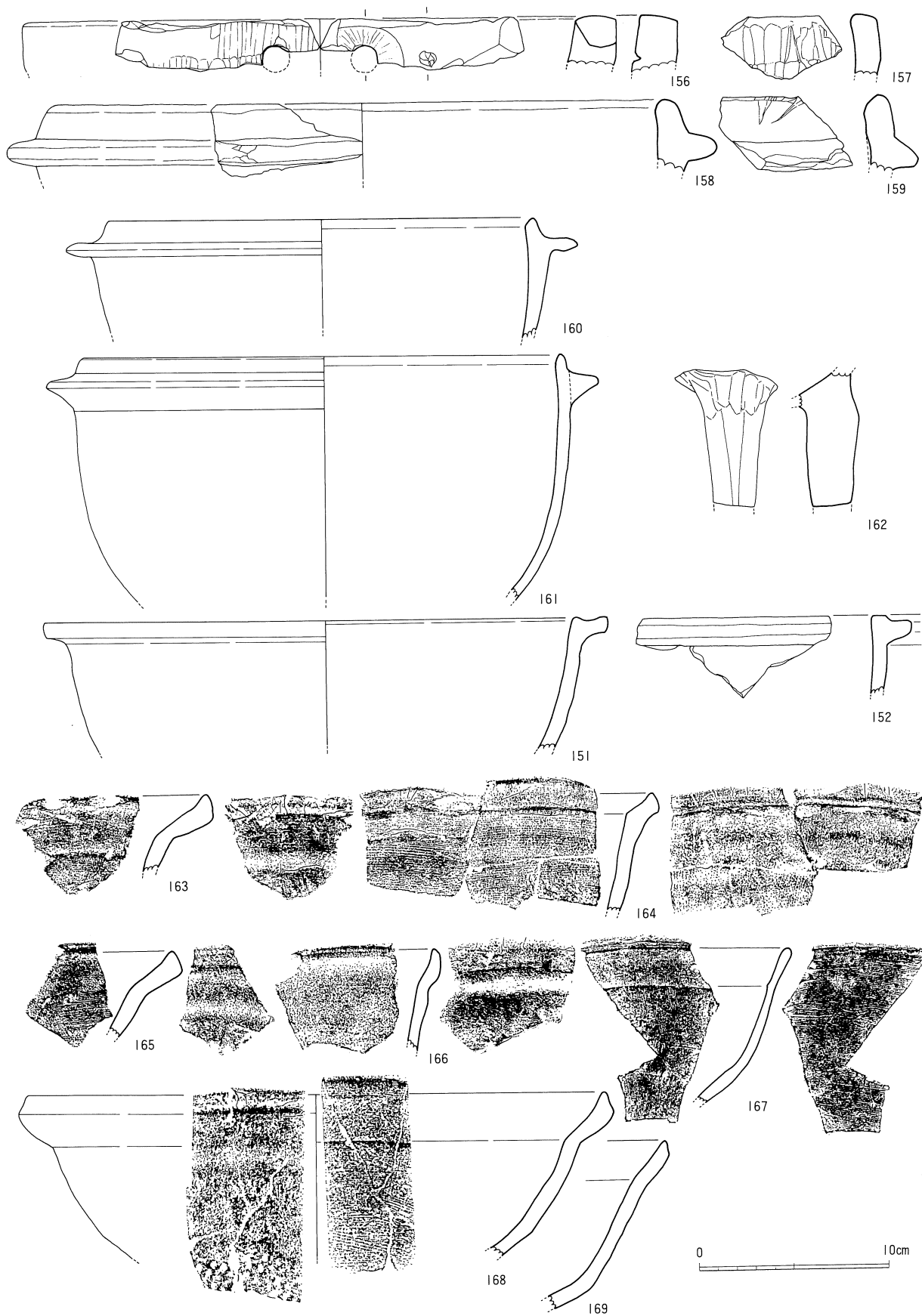
第67图 出土遺物実測図4 (土師器坏・土師器埴)



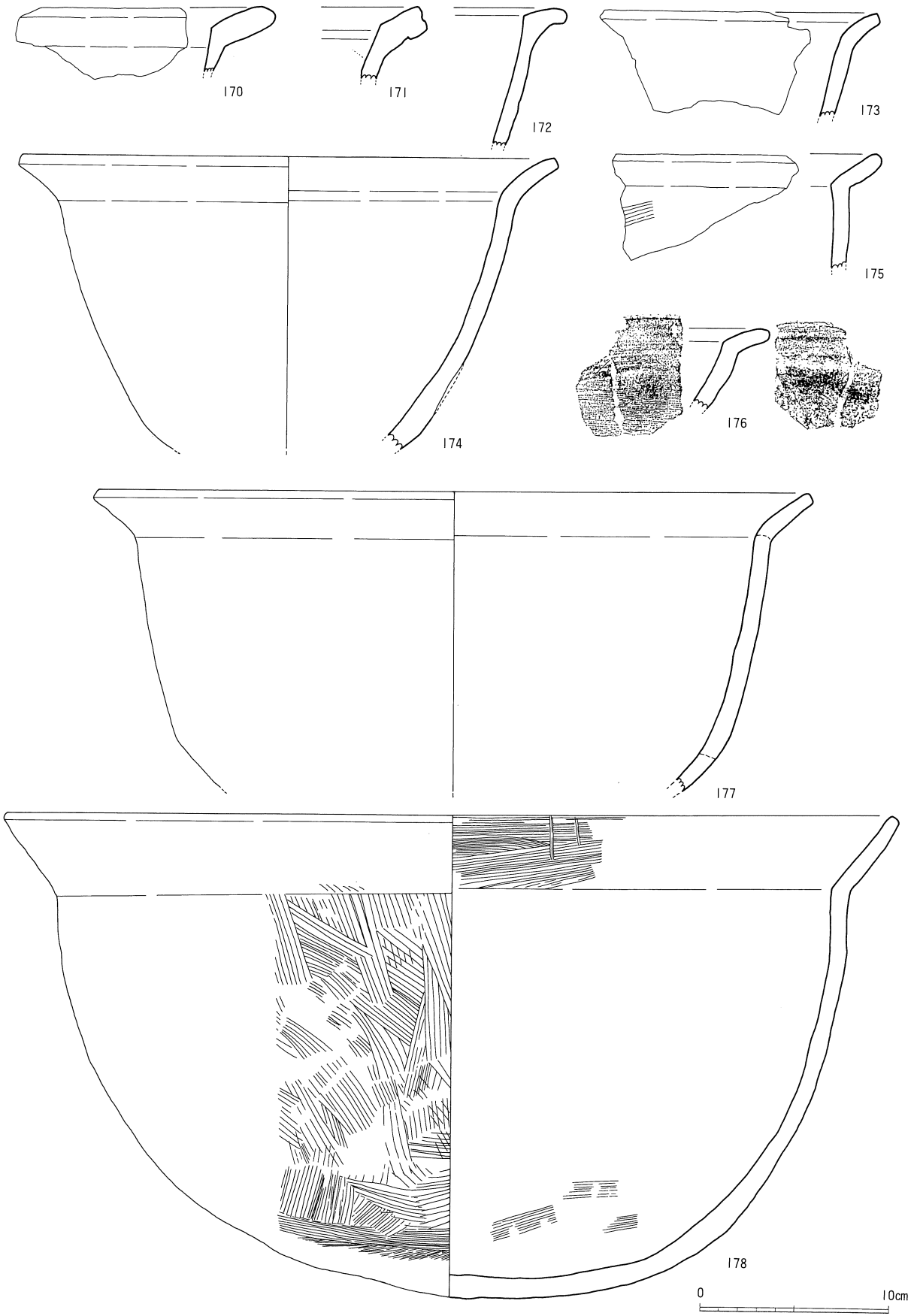
第68图 出土遺物実測図5 (瓦器埴)



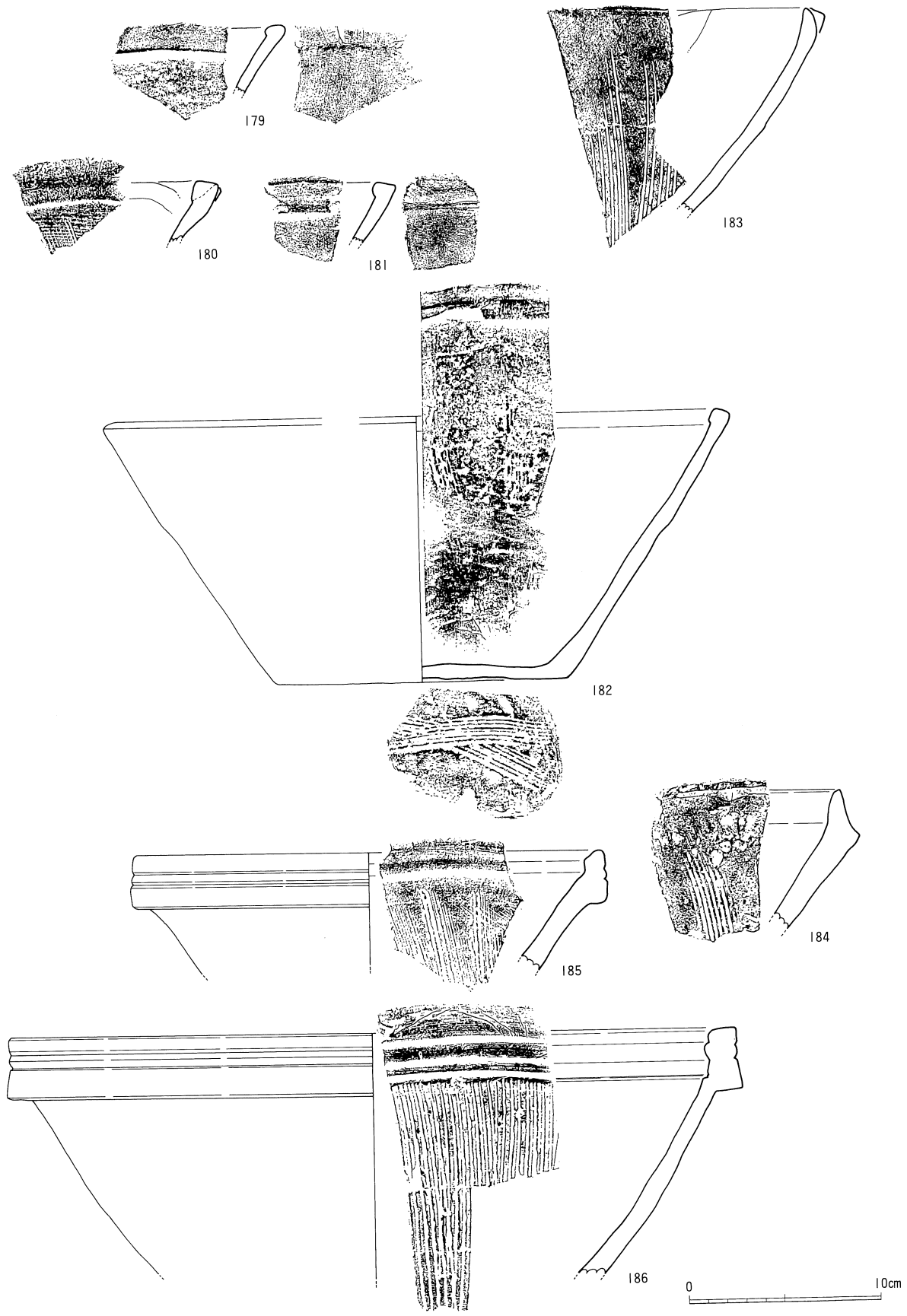
第69図 出土遺物実測図6 (須恵器系鉢・瓦質鉢・釜)



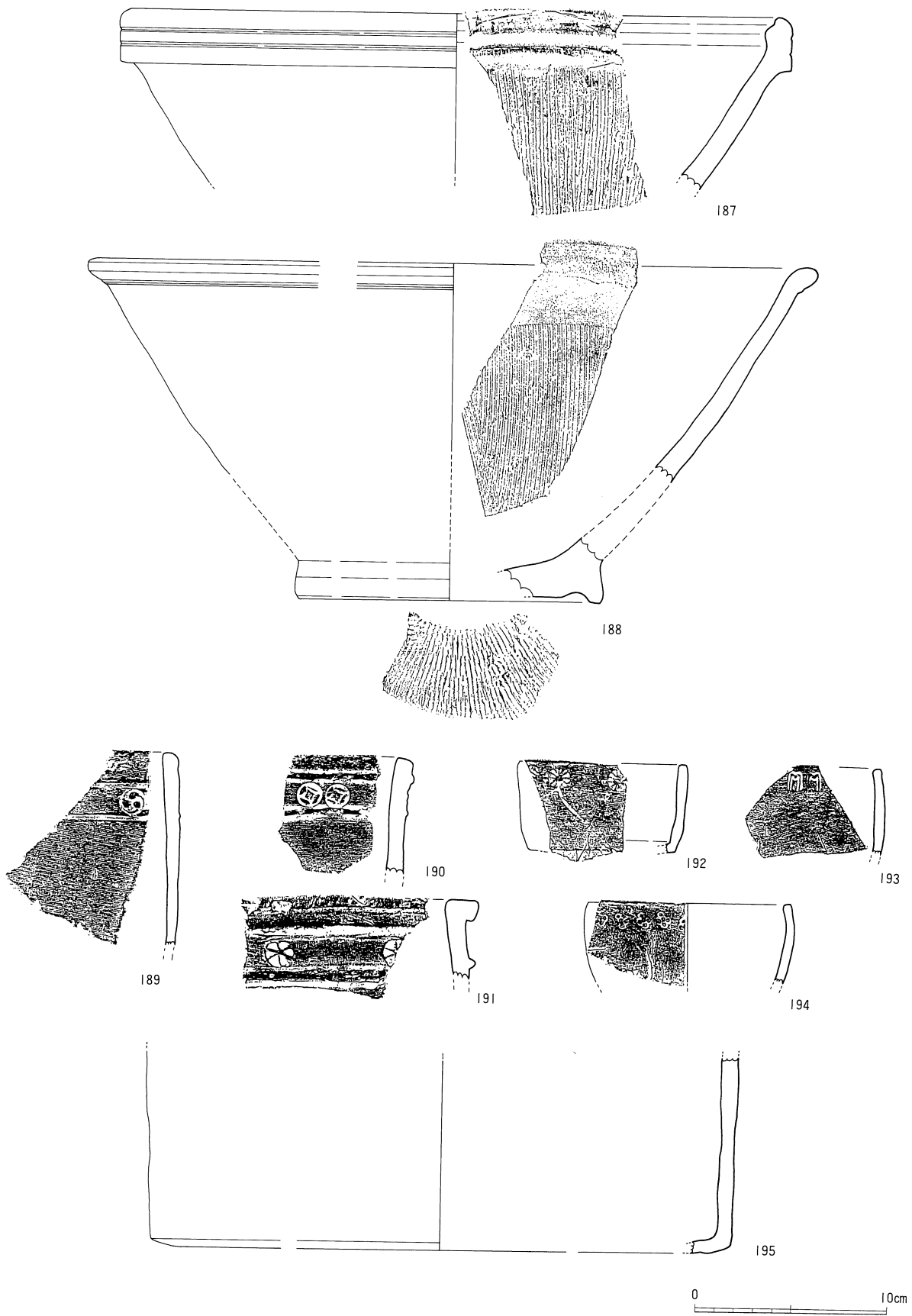
第70図 出土遺物実測図7 (石鍋・土鍋・土釜)



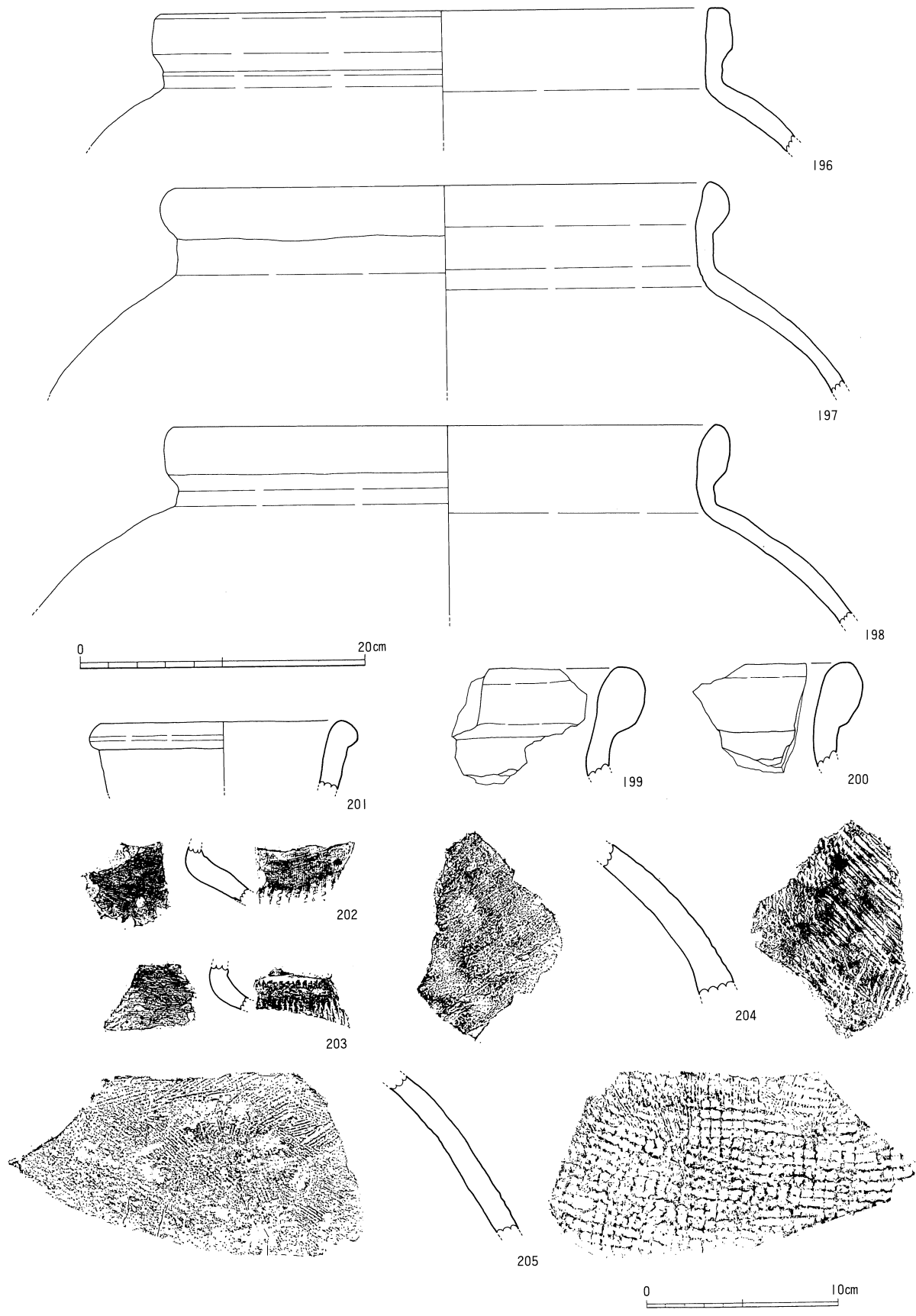
第71図 出土遺物実測図8 (土鍋)



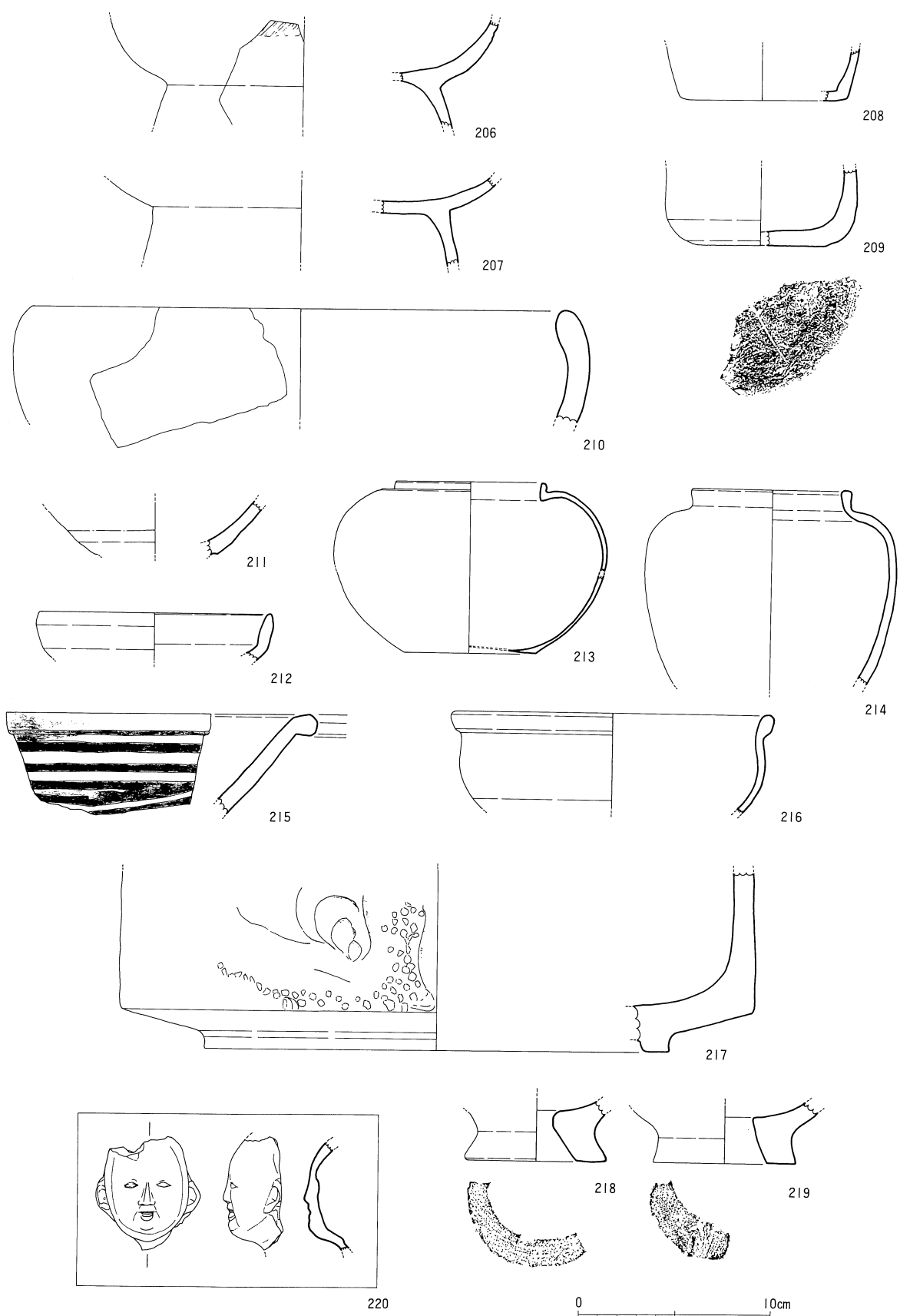
第72図 出土遺物実測図9 (すり鉢)



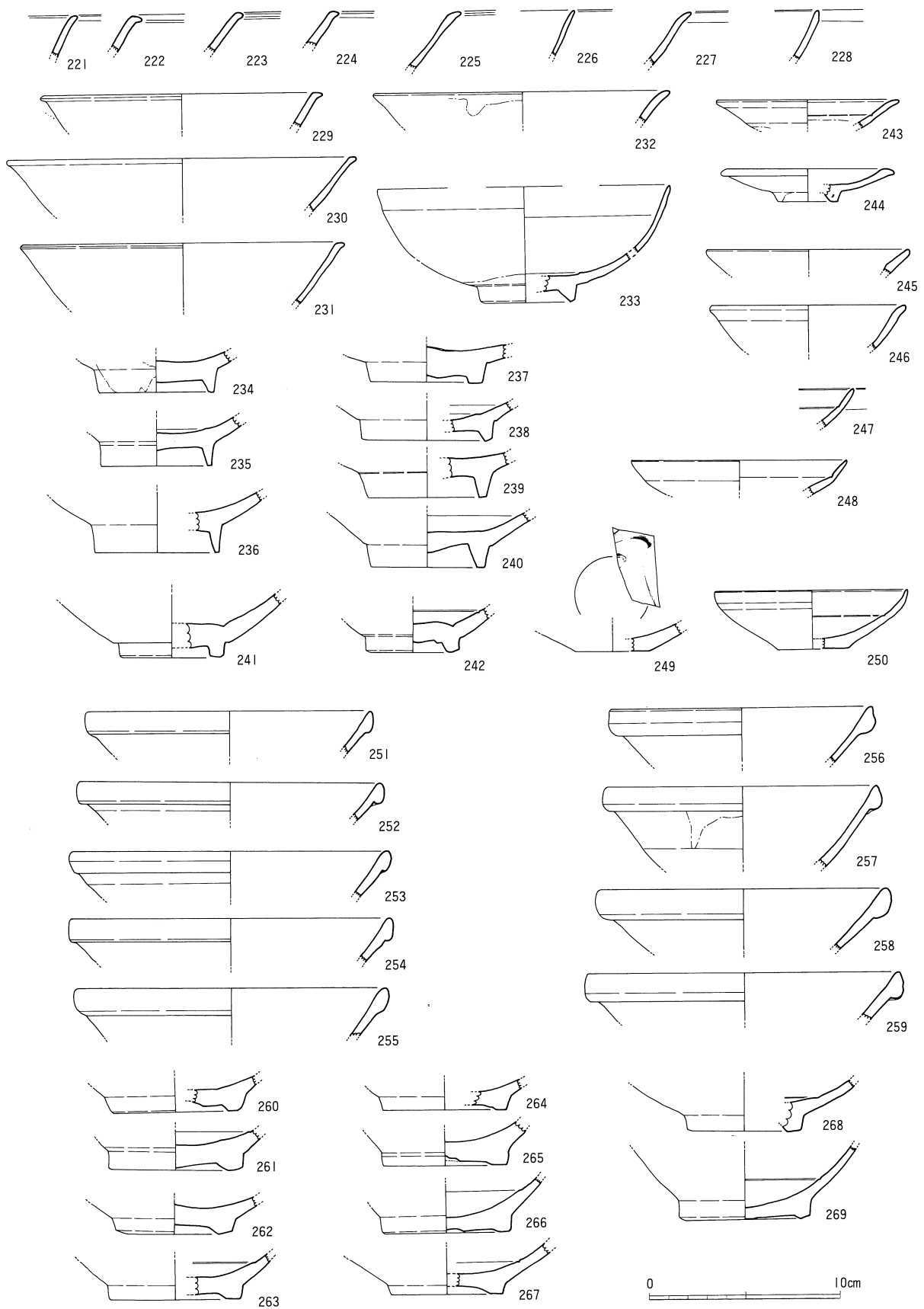
第73図 出土遺物実測図10 (すり鉢・火鉢)



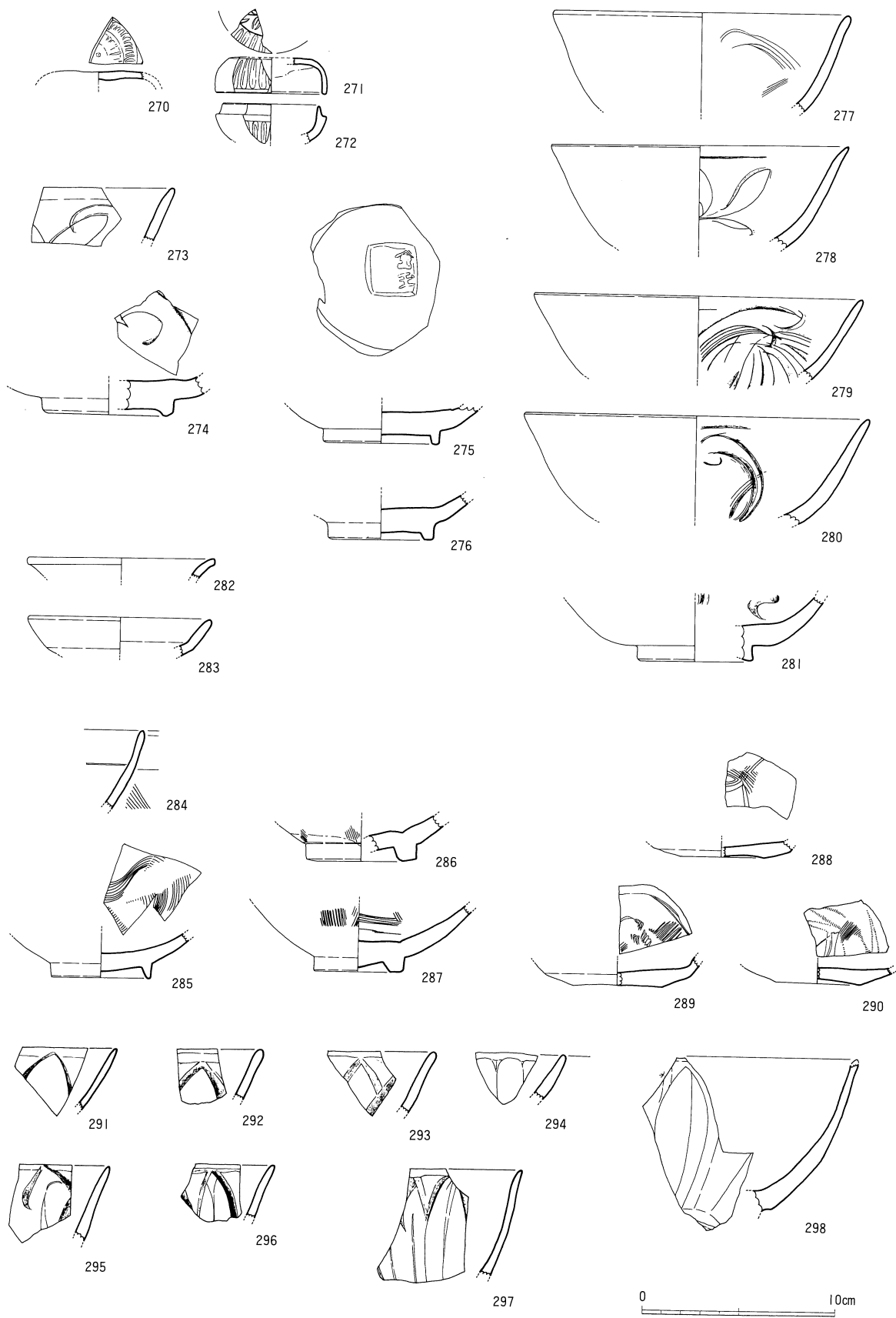
第74图 出土遺物実測図11 (甕・壺)



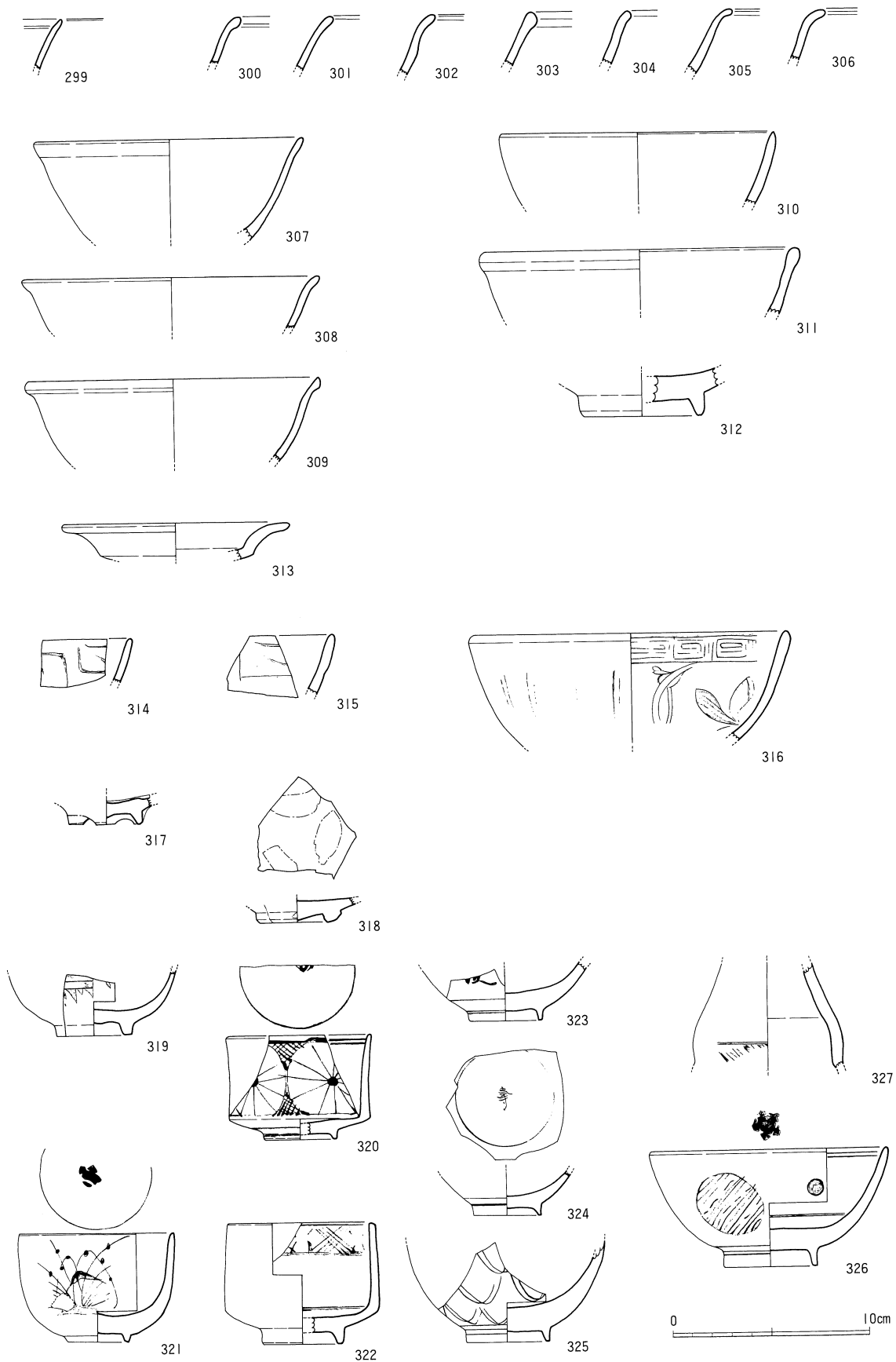
第75图 出土遺物実測図12



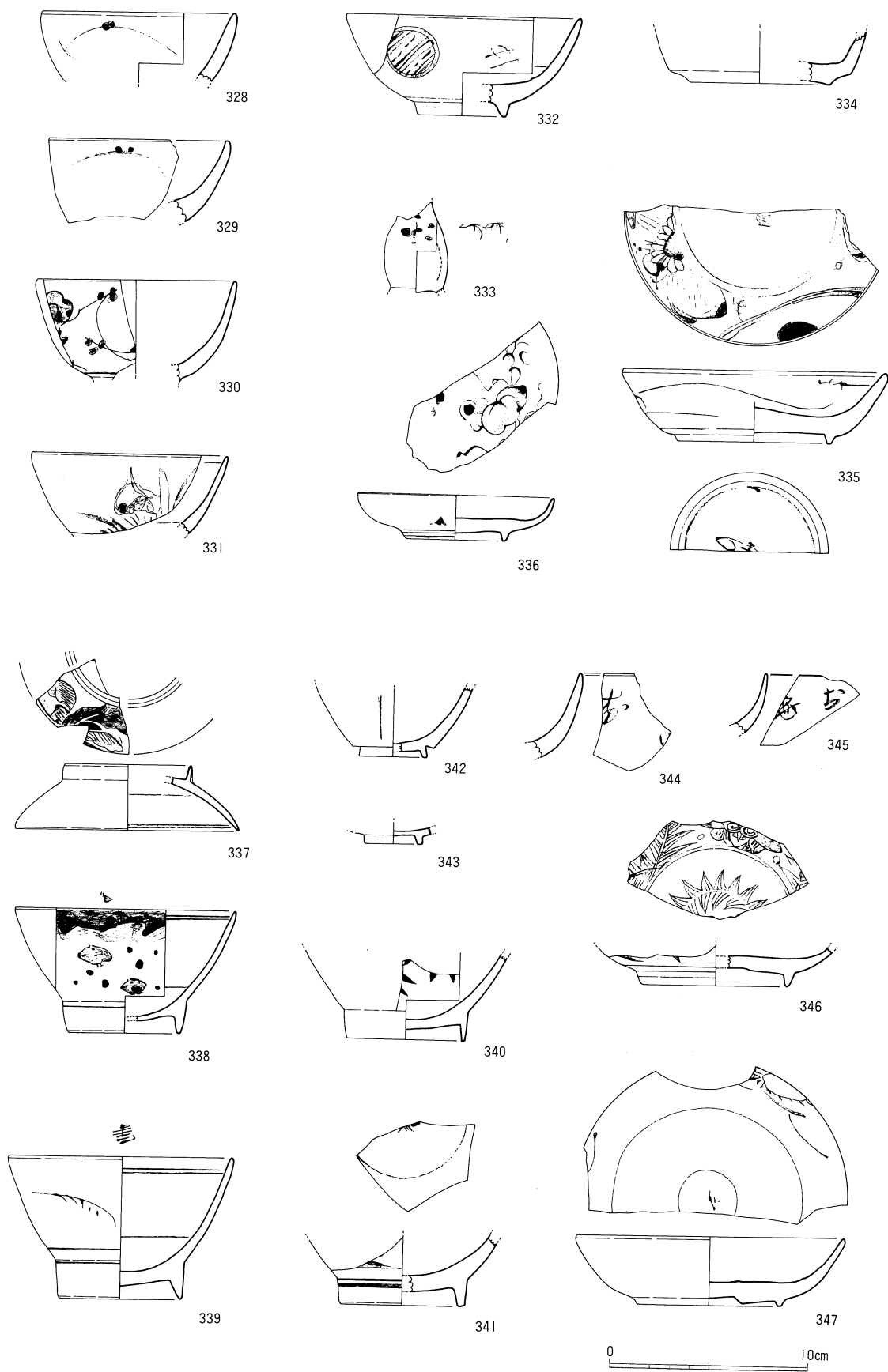
第76图 出土遺物実測図13 (白磁碗・皿)



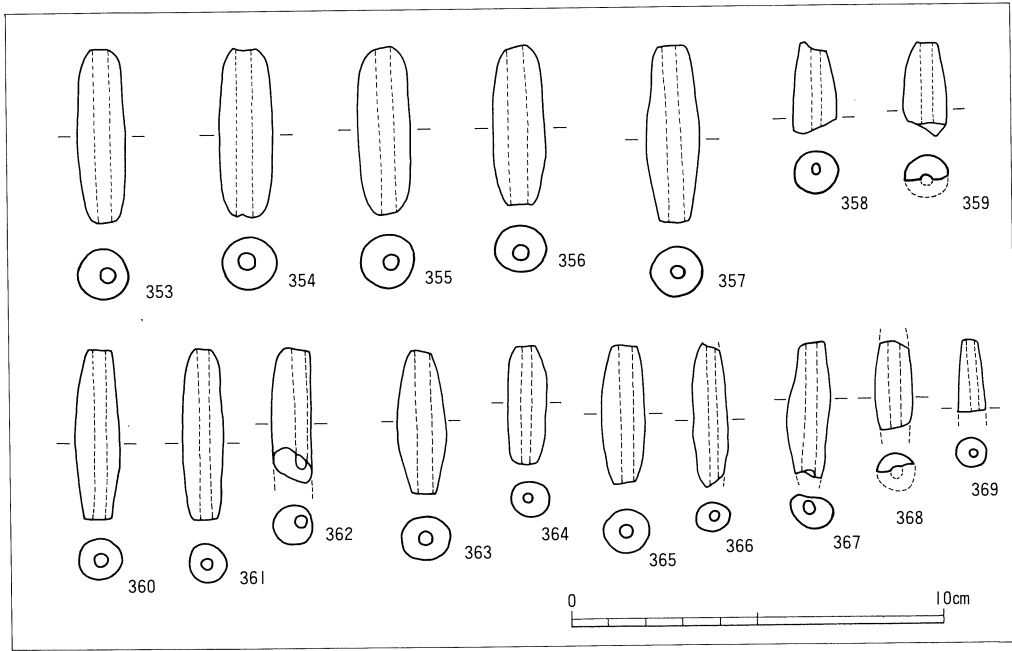
第77图 出土遺物実測図14 (白磁合子・青磁碗・皿)



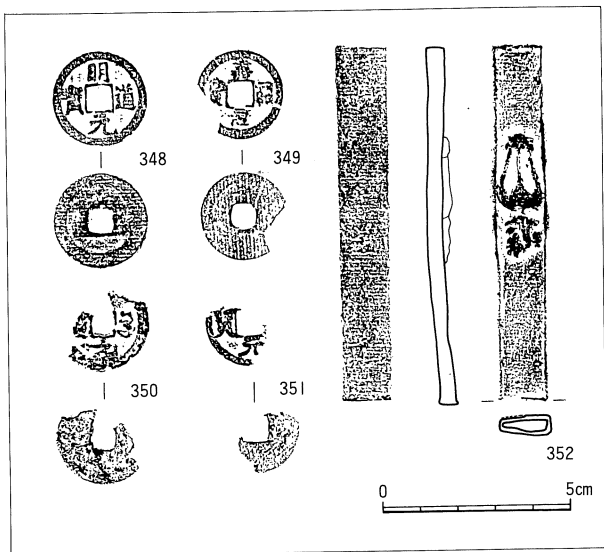
第78图 出土遺物実測図15 (青磁碗・皿・白磁香炉・白磁皿・染付碗・青磁瓶)



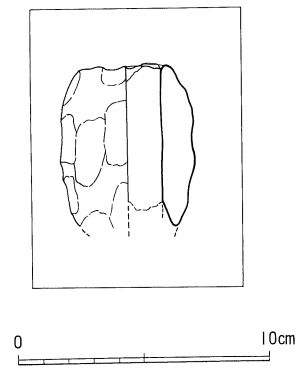
第79图 出土遺物実測図16 (染付碗・皿・小瓶・青磁鉢・陶器小碗)



第80図 土錘実測図



第81図 銅銭・刀装具 (小柄) 実測図



第82図 製塩土器実測図

第15表 古代・中世・近世の遺物観察表

挿入	番号	器種	法量 (cm)			胎土	調整	色調	出土地	備考
			口径	器高	底径					
64	1	土師器小皿	(9.8)	1.2	(7.0)	角閃石多量, 白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F0区	
	2	土師器小皿	(8.5)	1.2	(6.9)	角閃石, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	淡灰褐色	F0区	
	3	土師器小皿	(9.2)	1.3	(7.8)	角閃石多量, 白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	橙色	E4区	
	4	土師器小皿	8.3	1.2	6.7	白色細粒多量, 斜長石, 角閃石	ナデ, 回転糸切り	橙色	F0区	
	5	土師器小皿	9.5	1.2	7.7	白色細粒多量, 角閃石	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	6	土師器小皿	9.4	1.3	7.7	角閃石, 斜長石, 砂粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F0区	
	7	土師器小皿	9.4	1.3	7.7	角閃石, 斜長石, 砂粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡褐色	F0区	
	8	土師器小皿	(8.3)	1.3	(7.4)	角閃石, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F6区	
	9	土師器小皿	(10.2)	1.4	(8.0)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	10	土師器小皿	(8.8)	1.5	(6.2)	斜長石, 角閃石, 白色細粒若干	一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	11	土師器小皿	8.7	1.1	6.7	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	にぶい褐色	F6区, P9	
	12	土師器小皿	9.0	1.1	6.7	角閃石多量, 白色細粒, 赤色粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F1区	
	13	土師器小皿	(8.6)	1.2	(6.4)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F0区	
	14	土師器小皿	(8.7)	1.3	(6.4)	角閃石, 白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡黄色	F-1区	
	15	土師器小皿	9.2	1.2	6.6	斜長石多量, 角閃石・白色細粒若干	回転ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	褐色	F6区	
	16	土師器小皿	9.1	1.1	7.0	斜長石多量, 角閃石, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F-1区	
	17	土師器小皿	(9.1)	1.3	(6.4)	角閃石, 白色細粒若干	回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F1区	
	18	土師器小皿	8.6	1.2	6.2	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F1区, F-1区	
	19	土師器小皿	(9.2)	1.0	(8.0)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	黄褐色	F-1区	
	20	土師器小皿	(10.4)	1.5	(7.7)	角閃石多量, 斜長石	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	21	土師器小皿	(10.1)	1.1	(7.4)	白色細粒多量, 金雲母, 砂粒若干	ナデ,	褐色	G0区, G1区	
	22	土師器小皿	8.7	1.1	6.4	角閃石, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F-1区	
	23	土師器小皿	9.1	1.4	6.1	角閃石, 白色細粒	ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	にぶい黄褐色	F-1区	
	24	土師器小皿	9.0	1.7	6.1	白色細粒・斜長石多量, 角閃石	回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	25	土師器小皿	—	—	6.0	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	黄褐色	F0区, C-1区	
	26	土師器小皿	(8.7)	1.0	(6.7)	斜長石, 角閃石, 白色細粒若干	回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	27	土師器小皿	(9.2)	1.4	(6.4)	角閃石多量, 白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F0区	
	28	土師器小皿	8.0	1.0	5.2	角閃石, 白色細粒	ナデ,	淡黄褐色	F6区	
65	29	土師器小皿	8.8	1.7	5.7	角閃石, 斜長石, 赤褐色粒若干	回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F0区, F-1区	
	30	土師器小皿	(8.6)	1.5	(6.0)	角閃石・白色細粒多量, 斜長石若干	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	31	土師器小皿	(9.2)	1.4	(6.6)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F-1区	
	32	土師器小皿	(9.3)	1.7	(7.5)	白色細粒多量, 斜長石, 角閃石若干	ナデ, 回転糸切り後ナデ	褐色	E6区	
	33	土師器小皿	(9.7)	1.6	(6.9)	白色細粒・角閃石多量, 斜長石	ナデ, 回転糸切り後ナデ	灰黄褐色	F0区, F1区	
	34	土師器小皿	(9.1)	1.2	(7.2)	角閃石多量, 白色細粒, 斜長石若干	ナデ, 回転糸切り後ナデ	淡黄褐色	F-1区	
	35	土師器小皿	(10.3)	1.4	(8.2)	斜長石, 角閃石多量・白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	赤褐色	F0区	
	36	土師器小皿	(8.7)	1.3	(6.9)	角閃石, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り, 板状圧痕	褐色	F-1区	
	37	土師器小皿	8.9	1.3	6.9	角閃石, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	にぶい黄褐色	E6区	
	38	土師器小皿	(8.8)	1.5	(7.6)	角閃石多量, 斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F6区	
	39	土師器小皿	(9.8)	1.5	(7.2)	角閃石, 斜長石	ナデ, 回転糸切り	淡黄色	F-1区	
	40	土師器小皿	(9.4)	1.2	(7.9)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	C1区	
	41	土師器小皿	(9.0)	1.6	(6.7)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	黄褐色	F-1区	
	42	土師器小皿	8.4	1.2	7.1	斜長石, 角閃石, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	褐色	F0区	
	43	土師器小皿	8.2	1.3	7.3	金雲母多量, 角閃石若干	ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	にぶい赤褐色	E6区, P3	
	44	土師器小皿	(11.4)	2.4	(8.2)	白色細粒多量, 角閃石	ナデ, 回転糸切り後ナデ	褐色	G1区	
	45	土師器小皿	(5.6)	1.9	(3.4)	角閃石・白色細粒若干	ナデ, 回転ナデ	にぶい褐色	K-3, P1	
	46	土師器小皿	(6.6)	1.7	(4.7)	角閃石, 白色細粒若干	ナデ,	褐色	K1J-3区南北トレ	
	47	土師器小皿	8.7	1.7	6.9	角閃石多量, 斜長石, 白色細粒	ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区, F1区	
	48	土師器小皿	(12.4)	—	—	白色細粒多量, 角閃石若干	ナデ,	淡灰褐色	K-3, P5	
	49	土師器小皿	—	—	5.4	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 板状圧痕	淡灰褐色	I・J-2区整地層	
50	土師器小皿	11.5	2.2	5.6	白色細粒, 角閃石若干	一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り, 板状圧痕	淡黄褐色	I・J・K-3区南北トレ		
51	土師器小皿	11.4	1.8	5.5	斜長石, 白色細粒若干	一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	K3, P21		
52	土師器小皿	(11.1)	2.1	(5.8)	白色細粒多量, 斜長石・角閃石若干	一定方向ナデ, ナデ, 板状圧痕	褐灰色	I・J-2区		
53	土師器小皿	—	—	5.8	白色細粒	ナデ, 回転糸切り後ナデ	淡黄色	F1区		
66	54	土師器環	(12.6)	—	—	角閃石, 白色細粒	横ナデ	黄褐色	H-2区, 南北トレ	
	55	土師器環	(13.3)	—	—	角閃石, 白色細粒若干	横ナデ	淡黄褐色	E6区	
	56	土師器環	(12.5)	3.0	(7.0)	白色細粒多量, 角閃石	ナデ, 回転糸切り	褐色	F6区	
	57	土師器環	(14.9)	—	—	角閃石多量, 斜長石若干	横ナデ	淡黄褐色	F-1区	
	58	土師器環	(14.8)	—	—	角閃石, 白色細粒若干	横ナデ	淡灰褐色	C-1区, F0区	
	59	土師器環	(14.2)	3.4	(8.7)	角閃石, 斜長石・白色細粒若干	回転ナデ後一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	褐色	F1区, F-1区	
	60	土師器環	(14.2)	3.5	(7.3)	角閃石, 白色細粒若干	回転ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区	
	61	土師器環	(16.7)	—	—	角閃石, 白色細粒若干	横ナデ	淡灰褐色	C1区	
	62	土師器環	—	—	9.2	角閃石, 斜長石若干	一定方向ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	灰褐色	G0区	
	63	土師器環	—	—	10.0	白色細粒, 斜長石, 角閃石若干	一定方向ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F-1区	
	64	土師器環	(15.2)	—	—	角閃石, 白色細粒若干	横ナデ	灰褐色	F0区	
	65	土師器環	(14.4)	—	—	角閃石多量, 白色細粒若干	横ナデ	黄褐色	F0区	
	66	土師器環	(14.7)	2.5	(9.0)	角閃石多量, 斜長石・白色細粒若干	一定方向ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区	
	67	土師器環	—	—	(8.8)	斜長石・角閃石若干	回転ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F-1区	
	68	土師器環	16.1	4.0	9.7	斜長石・角閃石, 白色細粒若干	一定方向ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F0区, F1区, H0区, H1区	
	69	土師器環	—	—	(8.2)	角閃石多量, 斜長石若干	一定方向ナデ, 横ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F-1区, F1区	
	70	土師器環	(15.5)	3.7	(8.8)	角閃石, 斜長石	一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	にぶい赤褐色	F-1区, F1区	
	71	土師器環	—	—	(7.7)	角閃石多量, 白色細粒	一定方向ナデ, 回転ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区	
72	土師器環	—	—	(8.0)	角閃石・白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区, F-1区		
73	土師器環	—	—	(7.2)	白色細粒, 角閃石	ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区		
74	土師器環	—	—	(7.2)	角閃石・白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	灰黄褐色	F0区		
75	土師器環	—	—	(7.7)	角閃石・斜長石若干	ナデ, 回転糸切り	灰褐色	F0区		
76	土師器環	(15.7)	3.0	(11.7)	角閃石多量, 白色細粒	ナデ, 回転糸切り	黄褐色	F-1区		
77	土師器環	—	—	(8.5)	斜長石, 白色細粒若干	ナデ, 回転糸切り	淡黄褐色	F1区		
67	78	土師器環	12.7	4.4	12.7	角閃石多量, 斜長石若干	ナデ, 回転糸切り	褐色	I・J-2区整地層	
	79	土師器環	—	—	(6.2)	斜長石, 白色細粒, 角閃石若干	粗いナデ, ナデ, 回転糸切り	灰褐色	I・J-2区大型整穴状遺構下層	
	80	土師器環	—	—	(7.0)	角閃石多量, 斜長石, 白色細粒若干	粗いナデ, ナデ, 回転糸切り	黄褐色	K-3区, P19	
	81	土師器環	—	—	7.0	角閃石多量, 白色細粒若干	一定方向ナデ, ナデ, 回転糸切り	黄褐色	IJK-3区南北トレ	

挿図	番号	器種	法量 (cm)			胎土	調整	色調	出土地	備考
			口径	器高	底径					
67	82	土師器環	—	—	(9.0)	斜長石,角閃石,白色細粒	ナデ,粗いナデ	橙色	I-2区地層	
	83	土師器環	—	—	(5.4)	角閃石多量,斜長石,白色細粒若干	ナデ	赤褐色	G0区,G1区	
	84	土師器碗	(16.6)	—	—	角閃石多量,斜長石若干	ナデ後ミガキ,ナデ	灰黄褐色(内面黒褐色)	F1区,F-1区,E5区	内黒土器
	85	土師器碗	—	—	6.7	斜長石多量,角閃石	ミガキ,回転ナデ,板状圧痕	黄褐色(内面黒褐色)	F-1区	内黒土器
	86	土師器碗	11.7	—	—	角閃石,白色細粒若干	ナデ	灰黄褐色	I・J-2区整地層	
	87	土師器碗	(15.9)	—	—	角閃石,白色細粒若干	横ナデ	にぶい褐色	F0区	
	88	土師器碗	(16.1)	—	—	斜長石	横ナデ	にぶい褐色	F1区	
	89	土師器碗	(16.8)	—	—	斜長石,角閃石若干	ナデ	赤褐色	E6区	
	90	土師器碗	—	—	(6.7)	斜長石多量,角閃石	ミガキ,回転ナデ,ナデ,板状圧痕	黄褐色(内面黒褐色)	F-1区	
	91	土師器碗	—	—	(6.2)	角閃石,斜長石・白色細粒若干	ナデ	淡黄褐色	F6区	
	92	土師器碗	—	—	(7.3)	角閃石,斜長石	ナデ,回転糸切り	淡黄褐色	F1区	
	93	土師器碗	—	—	(6.5)	角閃石多量,白色細粒若干	ナデ	淡黄褐色	F6区	
	94	土師器碗	—	—	(6.5)	角閃石多量,白色細粒	ナデ後ミガキ,回転ナデ,板状圧痕	黄褐色	F-1区	
	95	土師器碗	—	—	(6.3)	角閃石,白色細粒	ナデ,ヘラミガキ,ナデ	灰黄褐色	F6区	
	96	土師器碗	—	—	6.9	角閃石多量,斜長石,赤褐色粒若干	ナデ	淡黄褐色	F0区	ヘラ記号
	97	土師器碗	—	—	(5.6)	角閃石,白色細粒	ナデ	にぶい黄褐色	F1区	
	98	土師器碗	—	—	6.5	角閃石多量,白色細粒・砂粒若干	ナデ,回転ナデ,回転糸切り後ナデ	赤褐色	F0区	
	99	土師器碗	—	—	(7.1)	斜長石,白色細粒,角閃石若干	ナデ	灰黄褐色	I-2区大型竪穴遺構	
	100	土師器碗	—	—	(6.9)	斜長石,角閃石	ナデ	淡黄褐色	G0区,G-1区	
	101	土師器碗	—	—	(5.7)	角閃石,白色細粒若干	ナデ	淡黄褐色	H0区東西トレンチ	
	102	土師器碗	—	—	(6.6)	角閃石多量,斜長石・赤褐色粒若干	ナデ	淡黄褐色	F-1区	
	103	土師器碗	—	—	(6.3)	角閃石多量,白色細粒若干	多方向ナデ,横ナデ	淡黄褐色	F0区	
	104	土師器碗	—	—	(6.9)	角閃石,斜長石若干	ナデ,回転糸切り	にぶい黄褐色	F1区,F-1区	
	105	土師器碗	—	—	(6.4)	角閃石多量,斜長石若干	ナデ,回転糸切り	淡黄褐色	F-1区	
	106	土師器碗	—	—	(8.4)	角閃石,白色細粒若干	ナデ,横ナデ	淡黄褐色	F-1区	
	107	土師器碗	—	—	(7.6)	角閃石,斜長石	板状工具によるナデ,一部ナデ,回転ナデ	淡黄褐色	F6区	
	108	土師器碗	—	—	(6.1)	角閃石,斜長石	ナデ,回転糸切り後一定方向ナデ	黄褐色	F0区	
	109	土師器碗	—	—	(6.5)	白色細粒多量,角閃石,斜長石	ナデ	灰黄褐色	K1J-3区南北トレ	
	110	土師器碗	—	—	(6.6)	角閃石多量,斜長石	ナデ	灰黄褐色	E6区	
	68	111	瓦器碗	(15.0)	—	—	斜長石・角閃石若干	ナデ	灰黄褐色	F0区,C1区
112		瓦器碗	(15.2)	—	—	角閃石,斜長石	ナデ	灰褐色	F2区	
113		瓦器碗	(15.8)	5.5	(7.6)	角閃石,白色細粒,斜長石若干	ナデ	灰褐色	E6区	
114		瓦器碗	(15.1)	6.4	(6.6)	角閃石,斜長石若干	ナデ	灰褐色	E6区	
115		瓦器碗	(15.7)	6.0	(6.5)	角閃石若干	ナデ,回転ナデ	灰褐色	F7区	
116		瓦器碗	—	—	(6.8)	斜長石多量,金雲母,白色細粒若干	ナデ	灰褐色	F0区	
117		瓦器碗	—	—	(7.2)	斜長石多量,角閃石・白色細粒若干	ナデ	暗灰褐色	F6区	
118		瓦器碗	—	—	(6.3)	白色細粒多量,角閃石	ナデ,回転ナデ,一定方向ナデ	灰褐色	F6区	
119		瓦器碗	—	—	(7.8)	斜長石多量,金雲母若干	ナデ	灰褐色	I-2区整地層	
120		瓦器碗	—	—	(6.9)	斜長石多量,白色細粒	ナデ	灰褐色	F-1区	
121		瓦器碗	—	—	(7.1)	白色細粒多量,角閃石	ナデ	灰褐色	C1区	
122		瓦器碗	—	—	(6.6)	斜長石多量,白色細粒,角閃石若干	ナデ,回転糸切り	灰褐色	F-1区	
123		瓦器碗	—	—	(6.4)	斜長石,白色細粒若干	ナデ	灰褐色	F0区	
124		瓦器碗	—	—	(7.4)	白色細粒多量,斜長石	ナデ	灰色	E7区	
125		瓦器碗	—	—	(7.2)	斜長石多量,角閃石・白色細粒若干	ナデ	灰褐色	F6区	
126		瓦器碗	—	—	(7.3)	白色細粒,斜長石多量	ナデ	灰褐色	I・J-2区整地層	
127		瓦器碗	—	—	(5.6)	角閃石多量,白色細粒若干	ナデ,回転ナデ	黒褐色	F0区	
128		瓦器碗	—	—	(6.3)	角閃石,斜長石多量	ナデ,板状圧痕	灰褐色	H-1区,H0区	
129		瓦器碗	15.7	5.8	5.9	白色細粒・角閃石多量,金雲母	ナデ,回転糸切り	灰白色	G0区	
130		瓦器碗	—	—	6.8	金雲母多量,白色細粒,角閃石若干	一定方向ナデ,回転ナデ,回転糸切り	淡黄褐色	I-2区	
131	瓦器碗	(13.8)	—	—	角閃石,斜長石若干	ナデ	淡黄褐色	F0区		
132	瓦器碗	(11.2)	5.5	(5.0)	角閃石,斜長石若干	板状工具によるナデ後ミガキ,ナデ後一部ミガキ	灰褐色	I-2区石垣内		
133	瓦器碗	—	—	(5.7)	金雲母多量,角閃石,白色細粒	ナデ	灰褐色	IJK-3区南北トレ		
134	瓦器碗	—	—	6.8	斜長石多量,角閃石	ミガキ,回転ナデ,ナデ	暗灰褐色	E8区	ヘラ記号	
69	135	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒多量,角閃石若干	多方向ナデ,回転ナデ	灰色	F1区	東播系
	136	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒,角閃石	回転ナデ	灰色	F-1区	東播系
	137	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒・角閃石若干	横ナデ	灰褐色	G0区	東播系
	138	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒,角閃石若干	横ナデ	灰褐色	H0区,H1区	東播系
	139	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒若干,角閃石微量	横ナデ	灰褐色	H0区,H-1区	東播系
	140	須恵器系鉢	—	—	—	白色細粒,角閃石若干	横ナデ	灰褐色	F0区	東播系
	141	須恵器系鉢	—	—	(7.7)	角閃石,白色細粒	ナデ,横ナデ	灰色	F0区	東播系
	142	須恵器系鉢	—	—	(10.7)	白色細粒,角閃石	ナデ	灰色	F0区	東播系
	143	須恵器系鉢	—	—	(8.7)	白色細粒,角閃石,砂粒若干	ナデ,横ナデ	灰色	I-1区石垣側整地層内	東播系
	144	瓦質鉢	—	—	—	白色細粒・角閃石若干	ナデ	灰褐色	I-2区	
	145	瓦質鉢	—	—	—	白色細粒・斜長石若干	横ナデ	灰色	I・J-2区大型竪穴遺構下層	
	146	瓦質鉢	—	—	—	白色細粒,角閃石	ナデ	灰褐色	I-2区整地層	
147	瓦質鉢	—	—	—	角閃石,斜長石,白色細粒若干	ナデ	灰褐色	I・J-2区大型竪穴遺構		
148	瓦質鉢	—	—	—	白色細粒多量,角閃石若干	ハケ目後ナデ,ナデ	灰褐色	C1区		
149	瓦質釜	—	—	—	白色細粒・斜長石若干	ハケ目,ナデ	灰白色	C1区		
150	瓦質釜	—	—	—	角閃石,白色細粒	ハケ目,ナデ	にぶい褐色	F-1区		
70	151	土師器釜	(26.4)	—	—	白色細粒多量,斜長石・角閃石若干	横ナデ,一部ハケ目(受部径=29.6cm)	淡黄褐色	F2区,P1	瓦質B
	152	土師器釜	—	—	—	砂粒・白色細粒多量,角閃石若干	ナデ	淡黄褐色	C1区	瓦質B
	153	土師器	—	—	—	白色細粒,斜長石,金雲母若干	ナデ	橙色	I・J-2区大型竪穴遺構下層	
	154	土師器	—	—	—	角閃石,斜長石	ナデ	淡黄褐色	H-1区,H0区東西トレ	
	155	瓦質鉢	36.7	11.7	19.7	角閃石,白色細粒	ミガキ,横ナデ	灰褐色	I・J-2区整地層	使用痕
	156	石鍋	(31.4)	—	—	石材 滑石	ノミによる削り後研磨	灰色(スス附着)	F1区	蔓取手穴
	157	石鍋	—	—	—	石材 滑石	ノミによる削り後研磨	灰色	C1区	
	158	石鍋	(32.0)	—	—	石材 滑石	丁寧な研磨(受部径=37.5cm)	灰色(スス附着)	F0区	
	159	石鍋	—	—	—	石材 滑石	ノミによる削り後丁寧な研磨	灰色	H0区東西トレ	
	160	土釜	(22.5)	—	—	角閃石・斜長石多量,白色細粒若干	丁寧なナデ(受部径=27.1cm)	にぶい褐色	F1区	
	161	土釜	(24.8)	—	—	白色細粒多量,砂粒,角閃石,斜長石	ナデ	灰褐色	F0区,F-1区	
	162	土釜	—	—	—	白色細粒,角閃石若干	ナデ,ヘラ削り後ナデ	淡黄褐色	G0区・3区石垣崩壊土	脚部分
	163	土鍋	—	—	—	角閃石,白色細粒	ハケ目,ナデ	にぶい黄褐色	H2区	
	164	土鍋	—	—	—	角閃石,白色細粒	ハケ目,ナデ	にぶい褐色	H0区東西トレ	
	165	土鍋	—	—	—	斜長石,白色細粒	ハケ目,ナデ	灰色	I・J-2区整地層	
	166	土鍋	—	—	—	角閃石多量,白色細粒	ナデ	黒褐色(内面灰褐色)	H-1区,H0区東西トレ	

挿図	番号	器種	法量 (cm)			胎土	調整	色調	出土地	備考	
			口径	器高	底径						
70	167	土鍋	—	—	—	斜長石,角閃石若干	ナデ	黒褐色	K-3区, P-15		
	168	土鍋	(30.4)	—	—	白色細粒多量,斜長石若干	ハケ目,ハケ目後ナデ,タタキ	淡灰褐色	I・J-3区南北トレ	底部格子タタキ	
	169	土鍋	—	—	—	斜長石,白色細粒若干	多方向ナデ	灰褐色	H-2区南北トレ		
71	170	土鍋	—	—	—	角閃石・斜長石多量,白色細粒若干	ナデ(一部調整具の後部痕有)	灰褐色	F0区		
	171	土鍋	—	—	—	砂粒・白色細粒,角閃石多量	ナデ	灰褐色	F0区		
	172	土鍋	—	—	—	角閃石多量,斜長石,白色細粒若干	ハケ目,ハケ目後ナデ	黒褐色(内面黄褐色)	H0区,H-1区東西トレンチ		
	173	土鍋	—	—	—	角閃石,白色細粒多量	ナデ	灰褐色	F0区		
	174	土鍋	(28.2)	—	—	砂粒・白色細粒多量,角閃石	粗いナデ,横ナデ,ミガキ	暗灰褐色(内面にぶい褐色)	F0区		
	175	土鍋	—	—	—	砂粒・斜長石多量,白色細粒	ナデ,ハケ目後ナデ	褐色	G-1区		
	176	土鍋	—	—	—	角閃石,斜長石,白色細粒若干	ハケ目,回転ナデ,ナデ	灰褐色	H0区,H-1区南北トレンチ		
	177	土鍋	(37.6)	—	—	角閃石,斜長石,砂粒	丁寧なナデ,横ナデ,多方向ナデ	にぶい茶褐色(外面黒変)	F1区		
	178	土鍋	(27.0)	25.5	—		平滑ナデ,細いハケ目,横ナデ,ナデ,ハケ目		F-1区, F0区, F1区		
	72	179	摺鉢	—	—	—	白色細粒多量,砂粒若干	ナデ	灰褐色	E8区	周防型
180		摺鉢	—	—	—	白色細粒多量,角閃石	ナデ	黒褐色	H2区	周防型	
181		摺鉢	—	—	—	白色細粒多量,角閃石	ハケ目,ナデ	灰褐色	I-2区石垣内	周防型	
182		摺鉢	(32.9)	(13.8)	(15.1)	白色細粒多量,角閃石若干	カキ目,ナデ	灰色	I・J-2区西側トレ P3 P4 P5 I・J-3区南北トレ R-2区 P-5	周防型	
183		摺鉢	—	—	—	斜長石,角閃石,白色細粒	ナデ	灰褐色	K-2区, P7		
184		摺鉢	—	—	—	白色細粒多量,砂粒,角閃石若干	ナデ	灰褐色	I-2区大型竅穴状遺構	備前焼	
185		摺鉢	(24.4)	—	—	白色細粒多量,角閃石若干	横ナデ	赤褐色	H2区	備前焼	
186		摺鉢	(38.0)	—	—	白色細粒,角閃石若干	横ナデ	赤褐色	I-2区	堺焼	
187		摺鉢	(34.0)	—	—	白色細粒,角閃石若干	横ナデ	赤褐色	I-2区	堺焼	
73		188	摺鉢	—	—	(15.7)	角閃石若干	ナデ(鉄釉)	暗褐色	I-1区石垣南側地層,I-2区	唐津焼
	189	火鉢	—	—	—	角閃石,白色細粒若干	ナデ	灰褐色	L-3区, P4		
	190	火鉢	—	—	—	角閃石,斜長石粒	ナデ	黄褐色	H-2・3区石垣南側地層		
	191	火鉢	—	—	—	角閃石,白色細粒若干	ナデ	灰褐色			
	192	火鉢	(8.8)	—	(4.5)	角閃石若干	ナデ	淡黄褐色	I・J-2区大型竅穴遺構下層	火入れLor香炉	
	193	火鉢	—	—	—	角閃石粒	ナデ	灰色	K-3区, P20	火入れLor香炉	
	194	火鉢	(10.6)	—	—	白色砂粒	ナデ	灰色	I-2区	火入れLor香炉	
	195	火鉢	—	—	(30.2)	角閃石多量,斜長石	粗いナデ	灰黄褐色	I・J-2区西側トレP30 I・J-3区南北トレR-3		
	74	196	甕	(39.1)	—	—		ナデ	赤灰色	L-3 K-3 P7 P9 H・J-2区石垣南側トレ	
		197	甕	(37.9)	—	—		ナデ	赤灰色	I・J-2区西側トレ K-2区・P-2 H2区	建物1 備前焼
198		甕	(38.3)	—	—		ナデ	赤灰色	I J-3区南北トレ	備前焼	
199		甕	—	—	—		ナデ	赤灰色	H・I-2区石垣南側トレ	備前焼	
200		甕	—	—	—		ナデ	赤灰色	H0区,H-1区南北トレンチ	側前焼	
201		壺	(12.7)	—	—		ナデ	灰褐色(赤味)	H-2・3区石垣南側地層	備前焼	
202		壺	—	—	—	白色細粒若干	当具痕,横ナデ,ナデ,タタキ	灰色	H-2・3区石垣南側地層	東播系	
203		壺	—	—	—	白色細粒	当具痕,横ナデ,タタキ	灰色	I・J-K-3区南北トレ	東播系	
204		壺	—	—	—	白色細粒,角閃石若干	ナデ,タタキ	灰色	F-2区	東播系	
205		壺	—	—	—	角閃石多量,砂粒,斜長石	ハケ目,格子目タタキ	淡黄褐色	I-1区,I-2区石垣南側地層	亀山焼	
75	206	焜炉	—	—	—	角閃石若干	ナデ,回転ナデ	にぶい黄褐色	I-2区		
	207	焜炉	—	—	—	角閃石若干	ナデ,回転ナデ	灰黄色	I-2区		
	208	火鉢	—	—	8.6	角閃石・白色細粒若干	横方向ナデ,ナデ	灰褐色	I-2区		
	209	鉢	—	—	6.7	角閃石,白色細粒若干	回転ナデ,ナデ	赤褐色	I-1区石垣南側地層		
	210	鉢	27.4	—	—	角閃石,斜長石若干	ナデ	灰褐色	I-2区		

挿図	番号	器種	法量 (cm)			装飾	製作地	年代	出土地	備考	
			口径	器高	底径						
75	211	天目茶碗	—	—	—	絵付・釉薬 文様 装飾特徴	瀬戸美濃	16C	F-2区		
	212	陶器皿	(12.0)	—	—		福岡系	18C後半以降	H-2区, H-3区		
	213	陶器急須	(7.7)	8.8	(6.8)	回転ナデ, スス付着	関西系	18C後半	E10区石組遺構		
	214	陶器壺	8.2	—	—	透明釉		18C後半以降	I-2区		
	215	二彩鉢	—	—	—		唐津	17C後半~18C前半	H-2区		
	216	鉢	(16.3)	—	—	透明釉	関西系	18C後半	E10区石組遺構		
	217	植木鉢	—	—	(24.0)	透明釉, 全面貫入有り	瀬戸美濃	18C後半~19C前半	H-2区		
	218	灯火具	—	—	(7.3)	ナデ, 底部回転糸切り			F1区		
	219	灯火具	—	—	(7.4)	ナデ, 底部回転糸切り			F1区		
	220	土製人形	—	—	—		伏見?	18C後半以降	E10区石垣遺構		
	76	221	磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~後半	F0区	
		222	磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~後半	K-3区, P-13	
		223	磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	F0区	
224		磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	C1区		
225		磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	H-1区H6区東西トレ		
226		磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	F-1区		
227		磁器碗	—	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	F0区		
228		磁器碗	—	—	—	白磁	中国	12C中頃~後半	F0区, C1区		
229		磁器碗	(14.7)	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	I-2区		
230		磁器碗	(18.3)	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	F-1区		
231		磁器碗	(16.7)	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半	F6区		
232		磁器碗	(15.5)	—	—	白磁	中国	11C後半~12C後半			
233		磁器碗	—	—	(5.0)	白磁	中国	11C後半~12C前半	F-1区, F0区		
234		磁器碗	—	—	(6.0)	白磁	中国	11C後半~12C前半	E0区, F0区		
235		磁器碗	—	—	(5.8)	白磁	中国	11C後半~12C前半	F-1区, F0区		
236	磁器碗	—	—	(6.5)	白磁	中国	11C後半~12C前半	C1区			
237	磁器碗	—	—	(5.8)	白磁	中国	11C後半~12C前半	I・J-2区西側トレ			
238	磁器碗	—	—	(6.8)	白磁, 見込み蛇ノ目釉ハギ	中国	12C中頃~後半	E7区			
239	磁器碗	—	—	(6.2)	白磁	中国	11C後半~12C前半	H-1区石垣南側地層			
240	磁器碗	—	—	(5.9)	白磁	中国	11C後半~12C前半	C1区			
241	磁器碗	—	—	(5.4)	白磁	中国	12C中頃~13C	H-1区, H0区東西トレ			
242	磁器碗	—	—	(4.9)	白磁, 高台裏へラ切り痕	中国	12C中頃~13C	F-1区			
243	磁器皿	(9.6)	—	—	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半~12C前半	F0区, F-1区			
244	磁器皿	(9.1)	(1.7)	(3.2)	白磁, 見込み蛇ノ目釉ハギ	中国	12C中頃~後半	H-2・3区石垣南側地層			

挿図	番号	器種	法量 (cm)			装飾 絵付・釉薬 文様 裝飾特徴	製作地	年代	出土地	備考	
			口径	器高	底径						
76	245	磁器碗	(10.6)	—	—	白磁	中国	11C後半～12C後半	H-1区, H0区東西トレ		
	246	磁器碗	(10.3)	—	—	白磁	中国	12C中頃～後半	F-1区		
	247	磁器碗	—	—	—	白磁	中国	12C中頃～13C	E6区		
	248	磁器碗	(11.3)	—	—	白磁, 見込み沈線1本, 全面貫入有り	中国	12C中頃～13C	F-1区		
	249	磁器皿	—	—	(3.8)	白磁, 見込み片彫り草花文	中国	12C中頃～13C	F0区		
	250	磁器碗	(10.2)	(3.0)	(3.8)	白磁	中国	11C後半～12C	F0区		
	251	磁器碗	(14.8)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	11C後半～12C	H1-2区石垣南整地層		
	252	磁器碗	(15.8)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	11C後半～12C	F1区		
	253	磁器碗	(16.6)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	11C後半～12C	F0区		
	254	磁器碗	(16.7)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	11C後半～12C	E0区, F0区		
	255	磁器碗	(16.2)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	11C後半～12C	E6区		
	256	磁器碗	(13.8)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	12C中頃～13C	F0区		
	257	磁器碗	(14.2)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	12C中頃～13C	F0区		
	258	磁器碗	(15.0)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	12C中頃～13C	C1区		
	259	磁器碗	(16.3)	—	—	白磁, 口縁玉縁	中国	12C中頃～13C	F-1区		
	260	磁器碗	—	—	(6.7)	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半～12C	C1区		
	261	磁器碗	—	—	(7.0)	白磁	中国	11C後半～12C	F0区		
	262	磁器碗	—	—	(6.1)	白磁	中国	11C後半～12C	I-2区整地層		
	263	磁器碗	—	—	(6.8)	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半～12C	F1区		
	264	磁器碗	—	—	(6.4)	白磁	中国	11C後半～12C	G0区, G1区		
	265	磁器碗	—	—	(6.4)	白磁	中国	11C後半～12C	K-1区		
	266	磁器碗	—	—	(6.5)	白磁	中国	11C後半～12C	F0区		
	267	磁器碗	—	—	(5.8)	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半～12C	F0区		
	268	磁器碗	—	—	(6.0)	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半～12C	E5区		
	269	磁器碗	—	—	(6.8)	白磁, 見込み沈線1本	中国	11C後半～12C	F-1区		
	77	270	合子蓋	—	—	—	白磁	中国	12C後半～13C	H・I-2区	
		271	合子蓋	(5.7)	(1.8)	—	白磁, 上部花文, 胴部蓮弁文	中国	12C後半～13C	G0区, G1区	
272		合子身	(5.0)	—	—	白磁, 外面蓮弁文	中国	12C後半～13C	F0区	受部径5.7cm	
273		磁器碗	—	—	—	青磁, 内面片彫り, 草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	E6区		
274		磁器碗	—	—	(6.7)	青磁, 内面片彫りの草花文, 全面貫入有り	龍泉窯系	12C中頃～後半	IJK-3区南北トレ		
275		磁器碗	—	—	(6.0)	青磁, 見込みに「金玉満堂」の段銘有り	龍泉窯系	13C前半～14C前後	C1区		
276		磁器碗	—	—	(5.2)	青磁	龍泉窯系	12C前半～14C前後			
277		磁器碗	(15.2)	—	—	青磁, 内面片彫り草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	E6区		
278		磁器碗	(15.4)	—	—	青磁, 内面片彫り草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	J-2区南北トレ, E6区		
279		磁器碗	(17.0)	—	—	青磁, 内面片彫り草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	H-2区		
280		磁器碗	(17.8)	—	—	青磁, 内面片彫り草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	H-1区, H0区南北トレ		
281		磁器碗	—	—	—	青磁, 内面片彫り草花文	龍泉窯系	12C中頃～後半	I-2区		
282		磁器皿	(9.8)	—	—	青磁	同安窯系?	12C後半	H-1区東西トレ		
283		磁器皿	(9.6)	—	—	青磁	龍泉窯系	12C中頃～後半	E7区		
284		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面櫛描き文	同安窯系	12C後半	F0区		
285		磁器碗	—	—	(5.1)	青磁, 内面櫛描き文	同安窯系	12C後半	F1区, F-1区		
286		磁器碗	—	—	(5.7)	青磁, 外面櫛描き文	同安窯系	12C後半	F4区		
287		磁器碗	—	—	(4.6)	青磁, 内外面櫛描き文	同安窯系	12C後半	F-1区		
288		磁器皿	—	—	(4.4)	青磁, 内面櫛描き文	同安窯系	12C後半	IJ西側トレンチ		
289		磁器皿	—	—	(4.6)	青磁, 内面櫛描き文	同安窯系	12C後半	F1区		
290		磁器皿	—	—	(4.4)	青磁, 内面櫛描き文	同安窯系	12C後半	J2区		
291		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	14C前半～15C前後	H0区, H-1区東西トレ		
292		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	14C前半～15C前後			
293		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	14C前半～15C前後	I-2区整地層		
294		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	14C前半～15C前後	G0区, G-1区		
295		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	13C前半～14C前後	H・I-2区石垣南整地層		
296		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	13C前半～14C前後	H-1区, H0区東西トレ		
297		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	13C前半～14C前後	F0区, F-1区		
298		磁器碗	—	—	—	青磁, 外面蓮弁文	龍泉窯系	13C前半～14C前後	G0区, G-1区		
78		299	磁器皿	—	—	—	白磁, ロハゲ	中国	13C後半～14C前半	IJK-3区南北トレ	
		300	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	F2区	
		301	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	IJ-2区西側トレ	
		302	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	K-3区, P20	
	303	磁器碗	—	—	—	青磁, 全面貫入有り	龍泉窯系	14C中頃前後			
	304	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	H-2区		
	305	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	H-1区, H0区		
	306	磁器碗	—	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	I-2区		
	307	磁器碗	(13.6)	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	F0区, F-1区		
	308	磁器碗	(15.0)	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	K-3区		
	309	磁器碗	(15.1)	—	—	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	IJ-2区西側トレ		
	310	磁器碗	(14.0)	—	—	青磁, 全面貫入有り	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	IJK-3区南北トレ		
	311	磁器碗	(15.8)	—	—	青磁, 全面貫入有り	龍泉窯系	14C中頃前後	K-2区, P1		
	312	磁器碗	—	—	(6.0)	青磁	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	H3区石垣内		
	313	磁器皿	(11.5)	—	—	青磁	龍泉窯系	14C	IJ-2区西側トレ		
	314	磁器碗	—	—	—	青磁, 外面雷文	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	I-2区整地層		
	315	磁器碗	—	—	—	青磁, 外面雷文	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	H2区		
	316	磁器碗	(15.9)	—	—	青磁, 内面雷文・蓮華文, 外面退化した蓮弁文	龍泉窯系	14C後半～15C中頃	K-2区, P3, I-2区 IJK-3区南北トレ		
	317	火入れ(香炉)	—	—	(3.7)	青磁, アーチ状に高台を切る	龍泉窯系	16C後半～17C初頭	H-2区, H-3区		
	318	磁器皿	—	—	4.0	白磁, 砂目有り	肥前唐津	1610～1630年	G0区, G1区		
	319	磁器碗	—	—	3.8	染付, 外面雨降文	肥前	1690～1740年	H-1区東西トレ		
	320	磁器碗	7.8	5.5	3.1	染付, 外面秋草文, 内面コンニャク印判(五弁花文)	肥前	1750～1790年	I-2区		
	321	磁器碗	7.3	5.2	3.6	染付, 外面格子地に菊花文, 内面(五弁花文)	肥前	1750～1790年	I-2区		
	322	磁器碗	7.5	6.1	4.0	青磁染付, 内面四方蓮文, 見込みコンニャク印刷(五弁花文)	肥前	1750～1790年	I-1区石垣南整地層		
	323	磁器碗	—	—	3.7	染付, 外面	肥前	18C	I-2区		
	324	磁器碗	—	—	3.4	染付, 内面見込みに「寿」	肥前	18C	H-2区		
	325	磁器碗	—	—	4.2	染付, 外面二重網目文	肥前	1740～1780年	H-2区		
	326	磁器碗	12.1	5.9	4.8	染付, 外面丸文, 内面見込み蛇, 目粗ハギ, コンニャク印判	肥前	18C後半	H・I-2区南北トレ		
	327	磁器瓶	—	—	—	青磁, 外面片彫り文	肥前	1630～17C末	I-1区石垣南整地層		

挿図	番号	器種	法量 (cm)			装飾	製作地	年代	出土地	備考
			口径	器高	底径					
79	328	磁器碗	(9.7)	—	—	染付(焦茶色の線),外面梅樹文	肥前	18C後半	I-2区	
	329	磁器碗	—	—	—	染付,外面梅樹文	肥前	18C後半	I-2区	
	330	磁器碗	(10.0)	—	—	染付,外面梅樹文	肥前	18C後半	I-1区石垣南整地層	
	331	磁器碗	(9.8)	—	—	染付,外面草文	肥前	18C後半	I-2区	
	332	磁器碗	11.9	5.0	4.4	染付,外面丸・井桁,内面蛇,目袖ハギ	肥前	18C後半	I-2区	
	333	磁器瓶	—	—	—	染付,外面梅花文,竹笹文	肥前	18C後半~19C前半	E10区石垣組遺構	
	334	磁器鉢	—	—	7.0	青磁	肥前?	18C後半~	H・I-2区石垣南北トレ	
	335	磁器皿	13.1	3.6	7.8	染付,透明釉,外面連続唐草文,高台裏文字(寿?) 内面蝶?見込みコンニャク印判(五弁花文)	肥前	18C後半	I-2区	
	336	磁器皿	(9.8)	2.2	5.0	染付,外面葉?,内面石榴?	肥前	18C後半	H-2区	
	337	磁器蓋	(11.2)	3.3	(6.3)	染付,外面葉	肥前	1780~1820年	I-2区	
	338	磁器碗	11.1	6.2	5.6	染付,外面浜千鳥	肥前	1780~1820年	I-2区	
	339	磁器碗	11.2	7.1	6.1	染付,外面草,見込み文字「寿」?	肥前	1780~1820年	I-2区	
	340	磁器碗	—	—	6.0	染付,外面葉	肥前	1780~1820年	I-2区	
	341	磁器碗	—	—	6.2	染付,外面水鳥?見込み「寿」	肥前	1780~1820年	I-2区	
	342	陶器小鉢	—	—	3.4	染付(焦茶色の線),外面松葉,全面貫入有り	関西系(信楽)	18C後半~	I-2区	
	343	陶器小鉢	—	—	2.9	染付,全面貫入有り	関西系(信楽)	18C後半~	I-2区	
	344	磁器紅皿	—	—	—	染付,外面「大坂新町お笹紅」	肥前	18C後半~19C中頃	H-2区	長与窯
345	磁器紅皿	—	—	—	染付,外面「大坂新町お笹紅」	肥前	18C後半~19C中頃	H-2区整地層	長与窯	
346	磁器皿	—	—	7.3	染付(細線描き),内面草文,蛇ノ目凹型高台	肥前	1810~1860年	E10区石垣組遺構		
347	磁器皿	13.6	3.5	7.3	染付,内面唐草文,見込み蛇ノ目袖ハギ,蛇ノ目凹型高台	肥前	18C後半~	I-2区		

挿図	番号	形状	外径 (cm)		内径 (cm)		重量 (g)	色調	出土地点	挿図	番号	形状	外径 (cm)		内径 (cm)		重量 (g)	色調	出土地点
			縦	横	最大	最小							縦	横	最大	最小			
80	353	管状	4.6	1.3	0.4	0.4	7.9	にぶい黄褐色	F-1区	80	362	管状	(3.55)	1.0	0.4	0.3	(4.0)	にぶい黄褐色	I・J-2区
	354	管状	4.5	1.4	0.5	0.4	9.5	灰黄色	F-1区		363	管状	3.8	0.8	0.4	0.3	5.2	黄褐色	F0区
	355	管状	4.2	1.3	0.4	0.4	7.6	灰黄色	F0区		364	管状	3.15	1.0	0.3	0.3	3.1	灰黄褐色	H0区
	356	管状	4.5	1.5	0.45	0.45	9.3	灰黄色	F1区		365	管状	3.7	1.2	0.4	0.3	4.2	にぶい橙色	F0区
	357	管状	4.7	1.4	0.4	0.4	7.8	灰黄褐色	E6区		366	管状	3.8	0.9	0.3	0.2	2.2	にぶい橙色	H0-1区
	358	管状	(1.4)	1.2	0.3	0.2	(2.7)	灰黄褐色	E・F6・7区		367	管状	(3.6)	1.1	0.3	0.3	(2.7)	灰黄褐色	E6区
	359	管状	(2.5)	1.2	—	—	(2.1)	灰黄褐色	H0-1区		368	管状	(2.4)	(1.0)	—	—	(1.0)	にぶい橙色	F6区
	360	管状	4.5	1.2	0.4	0.3	(5.3)	灰黄色	C-1区		369	管状	(1.9)	0.8	0.2	0.2	(1.0)	灰黄褐色	E6区
	361	管状	4.5	1.1	0.3	0.3	(4.7)	黒褐色	F0区										

(3) 鉄生産関係遺物

陽弓遺跡から出土した鉄生産関係の遺物には、①砂鉄を木炭で還元する製錬工程で派生する精錬滓、炉内滓、含鉄鉄滓、砂鉄焼結滓、鉄塊系遺物、黒煙化木炭、炉壁溶融物、粘土等、②荒鉄の成分調整で鉄塊の純度を向上させる精錬鍛冶工程(大鍛冶)で派生する椀形鍛冶滓(精錬鍛冶滓)、鉄塊系遺物等、③鍛打して目的の金属製品を作り出す鍛錬鍛冶工程で派生する椀形鍛冶滓(鍛錬鍛冶滓)、鍛造剥片、粒状滓等製鉄一貫作業に関わる遺物とともに、溶解した諸金属を「鑄型」に流し込んで、目的の器物を製作する鑄造工程に関わる溶解炉炉壁やこの過程で派生する溶解炉滓や溶解炉炉底滓などが検出されている。その他、鍛冶炉等に使用されたと考える被熱した石などがある。

こうした鉄生産関係遺物の分析等については、大澤正巳氏の本報告書附篇に詳細に報告されているので、ここでは、これら各工程において派生する鉄滓の分布状況や出土量、さらには羽口片、溶解炉炉壁について述べる。

鉄滓は、総数7029点検出され、総重量約232.9kgである。各鉄滓に出土数、量、比率は表16のとおりである。また、羽口破片60点、溶解炉炉壁片3点、焼石2点、黒鉛化木炭2点が検出された。

1) 製錬関係鉄滓の分布

製錬滓は、426点、全体の5.65%占め、調査区全域に分布するが、その内、F2区(21~30%)とG0区(11~20%)が多い。炉内滓は、659点、全体の14.45%にあり、これもほぼ全域から検出される。集中範囲はE5区(21~30%)、E4区・I-2区(11~20%)である。炉壁溶融物は、121点、全体の1.85%である。東地区、北西地区に分布し、特に東地区はE5(30%以上)・E4区(11~20%)と北西地区I-2区(11~20%)に多く検出されている。鉄塊遺物(Fe+)は、126点、全体の2.67%であり、丸形は東地区、北西地区に分布しE4区・I-2区(11~20%)に多く、角形は調査区中央から東地区のかけて分布するが、調査区中央(F2区、G0区、G1区)に集中(31%)する。また、鉄塊系遺物(Fe-)は250点、全体の3.02%であり、これは調査区全域に分布し、F2区・E5区(21~30%)に多い。以上が製錬関係鉄滓の分布状況である。このようにほぼ全域で製錬関係鉄滓が検出されるが、その中で、出土量が比較的多く、多種の鉄滓が重なる地区は、東地区のE4・5区、F2区と北西地区のI-2区である。

なお、製錬滓の成分組成は、国東町所在の製鉄遺跡（由井ヶ迫や原H、原IV、重藤遺跡等）と大差ないとのことである。

2) 精錬・鍛錬鍛冶関係鉄滓の分布

鉄滓群の内、この精錬工程と鍛錬工程によって派生する鉄滓の出土量が、最も多く精錬鍛冶滓が3824点、37.35%、鍛錬鍛冶滓が1319点、28.28%あり、両者で全体の65.63%占める。そして、鍛冶系ガラス質滓やガラス質椀形滓、鍛造剥片を含めた鉄滓分布は、鍛冶炉の付帯施設と考えられる土坑周辺及びやや西側のF2・3・4区、G0・1・2区に集中して分布している。このことから、大澤正巳氏は、この周辺に鍛冶炉や鉄床石の設置が想定できるとしている。

3) 鑄造関係遺物の分布

全体に出土量は少ない。溶解炉炉底滓は、11点、2.36%、溶解炉滓は、12点、2.42%である。溶解炉炉底滓は、鍛冶炉付帯土坑周辺のF3・4区、溶解炉滓は、流路状遺構を中心とするF0・1区、G0・区に分布する。

4) 鍛冶羽口及び溶解炉炉壁

羽口は60点が出土した。北西地区（I-2区、K-2区）南西地区（F0-1区）、東区の鍛冶炉付帯施設周辺及びその西側（F1・2・3区、G1・2区）から出土している。しかし、その大半は細片であり、実測可能であった2点を図下し得た。1は羽口部の半分ほどが残存しているもので、口周辺は溶変し多量のスラグが付着する。羽口復元内径は約3.7cm、復元外形約11cmほどである。2は4分の1ほどの破片で、スラグの付着がある。復元内径4.3cm、復元外形10～10.5cmである。耐火度は1320℃である。

溶解炉炉壁は、3点あり、G2区（流路状遺構）から出土した（第83図）。この3点は同一個体で接合され、外径約43.4cm、内径約31.4cm、厚さ3.7～6cmほどの規模であることがわかった。高さは不明であるが残存高で25.2cmあり、おそらく35cm前後と考えられる。内側には、厚さ約0.5～1cmのスラグが溶着しており、上半部が薄く下半部に向かって厚くなり、炉壁中ほどまで被熱され青灰色に変化している。また、壁外面には全体的に粘土を補充した補修痕ないし補強痕があり、その後荒ケズリ及び撫でで表面を調整している。使用粘土は、鉄分や軟化性をもつ塩基性成分などは少なく成形性に優れ、二酸化珪素、酸化アルミニウムを適度に含む耐火性に優れた品質で、耐火度1470℃である。年代は、流入した土師器や輸入磁器などから11世紀後半から13世紀後半と考えられる。

さて、溶解炉は、古代・中性の出土例からが径が50cmを越える大型とそれ以下の小型に大きく分類されるが、炉の構造や形態には根本的な変化はなく、材料を投入する上部（装入口）、木炭や地金が溶解する中段（装帯・溶解帯）、溶湯がたまる最下部（湯溜）に大きく分かれ、中段には羽口を斜め下方向に向かって装着する羽口孔をもつ構造である。今回検出された炉壁には、羽口孔などは確認されず、どの部位か断定できないが、形態的に上部か中段のどちらかとであろう。いずれにしても、平安後期～鎌倉時代の溶解炉そのものの発見は、二次堆積ではあったが本県では初例で、きわめて注目されることであった。（玉永）

参考文献

五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』1992

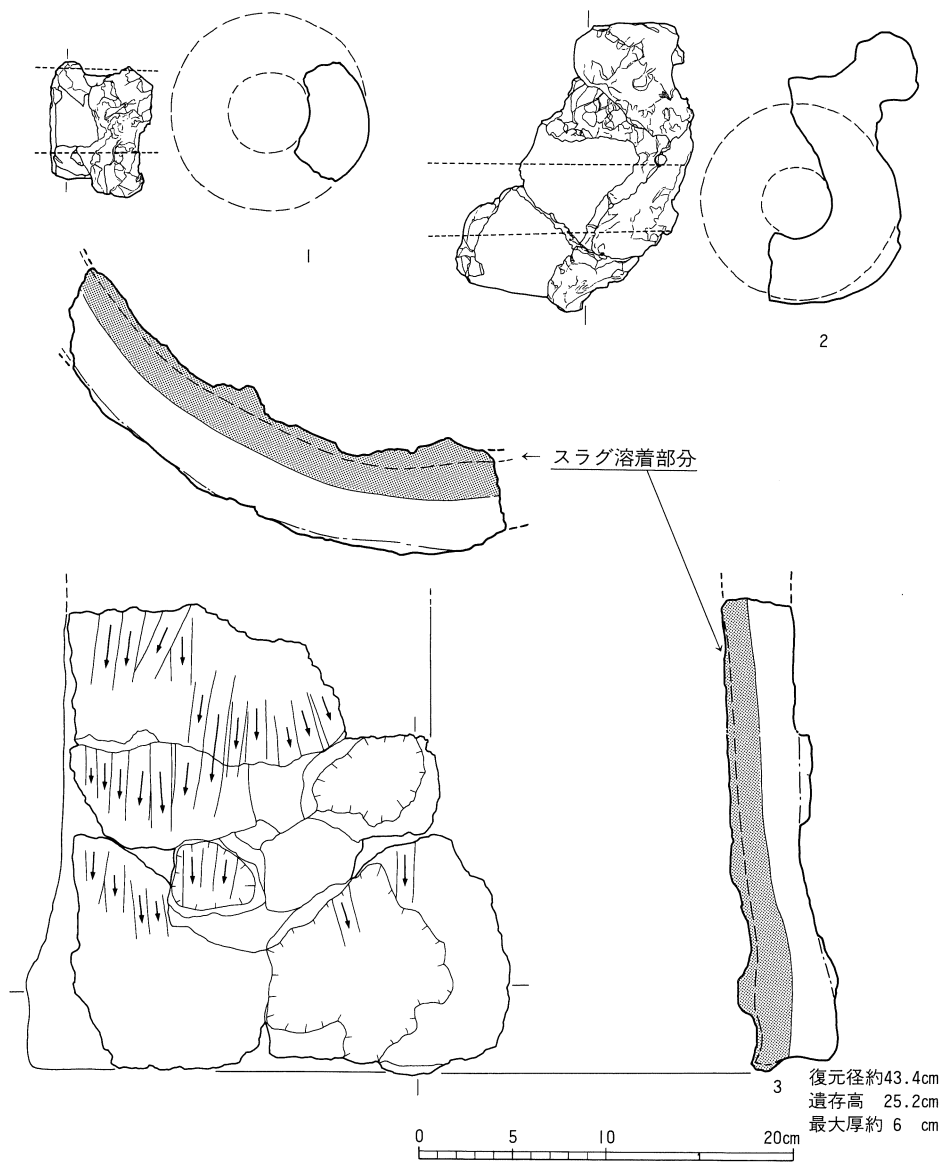
谷口俊二編『室町遺跡－小倉鑄物師に関する遺跡の調査－』北九州市埋蔵文化財調査報告書第95集1990

付

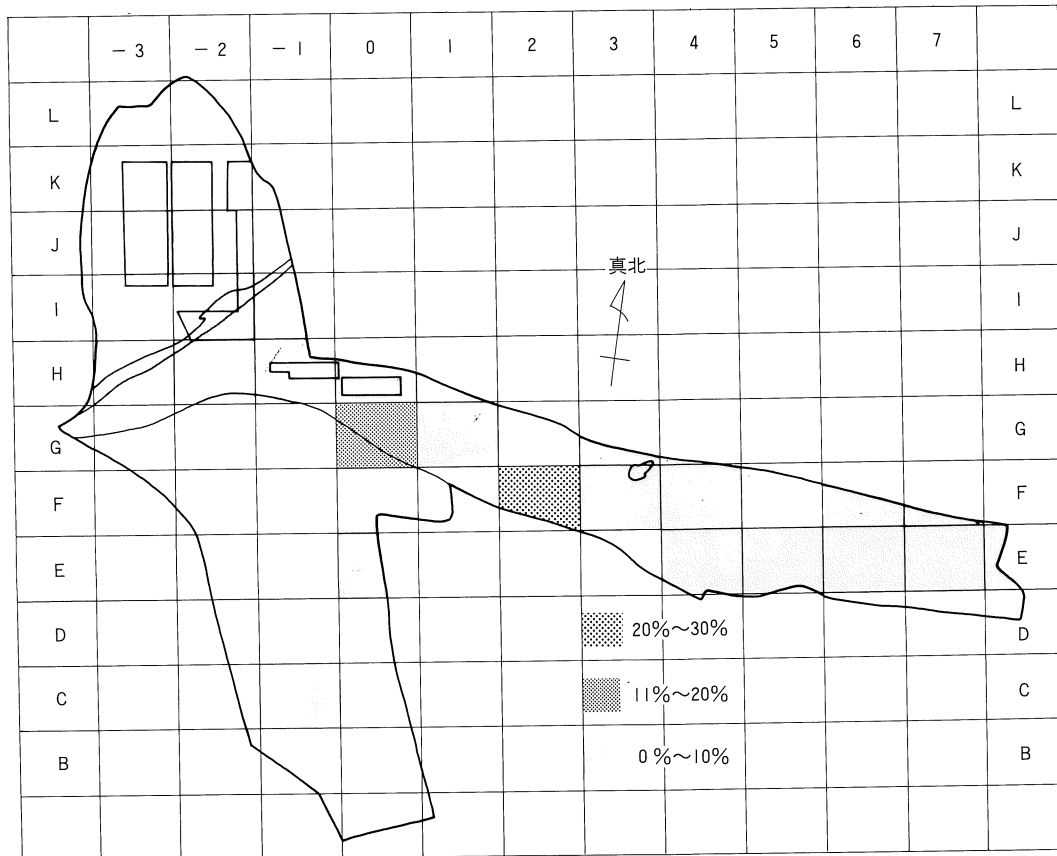
製鉄関連資料

凡例

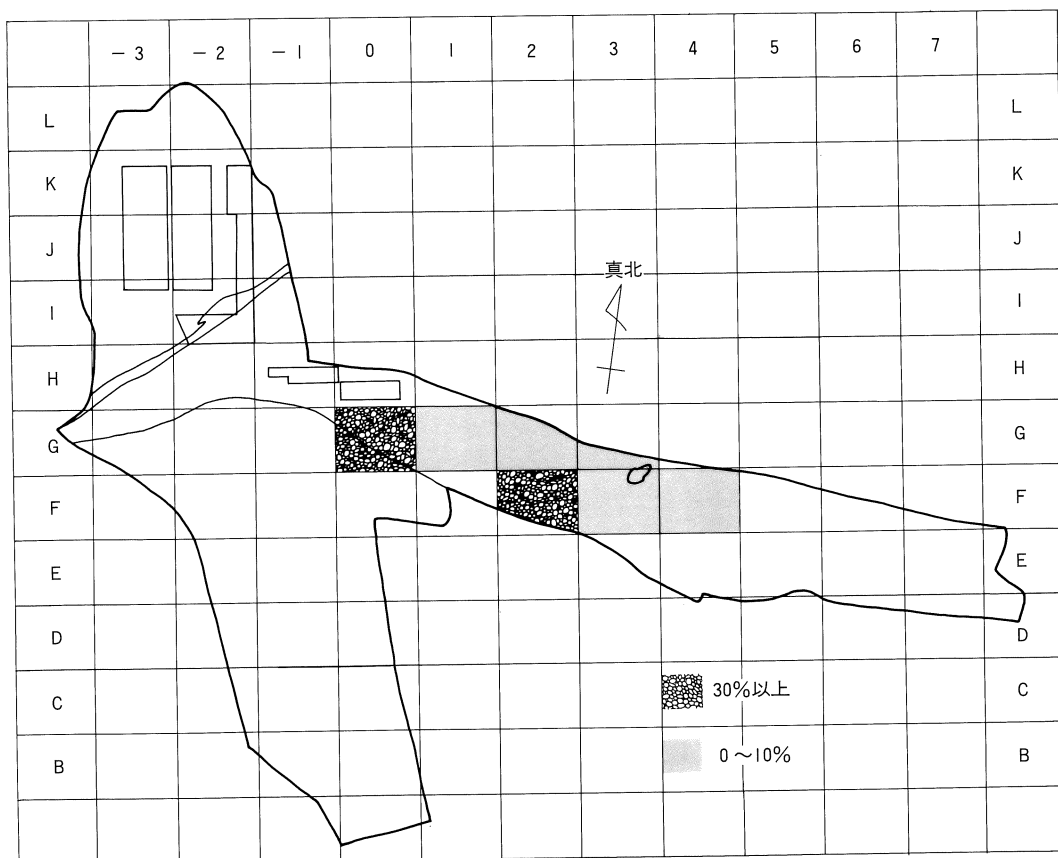
第83図の作成を、阿部みゆき・吉田博司（以上文化課）が実測・作図したほかは、刈矢幸（別府大学学生）が全面的に整理・作図。



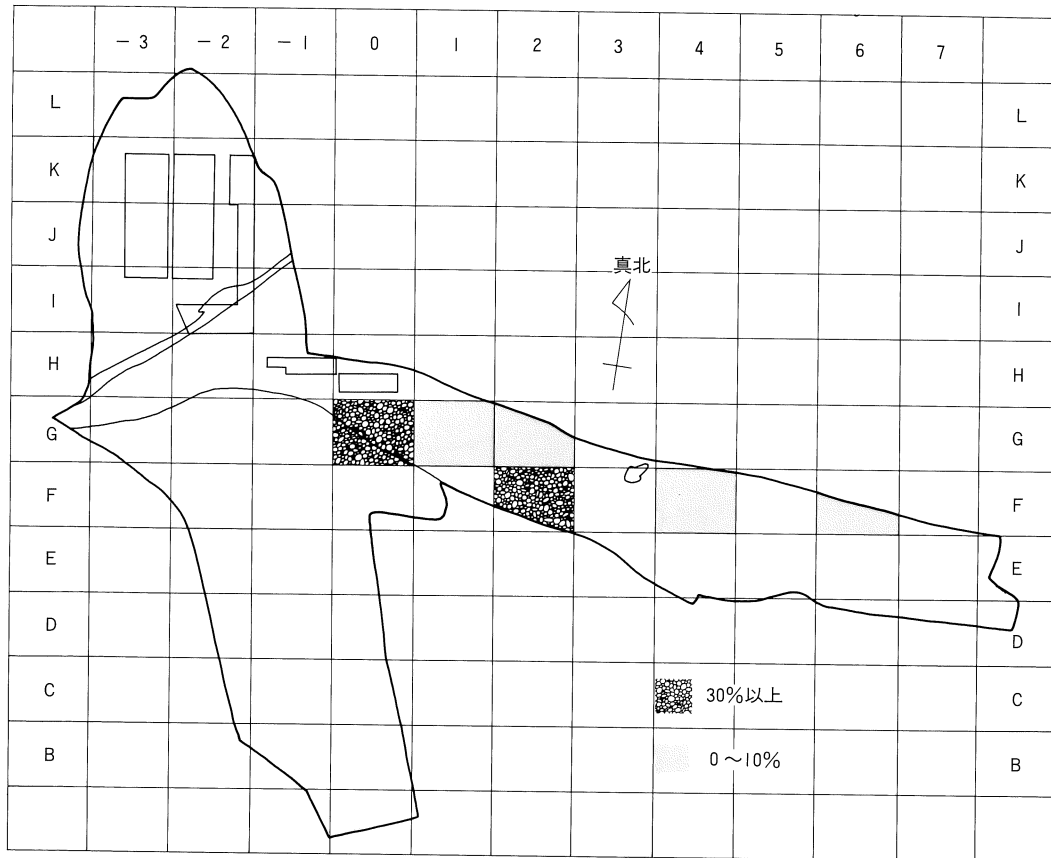
第83図 フイゴ（1・2）、溶解炉破片（3）



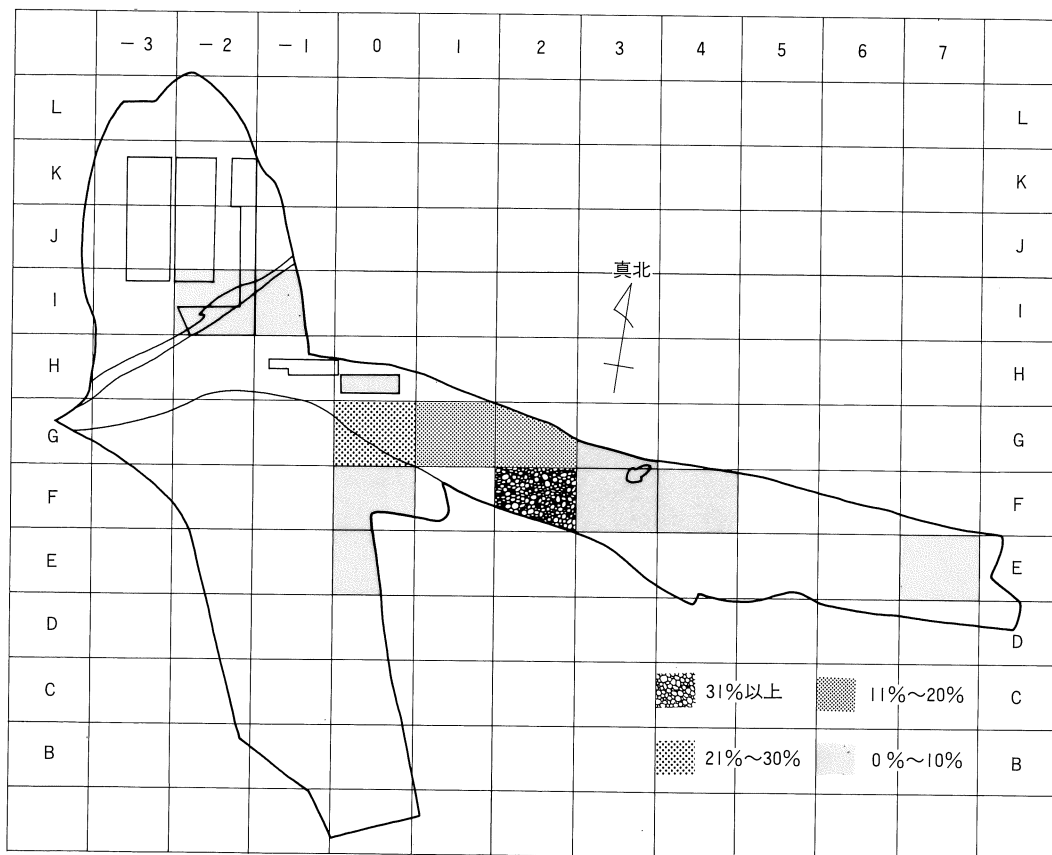
第84図 製鍊滓の分布



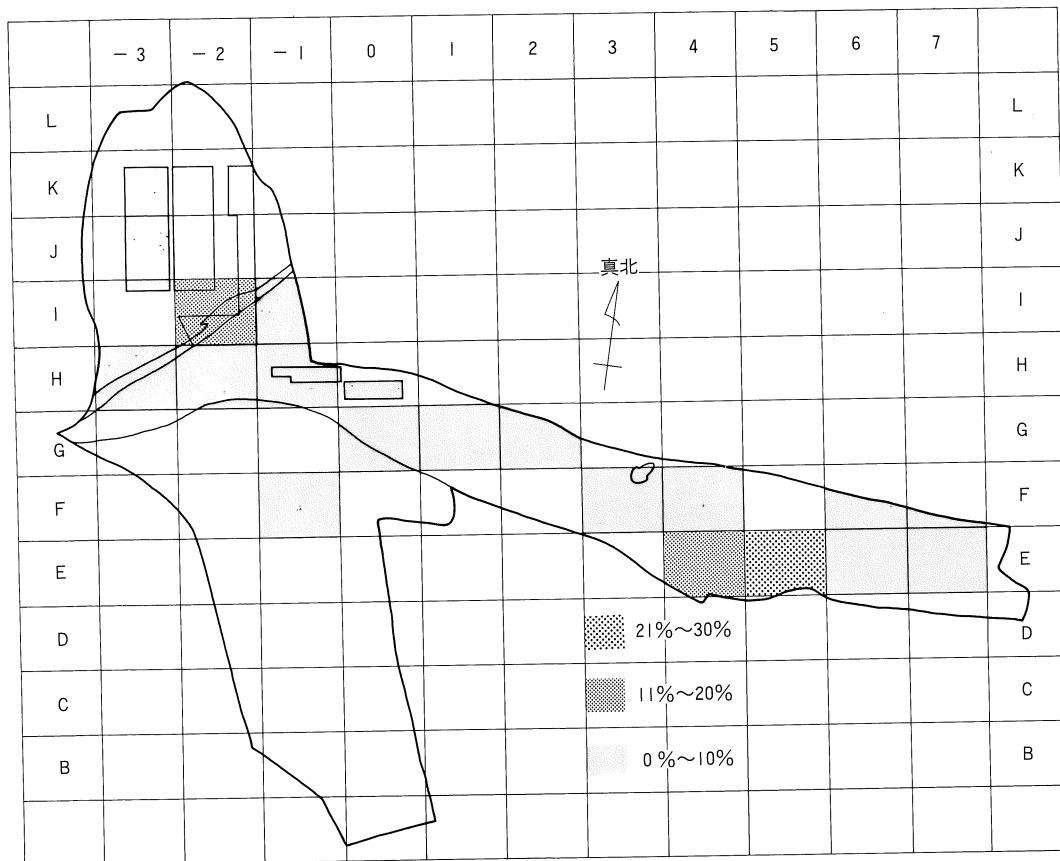
第85図 精鍊鍛冶滓の分布



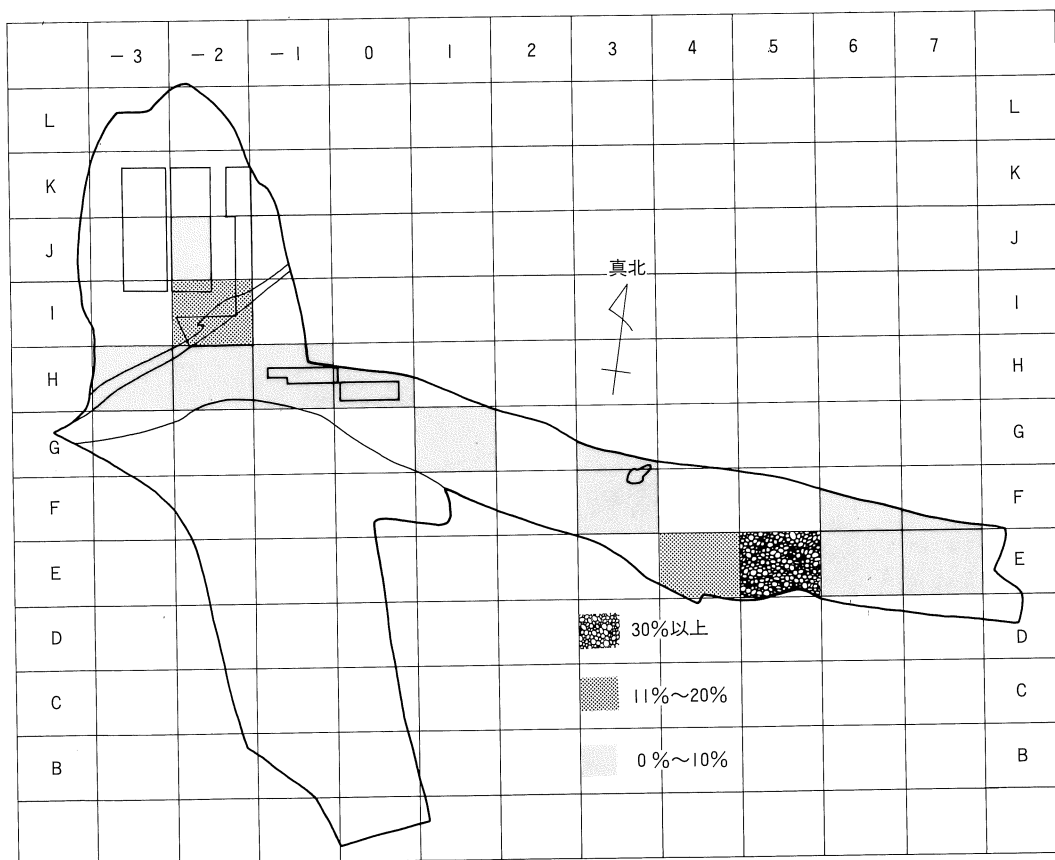
第86図 鍛冶系ガラス質滓の分布図



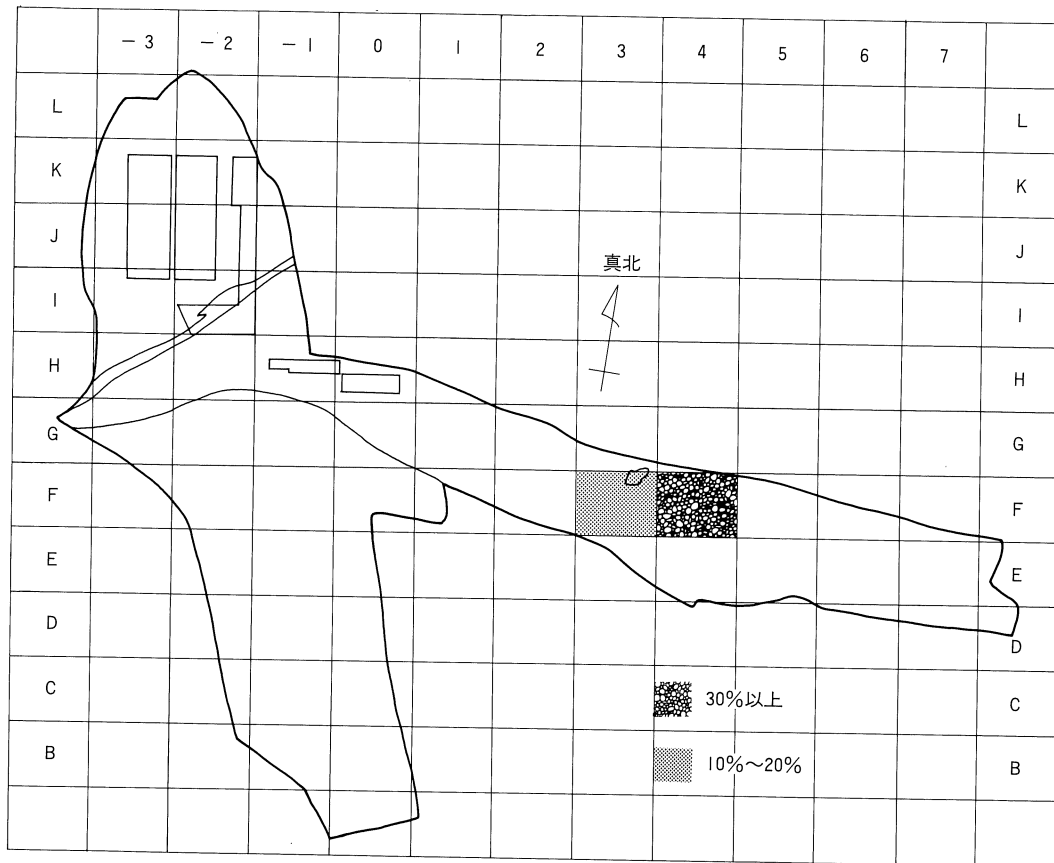
第87図 鍛冶滓の分布図



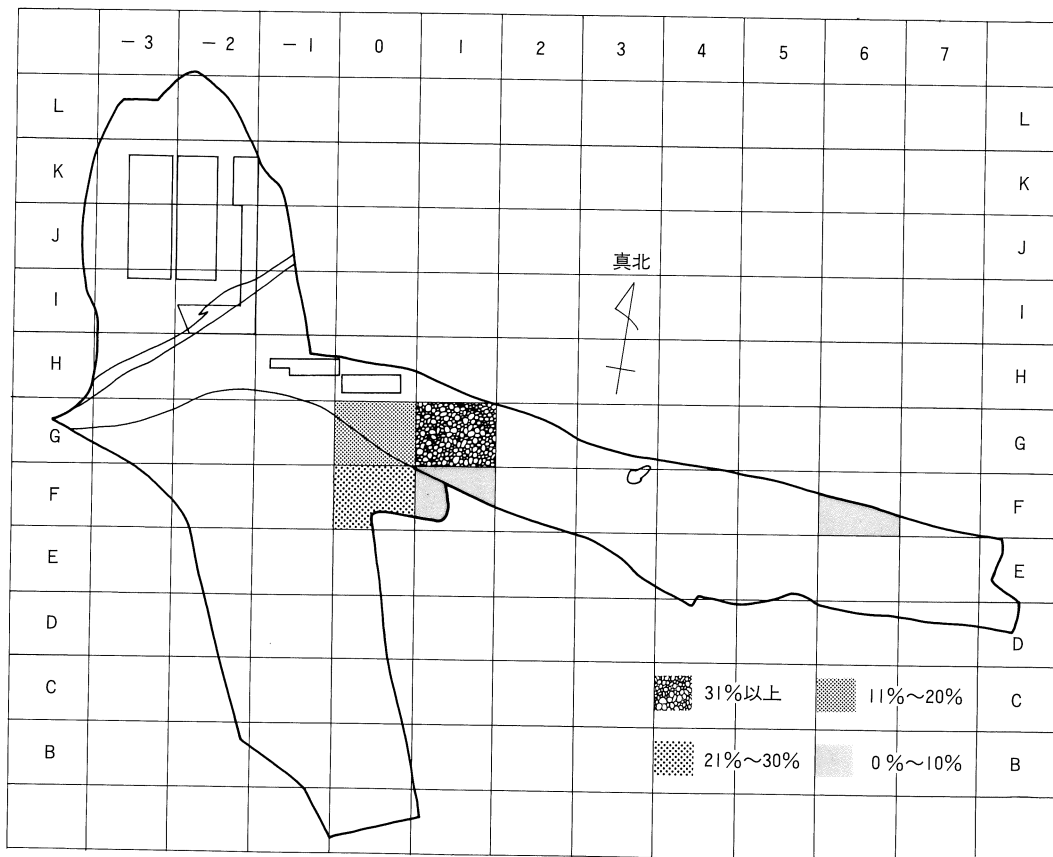
第88図 炉内滓の分布



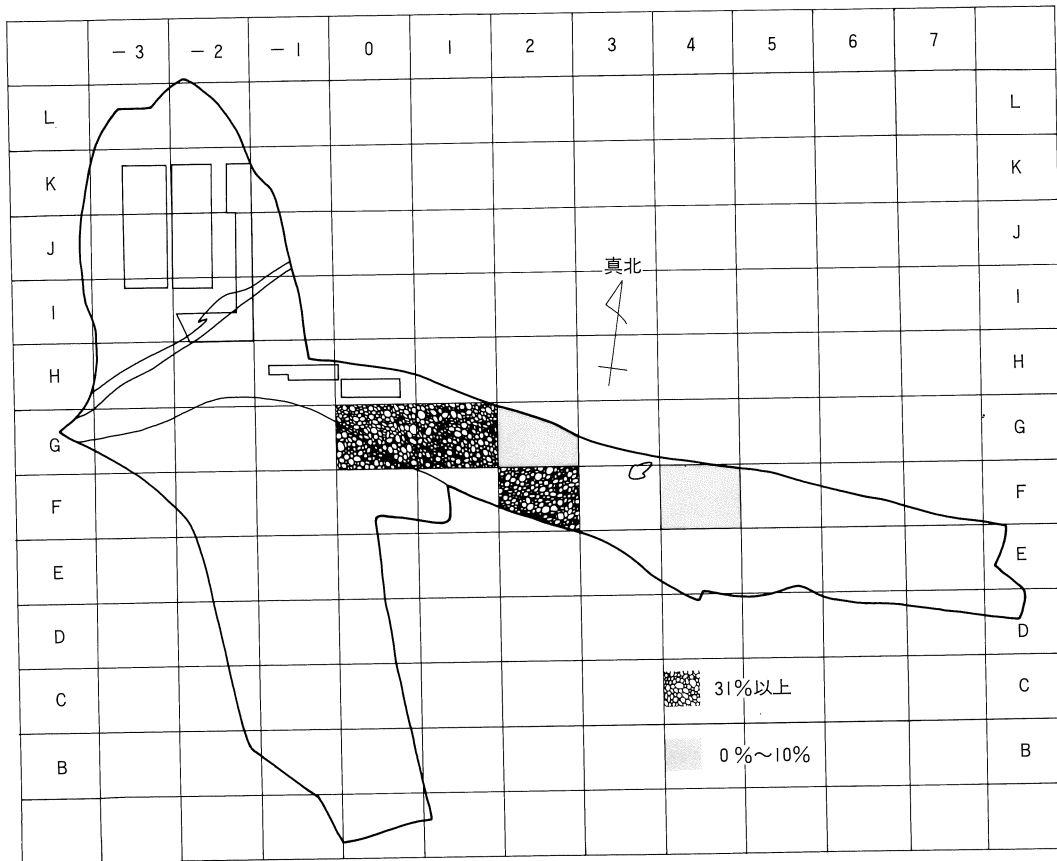
第89図 炉壁溶融物の分布



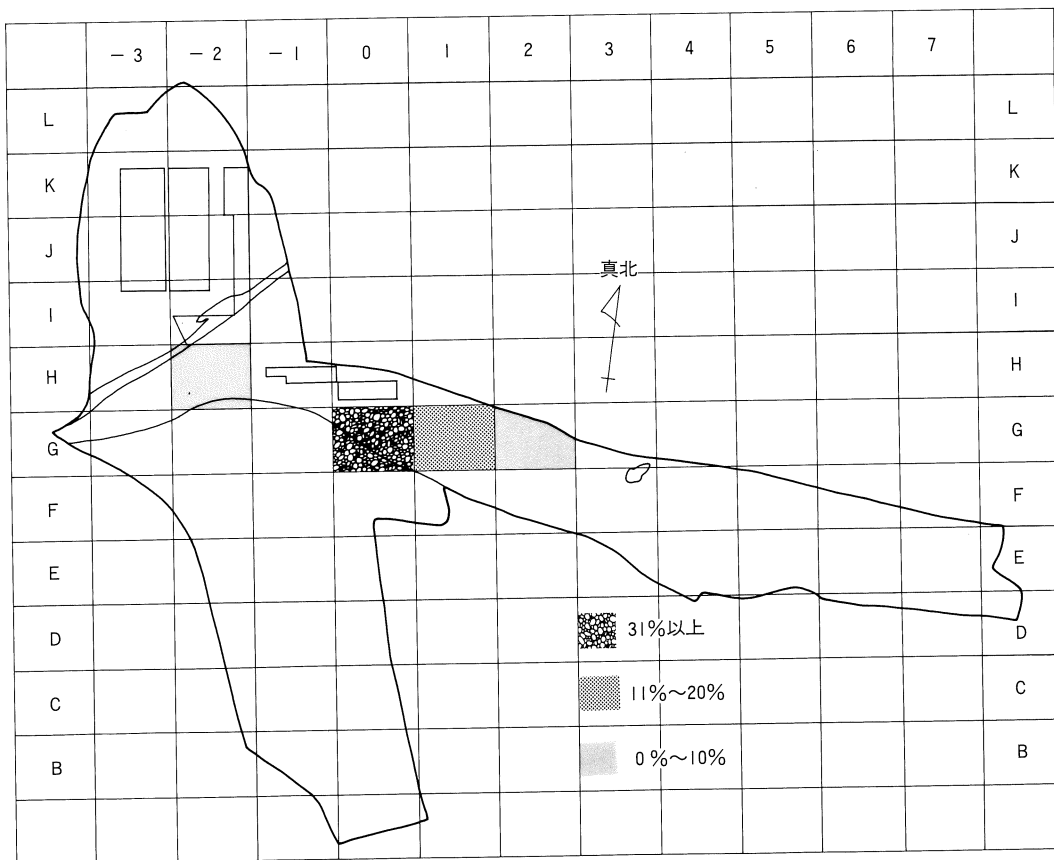
第90図 溶解炉・炉底滓の分布



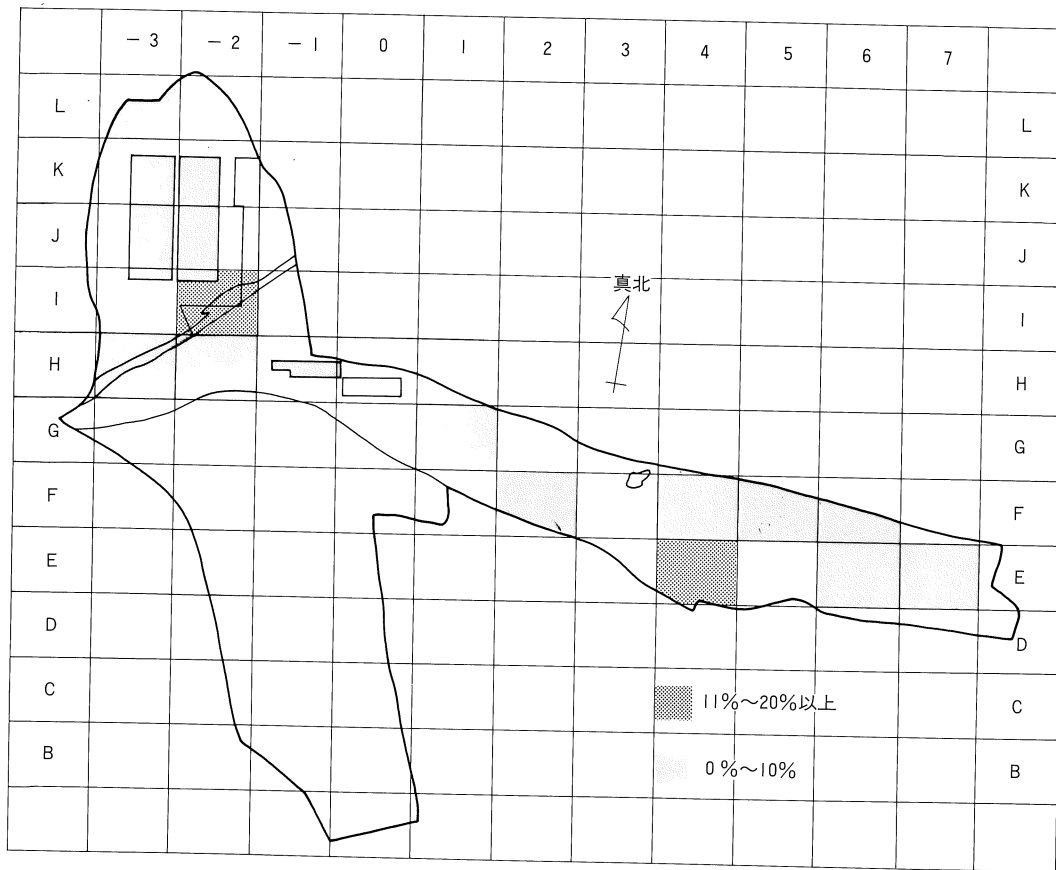
第91図 溶解炉滓の分布



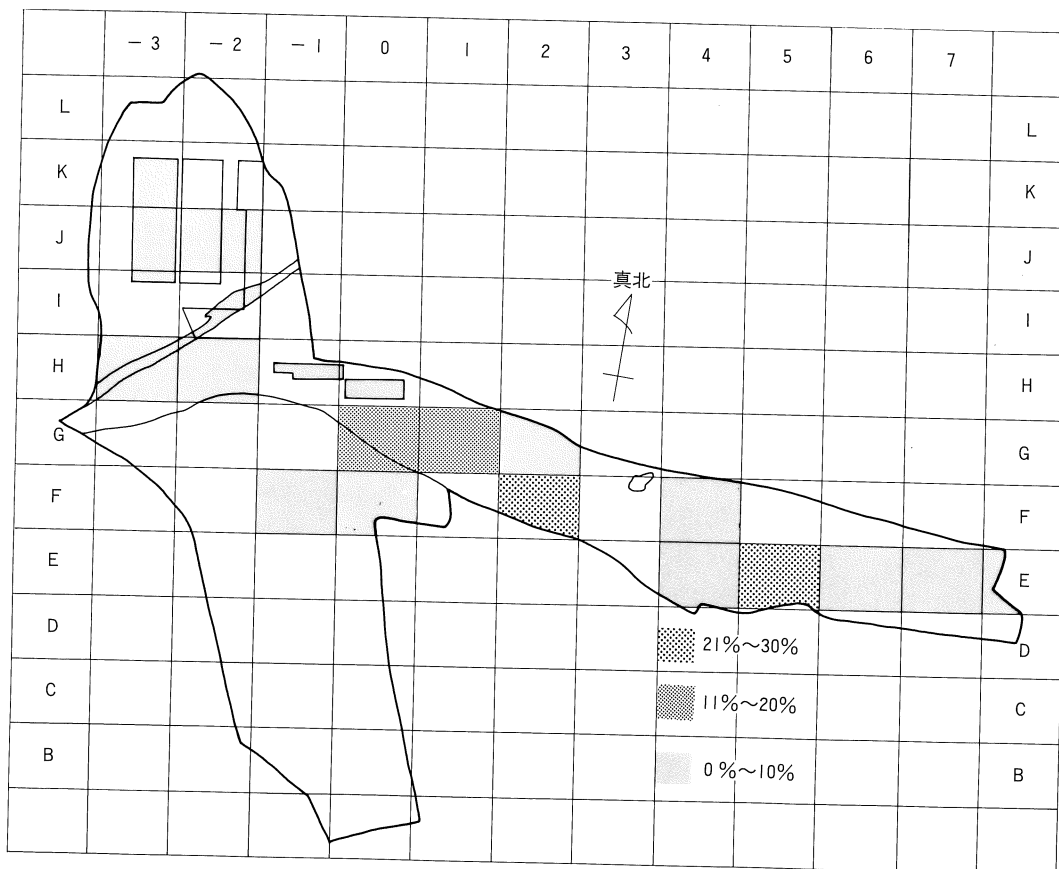
第92図 鉄塊系遺物の分布 (Fe⁺) 角a ※ F 2 鍛冶系 5 個154.3g を含む



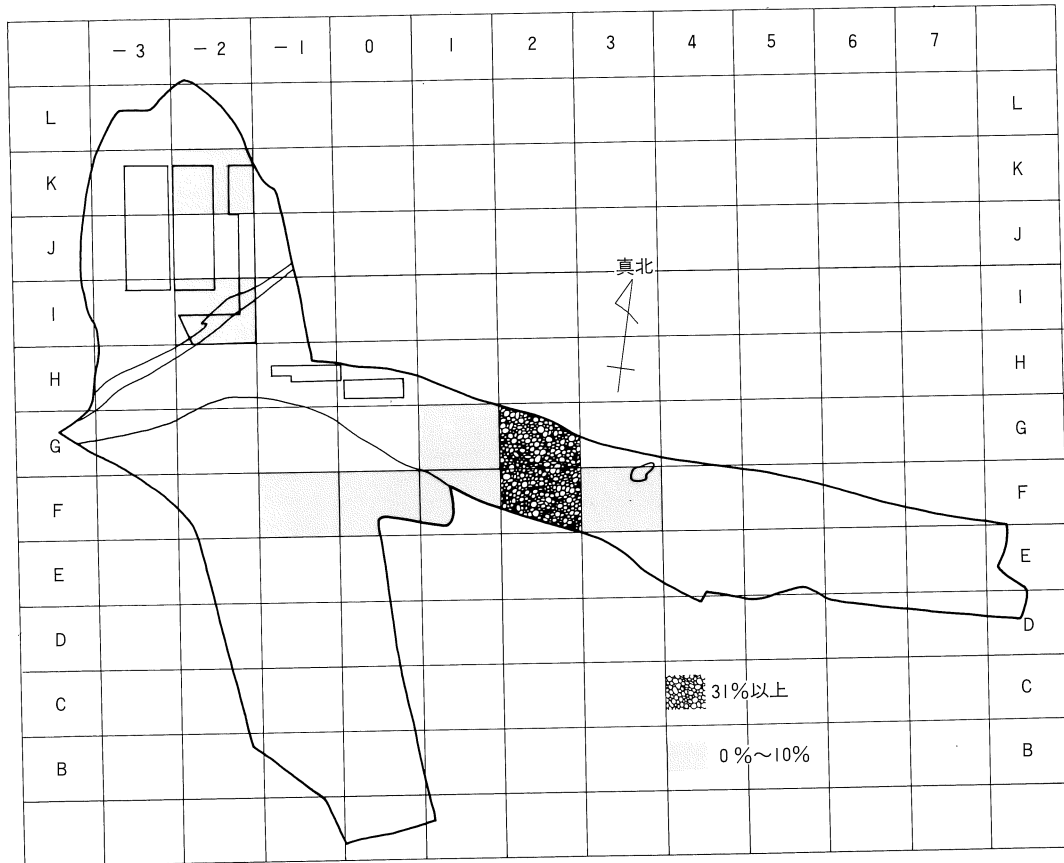
第93図 鉄塊系遺物の分布 (Fe⁺) ①+②



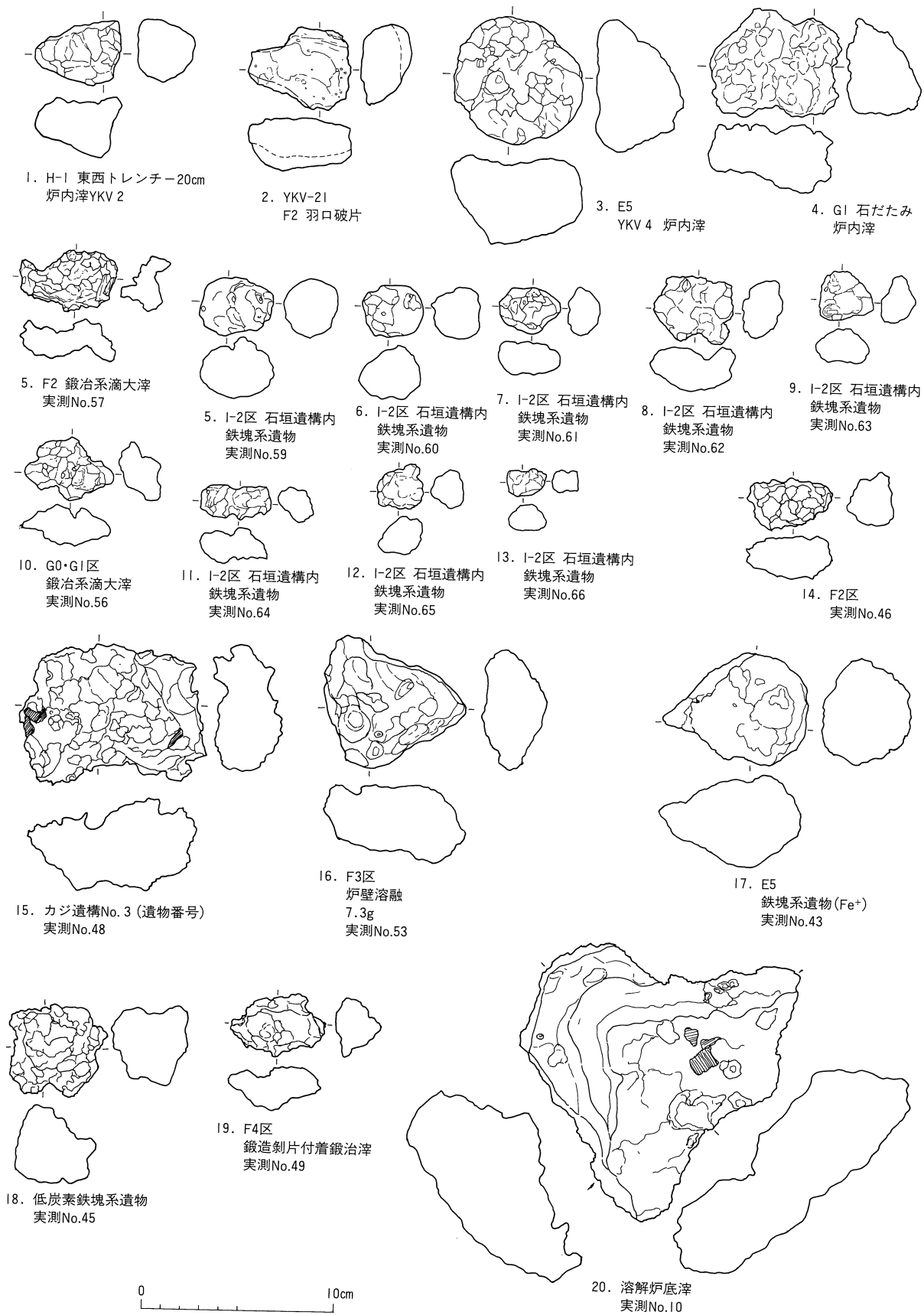
第94図 鉄塊系遺物の分布 (Fe⁺) ⑨



第95図 鉄塊系遺物 (Fe⁻) の分布



第96図 羽口破片の分布



第97図 陽弓遺跡鉄滓実測図 (1)

※ 2のみ羽口破片



21. 実測No.50



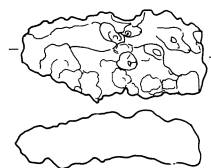
22. 実測No.50



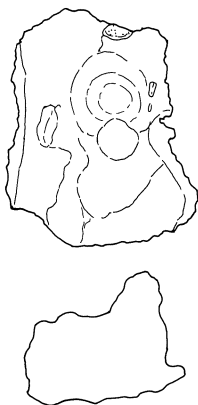
23. 実測No.55



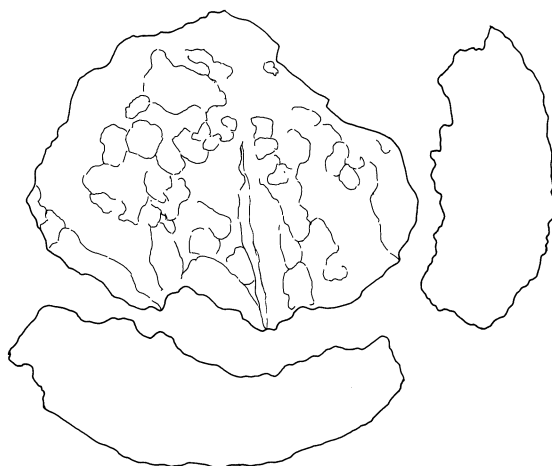
24. 実測No.54



25. 実測No.55



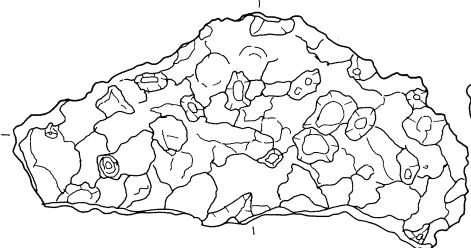
26. G2区
鉄塊取り残し 椀形鍛造
実測No.1



27. F4区 1250g
溶解炉炉底滓
実測No.25



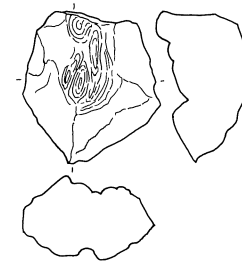
28. 実測No.47



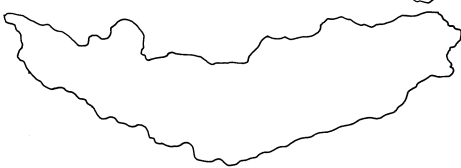
29. G2区 椀形滓
実測No.9(分析)



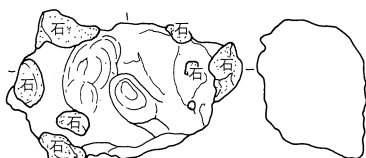
30. G0・G1区
カラス質滓
実測No.22



31. H0区 東西トレンチー20cm
製錬滓178.1g



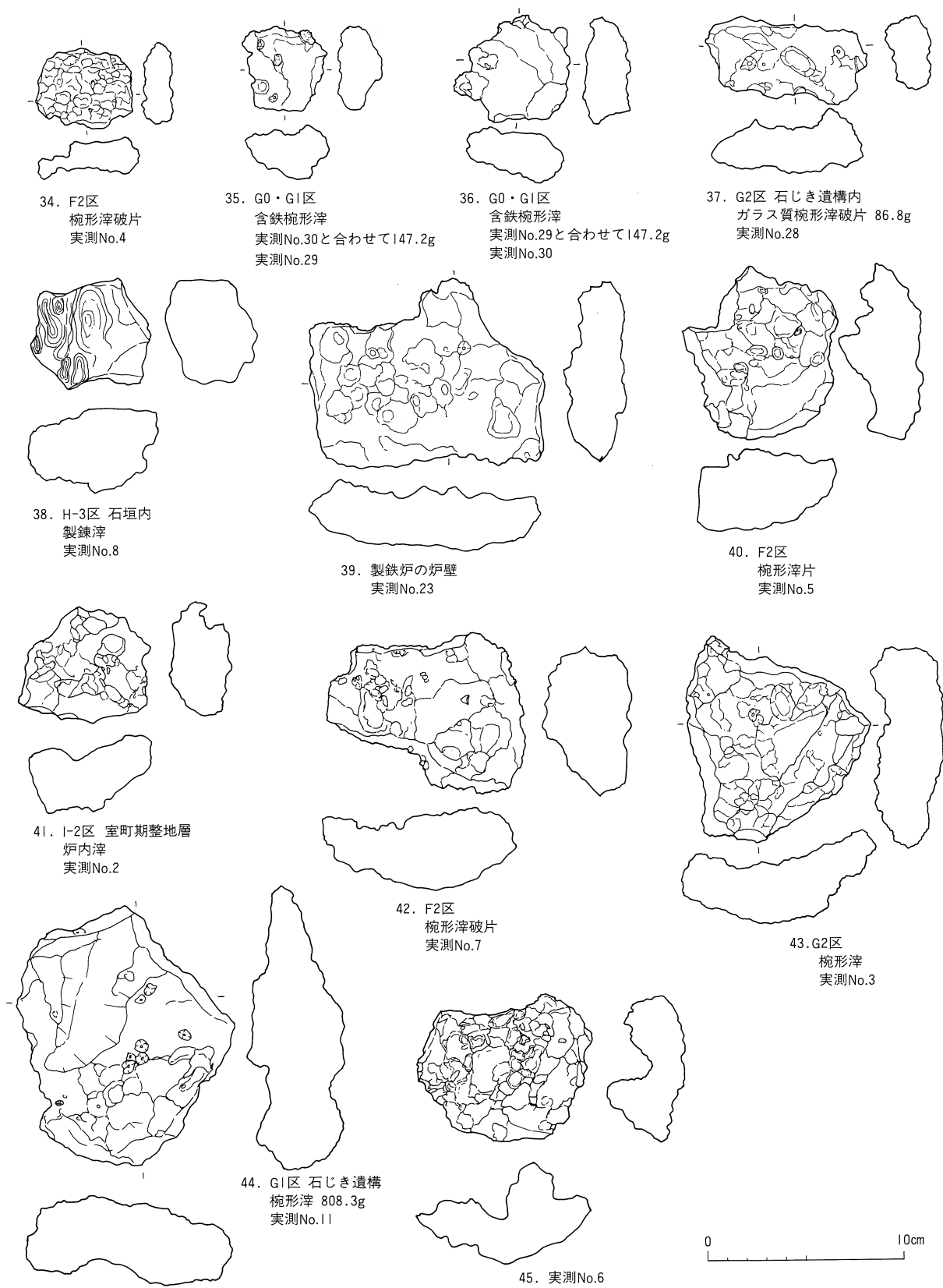
33. G1区 石じき遺構内
実測No.12



32. 実測No.51



第98図 陽弓遺跡鉄滓実測図(2)



第99図 陽弓遺跡鉄滓実測図(3)

第16表 (1) 鉄滓類の地区別の重量及び組成

遺構名	数量	1 製錬滓	2 炉内滓	3 鉄塊系遺物 (Fe ⁻)	4 鉄塊系遺物 (Fe ⁺)	5 炉壁溶融物	6 砂鉄焼結滓	7 含鉄滓	8 精錬鍛冶滓	9 鍛錬鍛冶滓	10 鍛錬鍛冶系ガラス質滓	11 ガラス質碗形滓破片	12 鉄塊取り残り碗形鍛冶滓	13 溶解炉滓	14 溶解炉底滓	15 鍛造剥片付着鍛冶滓	16 羽口破片	17 溶解炉壁	18 黒鉛化木炭	19 石(被熱)	20 炉使用焼石	21 鉄器滓	計	
C1くり間 辺検出面	個数 重量 率%	1 5.5 100																					1 5.5 0.002	
E 8	個数 重量 率%	4 79.6 80.0		1 23.3 20.0																			5 102.9 0.044	
E 7	個数 重量 率%	21 250.0 8.12	74 2320.5 75.39	7 65.4 2.12	4 100.1 3.25					1 341.8 11.11													107 3077.8 1.322	
E 6	個数 重量 率%	2 7.7 100																					2 7.7 0.003	
	P 2	個数 重量 率%		5 202.4 13.78	2 48.6 16.7	1 40.1 69.53																	8 291.1 0.125	
	P 7	個数 重量 率%					2 88.5 100																	2 88.5 0.038
	P10	個数 重量 率%		1 14.5 100																				1 14.5 0.006
E 5	個数 重量 率%	20 575.3 4.31	220 8885.4 66.56	54 1708.2 12.8	12 2713.4 5.34	35 1468.1 11.0																	341 13350.4 5.733	
	一括	個数 重量 率%		1 228.2 100																				1 228.2 0.098
E 4	個数 重量 率%	23 469.7 8.09	127 3399.2 68.91	54 1708.2 8.95	12 2713.4 4.93	23 528.8 9.11																	203 5803.3 2.492	
E 6・7, F 6・7	個数 重量 率%	5 35.4 5.35	4 125.9 19.1			10 398.1 60.12		1 102.8 15.52															20 662.2 0.284	
F 6	個数 重量 率%				1 35.9 44.99						2 32.6 40.85									1 11.3 14.16			4 79.8 0.034	
	P 4	個数 重量 率%				1 58.9 100																	1 58.9 0.025	
	P11	個数 重量 率%	1 14.3 100																					1 14.3 0.006
	14, 15, 19, 20 -40cm	個数 重量 率%												2 369.2 100										2 369.2 0.159
F 5	個数 重量 率%				1 53.1 100																		1 53.1 0.023	
F 4	個数 重量 率%	2 275.4 3.42	47 1290.1 16.01	8 150.3 1.87	6 117.6 1.46				29 249.4 3.1	7 1162.2 14.42	9 275.7 3.42				10 4498.6 53.84	1 37.6 0.47							119 8056.9 3.46	
F 3	個数 重量 率%	1 31.7 0.84	13 1524.3 40.47			1 167.3 4.44			27 982.3 26.08	1 57.8 1.53					1 859.3 22.81	2 91.7 2.43			1 52.3 1.39				47 3766.7 1.618	
F 2	個数 重量 率%	80 2621.3 5.14		44 1247.5 2.57	25 886.7				1010 24502 50.57	287 16523.9 34.1	69 1228.7 2.54						30 1443.5 2.98						154 48453.6 20.807	
	崖際	個数 重量 率%	11 501.5 1.67		6 143.3 0.48	4 144.7 0.48		1 24.6 0.08	815 17449 58.0	270 10530.3 35.0	60 1090.2 3.62						7 201.2 0.67						1174 30084.8 12.919	
	南側 包含層	個数 重量 率%	1 28.0 100																					1 28.0 0.012
F 1	1, 2, 6, 7 -40~50	個数 重量 率%																					4 482.7 0.207	
F 0	4, 5, 9 10 社 下-30cm	個数 重量 率%	3 15.8 77.83																				4 20.3 0.009	

第16表 (2) 鉄滓類の地区別の重量及び組成

遺構名	数 量	1 製 錬 滓	2 炉 内 滓	3 鉄塊系遺物 (Fe ⁻)	4 鉄塊系遺物 (Fe ⁺)	5 炉壁溶融物	6 砂鉄焼結滓	7 含鉄鉄滓	8 精錬鍛冶滓	9 鍛錬鍛冶滓	10 鍛錬鍛冶系ガラス質滓	11 ガラス質碗形滓破片	12 鉄塊取り残し碗形鍛冶滓	13 溶解炉滓	14 溶解炉炉底滓	15 鍛造剥片付着鍛冶滓	16 羽口破片	17 溶解炉壁	18 黒鉛化木炭	19 石(被熱)	20 炉使用焼石	21 鉄器滓	計
F0	4.5, 9, 10 社下-40cm	個数 重g 率%															1 31.6 100					1 31.6 0.014	
	4.5, 9, 10 最下層	個数 重g 率%		1 10.6 100																		1 10.6 0.005	
	12, 13, 17, 18 懸地	個数 重g 率%		3 45.0 100																		1 45.0 0.019	
	14, 15, 19, 20	個数 重g 率%		1 66.6 100																		1 66.6 0.029	
	14, 15, 19, 20 -30cm	個数 重g 率%																1 71.4 100				1 71.4 0.031	
	14, 15, 19, 20 -40cm	個数 重g 率%												1 1600 100								1 1600 0.687	
F0 E0	17, 18 水田耕作土内	個数 重g 率%	11 200.6 26.31						2 561.9 73.7													13 762.5 0.327	
F-1	1, 2, 6, 7 社F-30	個数 重g 率%		1 4.2 100																		1 4.2 0.002	
	11, 12, 16, 17 社F-30	個数 重g 率%															4 140.3 100					4 140.3 0.006	
G3		個数 重g 率%	5 132.8 3.18					3 61.2 1.47	230 2970 71.19	11 881.5 3.04											263 4172.2 1.791		
G2		個数 重g 率%		7 152.5 0.87	6 1307.3 7.46				210 4676 26.7	99 10317.9 58.91			1 369.9 2.11				6 1307.3 7.46	3 3601.5 3.43				331 17514.4 7.521	
	石畳	個数 重g 率%		12 855.9 25.35	10 240.8 7.13	5 111.7 3.31			27 591.6 17.52	39 1080.3 32.0	18 409.0 12.11	1 86.8 2.57										112 3376.1 1.45	
G1	石畳	個数 重g 率%	2 72.6 0.57	8 755.2 5.89	1 80.3 0.63	2 103.9 0.81			76 1767.3 13.77	13 6417.2 50.0				1 2300.0 17.92			5 154.3 1.2		1 1181.1 9.2		109 12831.9 5.51		
		個数 重g 率%	2 62.6 5.33		1 40.7 3.47				19 617.4 52.61	8 452.8 38.59												30 1173.5 0.504	
	1, 2, 6, 7, 11, 12, 16, 17 最下層	個数 重g 率%							1 92.0 100													1 92.0 0.04	
G0, G1		個数 重g 率%	36 1369.5 2.87	48 2275.5 4.77	46 1001.4 2.1	28 4918.5 1.93			1390 26010.8 54.57	560 13597.0 28.53	102 1640.0 3.44			5 852.1 1.79								2215 47665.2 20.47	
H2 杭周辺 検出面		個数 重g 率%	2 46.4 100																			2 46.4 0.02	
H0, H1		個数 重g 率%	8 87.2 81.5			2 19.8 18.5																10 107 0.046	
H0	東西 トリフ -20cm	個数 重g 率%	1 178.1 43.0							2 236.1 57.0												3 414.2 0.178	
	東西 トリフ 40-地内	個数 重g 率%	3 52.6 73.05			2 19.4 26.94																5 72 0.031	
H1・0区 東西トリフ内		個数 重g 率%	41 842 41.12	6 803 40.17	3 56 2.80	1 41.2 2.06	5 202 10.10	2 55 2.75														58 1999.2 0.859	
H-1	東西 トリフ	個数 重g 率%	2 20.6 100																			2 20.6 0.009	
	東西 トリフ -20cm	個数 重g 率%	5 67.1 14.31	10 401.8 85.69																		15 468.9 0.201	

第16表 (3) 鉄滓類の地区別の重量及び組成

遺構名		数量	1 製錬滓	2 炉内滓	3 鉄塊系遺物 (Fe ⁻)	4 鉄塊系遺物 (Fe ⁺)	5 炉壁溶融物	6 砂鉄焼結滓	7 含鉄鉄滓	8 精錬鍛冶滓	9 鍛錬鍛冶滓	10 鍛錬鍛冶系ガラス質滓	11 ガラス質碗形滓破片	12 鉄塊取り残し碗形鍛冶滓	13 溶解炉滓	14 溶解炉炉底滓	15 鍛造剥片付着鍛冶滓	16 羽口破片	17 溶解炉壁	18 黒鉛化木炭	19 石 (被熱)	20 炉使用焼石	21 鉄器滓	計
H-2	15, 20 南北トレ	個数 重率%		1 29.7 100																			1 29.7 0.013	
	南北トレ 石垣裏 込め内	個数 重率%		3 285 100																			3 285 0.122	
	5, 10 -30cm 内	個数 重率%	1 100.5 23.91	2 292.4 69.57		1 27.4 6.52																	4 420.3 0.18	
H-3	石垣	個数 重率%	5 433.4 100																				5 433.4 0.186	
H・2	H-1, 2, 6, 7, 8, 11, 12, 13	個数 重g	9 139.5	30 1055.4	4 122.6	3 59.1	9 179.3																55 1555.9	
	H3-5, 10, 15, 20 -40cm	率%	8.97	67.83	7.88	3.8	11.52	88.5															1.668	
H・3	石垣南側 黒褐色土 内	個数 重率%	22 884.5 57.88	6 375.5 24.57	3 68.1 4.46	1 23.9 1.56	10 176.2 11.53																42 1528.2 0.656	
	I 5, 10, 15, 20 -20~40	個数 重率%																1 7.4 100					12 7.4 0.003	
I 1	石垣南側 近世水田 整地層内	個数 重率%	12 390.9	2 1556 65.42							1 431.7 18.15												151 2378.6 1.021	
I-2	5, 10 -40cm	個数 重率%					1 28.0 100																1 28 0.012	
	11, 12 -40cm	個数 重率%	1 28 100																				1 28 0.012	
	13~15 18~20 -20cm	個数 重率%	5 122.3 100																				5 122.3 0.053	
	12~20 -20cm	個数 重率%	4 108 4.51	6 1300 54.3			6 270 11.28		1 250.0 10.44		2 466 19.47												19 2394 1.028	
	17~20 -20cm	個数 重率%	7 327 10.94	2 2200 73.6		1 165 5.52					1 297.3 9.95												11 2989.3 1.284	
	円形 土坑	個数 重率%	1 9 100																				1 9 0.004	
	石垣内	個数 重率%		9 295 43.62	3 38 5.62	3 93.6 13.84	4 249.7 86.92																19 676.3 0.29	
	6, 7, 8 7列ド 鋤跡層	個数 重率%	21 522.8 58.07	1 81 9.0		3 192 21.33	1 85.0 9.44											1 19.5 2.16					27 900.3 0.387	
	室町期 整地層	個数 重率%	1 9.5 4.78	2 152.8 76.9		1 36.4 18.32																	4 198.7 0.085	
	I-1, I-2 石垣外側	個数 重率%	3 151.6 15.52	2 824.9 84.48																				5 976.5 0.419
H	砂・鉄ト レ(細)粒 層-20cm	個数 重率%	11 468.4 37.2	3 124.1 9.86	7 331.1 26.29	3 295 23.43	2 40.6 3.22																26 1259.2 0.541	
	1 南北トレ 石垣南側 掘層地	個数 重率%	3 124.2 21.34	9 431.6 74.16	1 13.4 2.32	1 12.8 2.3																	14 582.0 0.25	
	2 石垣南 南北トレ	個数 重率%	1 8.1 100																				1 8.1 0.003	
J-2	P-2	個数 重率%			1 11.6 100																		1 11.6 0.005	

第16表 (4) 鉄滓類の地区別の重量及び組成

遺構名	数量	1 製 錬 滓	2 炉 内 滓	3 鉄塊系遺物 (Fe)	4 鉄塊系遺物 (Fe)	5 炉壁溶融物	6 砂鉄焼結滓	7 含鉄鉄滓	8 精錬鍛冶滓	9 鍛錬鍛冶滓	10 鍛錬鍛冶滓	11 ガラス質系 ガラス破片	12 椀形破片 鉄塊取り残し	13 溶解炉滓	14 溶解炉底滓	15 鍛冶片 付着	16 羽口破片	17 溶解炉壁	18 黒鉛化木炭	19 石(被熱)	20 炉使用焼石	21 鉄器滓	計
J-2	5, 10, 15, 20 -40cm内 個数 重量g 率%	1 5.7 8.02		1 65.4 91.98																		2 71.1 0.03	
I・J 1 2	西側トレ 規窓内 下層内 個数 重量g 率%	11 507.8 70.97	3 103.2 14.42		1 51.7 7.23	2 52.8 7.38															1	18 715.5 0.31	
	東側トレ 黒褐色 土内 個数 重量g 率%	2 44.7 100																			1	2 44.7 0.02	
I・J-3 南北トレ	個数 重量g 率%	1 29.8 100																				1 29.8 0.01	
K・I・J -3 南北トレ	個数 重量g 率%	4 62.5 24.43	1 19.1 7.47	4 35.5 13.88	4 138.7 54.22																	13 255.8 0.11	
K-2	P 1 個数 重量g 率%	1 9.1 100																				1 9.1 0.004	
	P 7 個数 重量g 率%																1 46.4 100					1 46.4 0.02	
K-2, 18, 19 J-2, 3, 4	個数 重量g 率%				1 19.6 100																	1 19.6 0.008	
K-3	個数 重量g 率%	1 39.1 100																				1 39.1 0.02	
	P11 個数 重量g 率%	2 65.2 100																				2 65.2 0.03	
	P17 個数 重量g 率%	1 29.9 100																				1 29.9 0.01	
L-3	個数 重量g 率%				1 11.9 100																	1 11.9 0.005	
鍛 冶 遺 構	No.1 個数 重量g 率%								1 89.2 100													1 89.2 0.04	
	No.2 個数 重量g 率%								1 191.1 100													1 191.1 0.08	
	No.3 個数 重量g 率%								1 245.1 100													1 245.1 0.11	
	No.4 個数 重量g 率%								2 204.1 100													2 204.1 0.088	
	No.5 個数 重量g 率%								1 1700 100													1 1700 0.73	
	No.6 個数 重量g 率%								1 2400 100													1 2400 1.03	
	No.8 個数 重量g 率%								1 444.8 100													1 444.8 0.19	
	No.9 個数 重量g 率%								1 212.9 0.09													1 212.9 0.09	
	No.10 個数 重量g 率%								1 117.3 100													1 117.3 0.05	
	石垣東側 裏込め石内	個数 重量g 率%	2 153.7 13.83		1 575.3 51.78					2 382.0 34.38													5 1111 0.48
東区	個数 重量g 率%								1 208.7 100													1 208.7 0.09	
計	個数 重量g 率%	426 12818.5 5.65	659 32811.8 14.45	250 6866.04 3.02	126 4697.94 2.07	121 1197.6 1.85	3 76.9 0.03	2 352.8 0.16	3824 84802.9 37.35	1319 64203.0 28.28	273 5218.7 2.30	86.8 86.8 0.04	369.9 369.9 0.16	12 5494.15 2.42	11 15357.9 2.36	1 37.6 0.02	60 3069.56 0.12	3 5601.5 0.08	2 30.8 0.01	1 52.3 0.01	1 118.1 0.01	2 7098 232870.3 100	



29. 陽弓遺跡全景（南から北方を見る）
上方名利泉福寺、道路予定地部分が県教委発掘区。遺跡の西地区はすでに河川改修・
道路工事中。手前が町教委発掘区



30. 陽弓遺跡東半部全景（西から東方を見る）※右側は町教委発掘区



31. 陽弓遺跡と横手谷の景観（西から東方を見る）



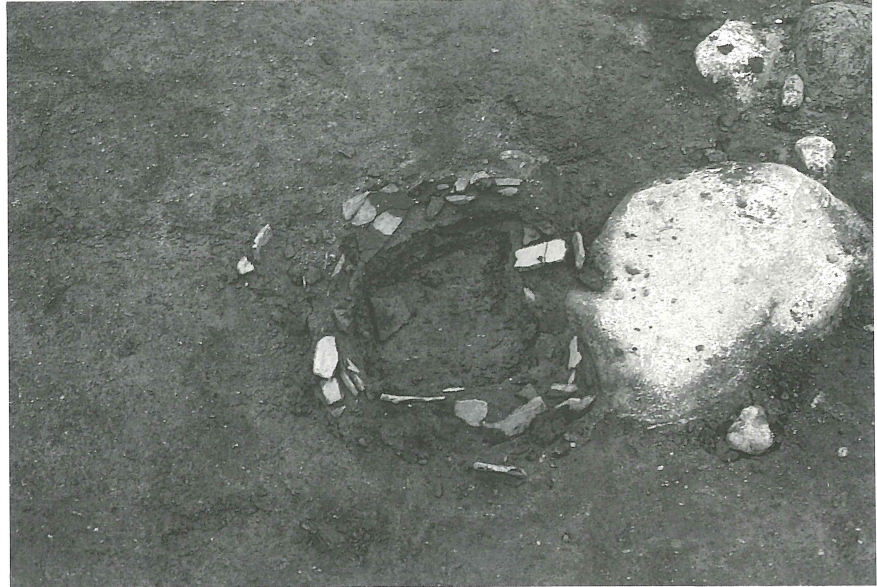
32. 陽弓遺跡の製鉄関連遺構



33. 陽弓遺跡縄文時代早期の遺物分布状態（東から西）



34. 陽弓遺跡縄文時代早期の遺物分布状態（西から東）



35. 縄文時代晩期埋納深鉢



36. 中世石垣遺構全景



37. 中世石垣遺構全景



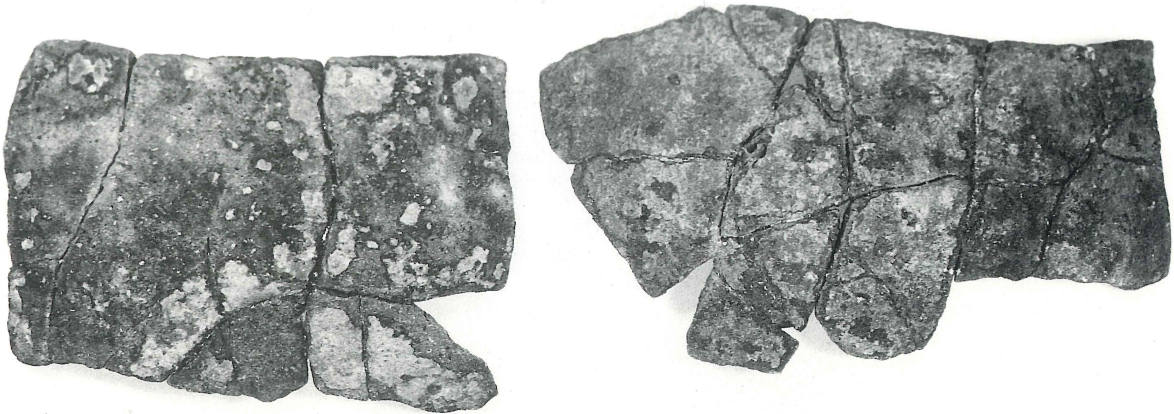
38. 中世石垣遺構近景



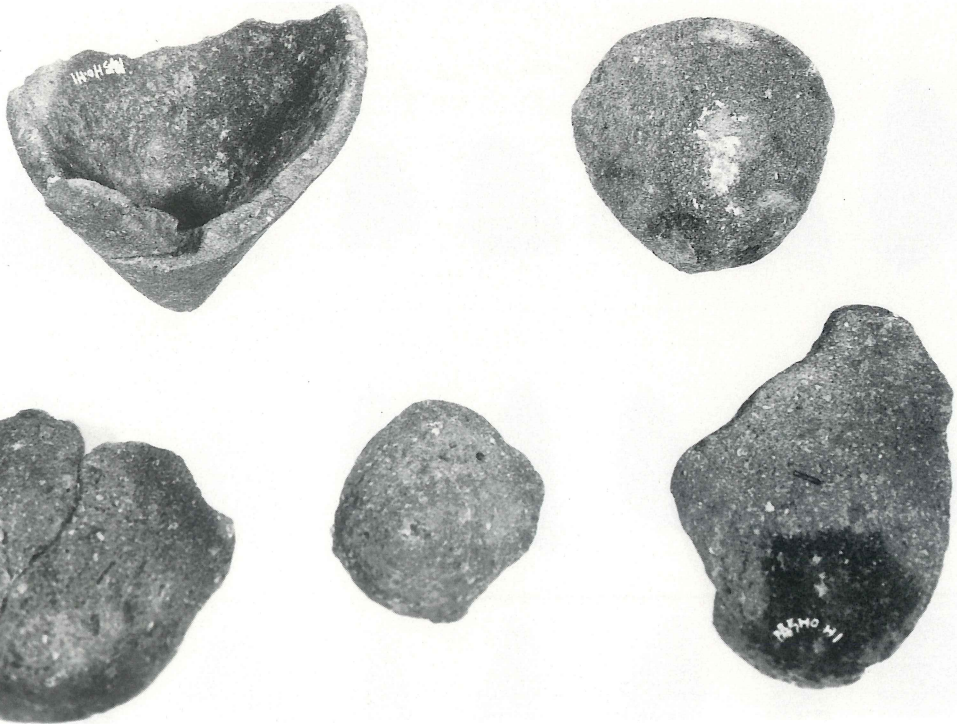
39. 中世大形土坑と
石垣遺構背後の礫帯



40. 中世石垣遺構背後の礫帯



41. 縄文時代早期の無文深鉢形土器口縁部



42. 縄文時代早期の無文深鉢形土器底部



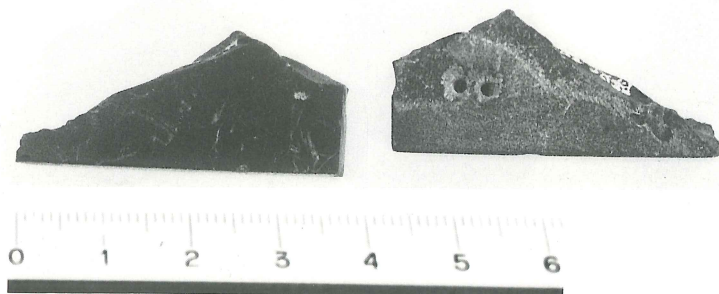
43. 縄文時代早期の石核（ガラス質安山岩）



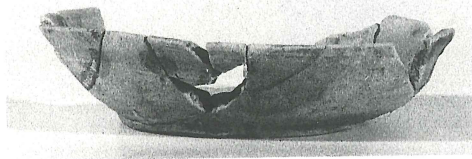
44. 縄文時代晩期の埋納深鉢



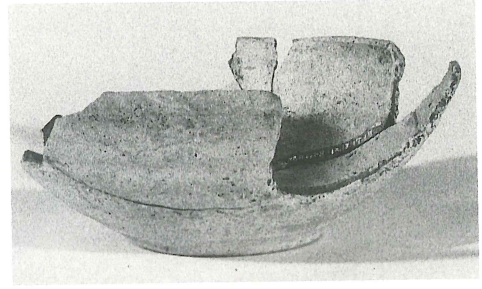
45. 縄文時代後・晩期・弥生時代早期の石器



46. 石帯



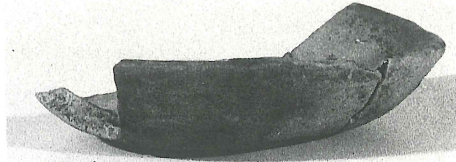
47



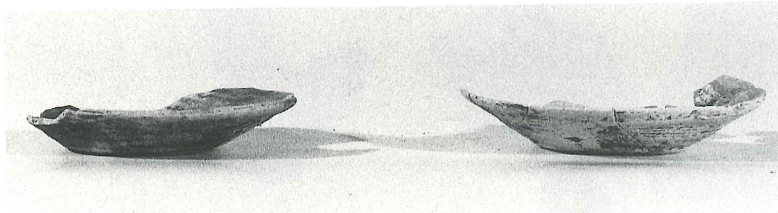
48



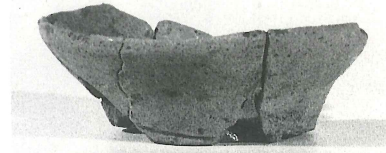
49



51

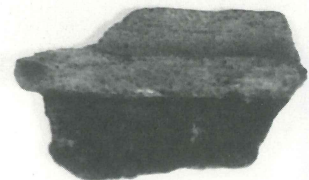
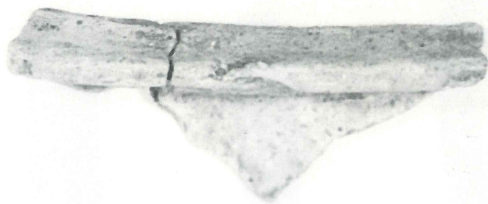


50



52

坏・小皿類



53. 土鍋類

陽弓遺跡の土師器類



54. 瓦質すり鉢



55. 土鍋



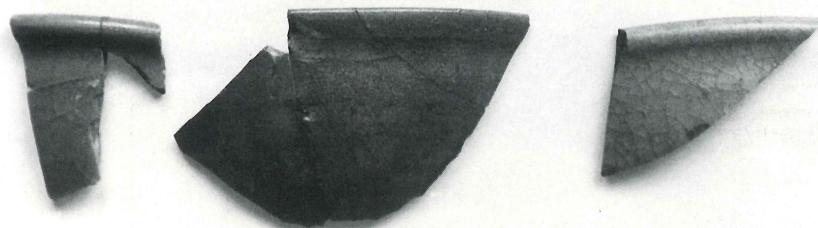
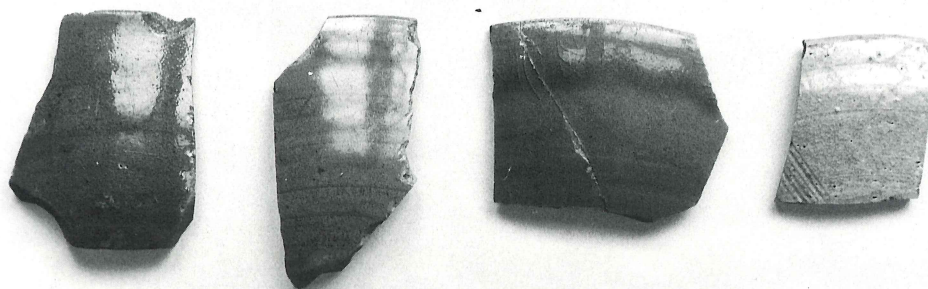
56. 土錘



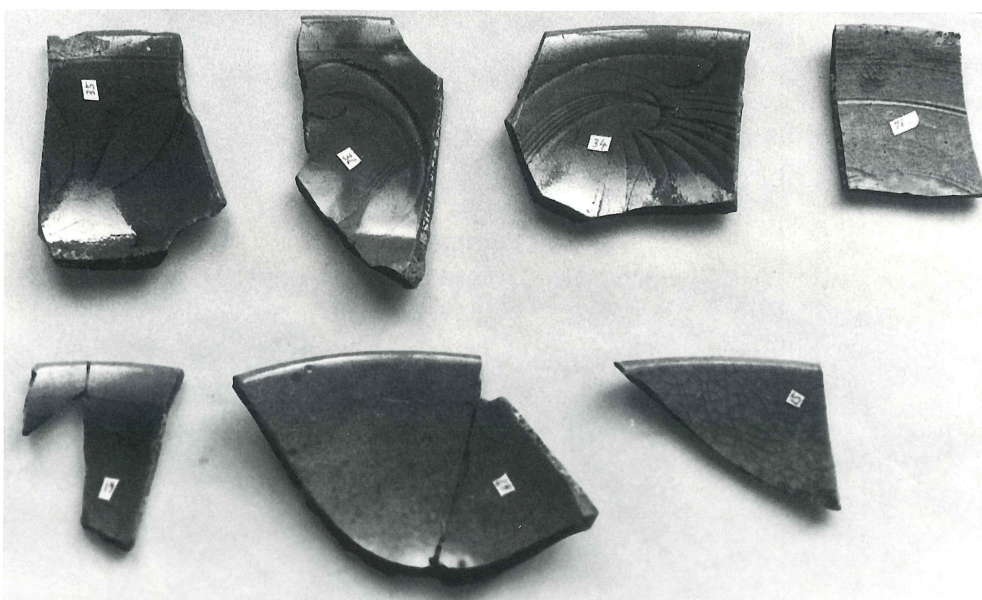
57. 白磁類の口縁部



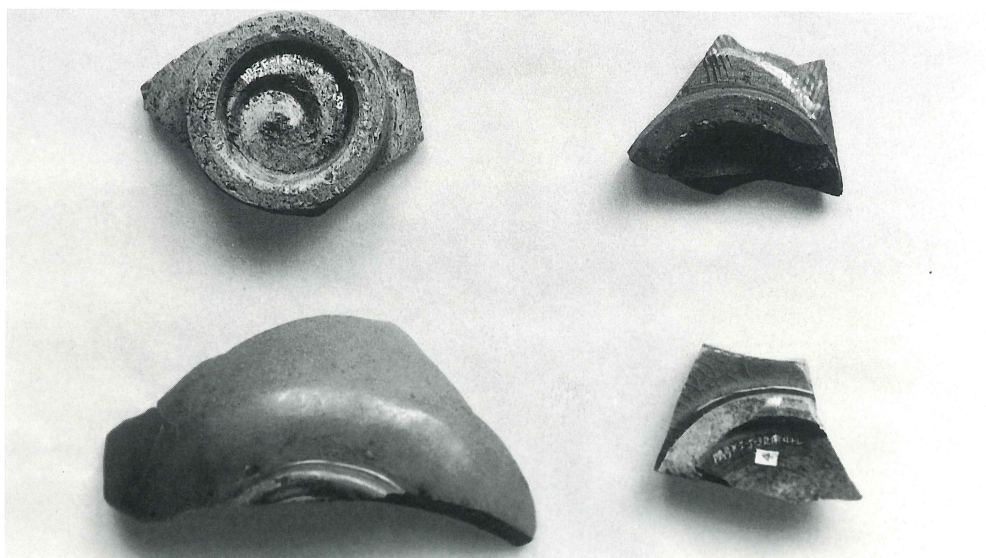
58. 白磁類の底部



59. 青磁類
(外面)



60. 青磁類
(内面)



61. 青磁類
(底部外面)

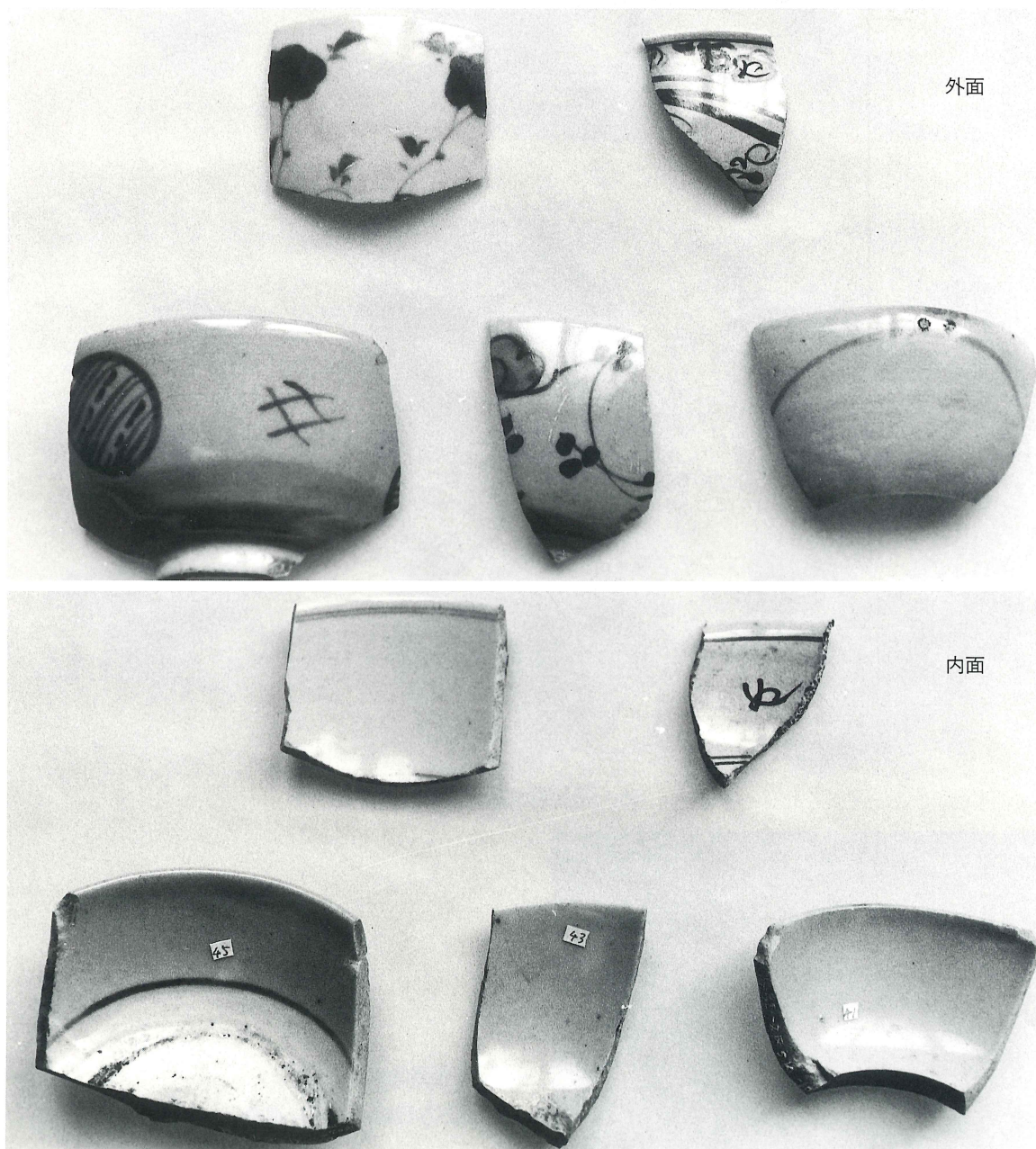
陽弓遺跡の青磁



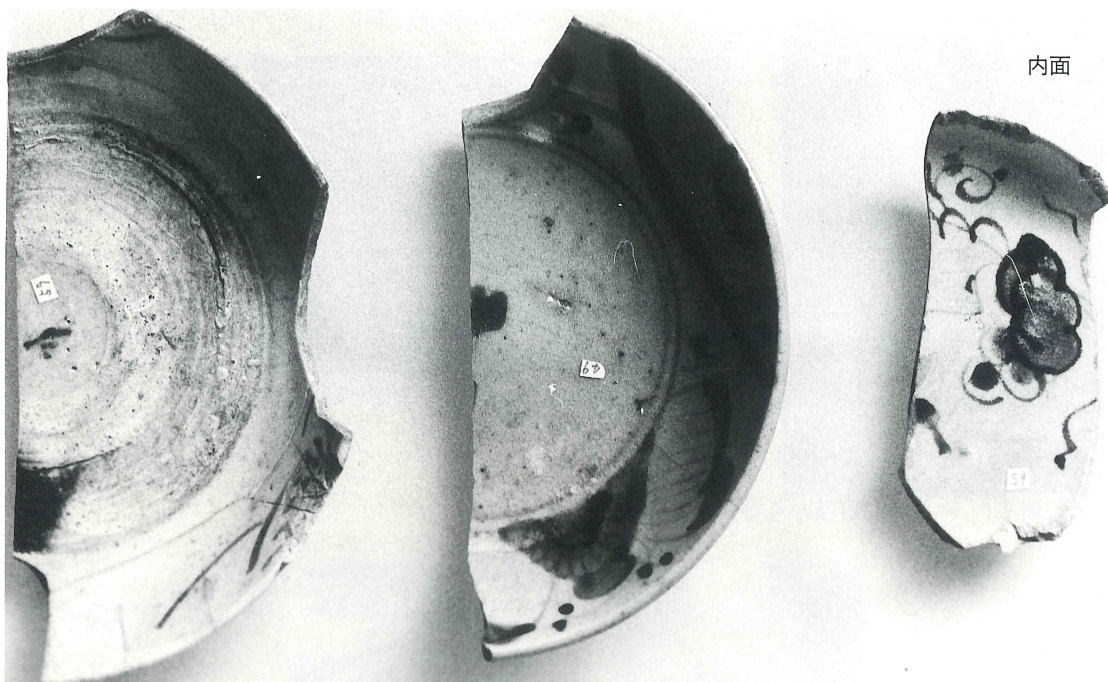
62. 近世石組み(トイレ)遺構(西から東)



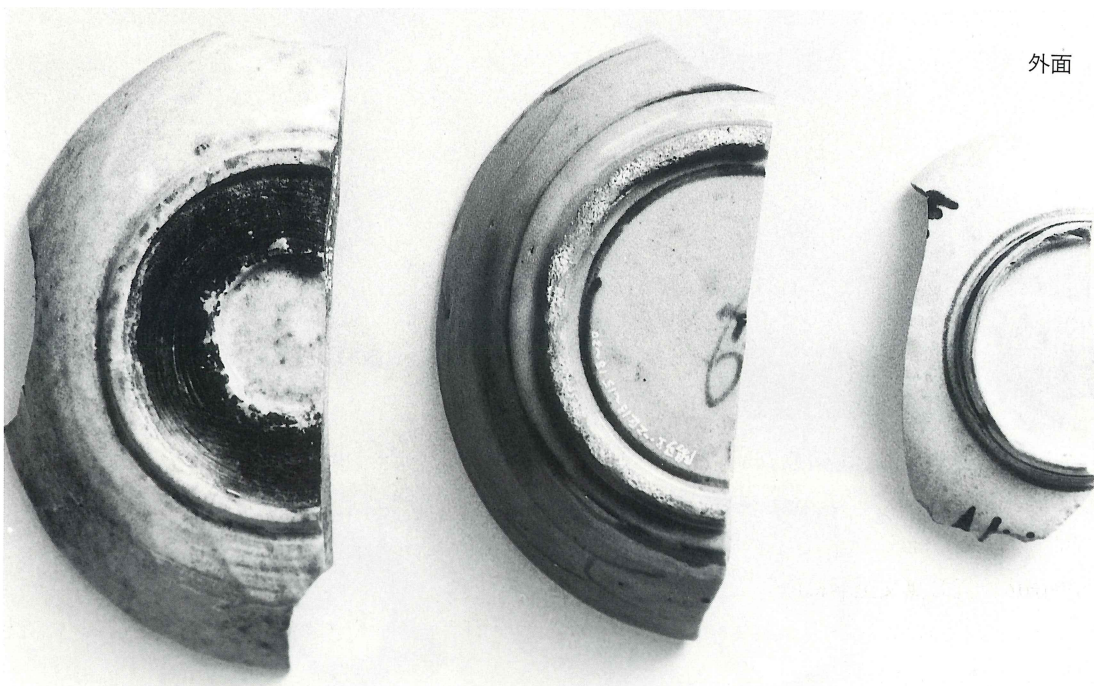
63. 近世石組み(トイレ)遺構(東壁)



64. 近世染付磁器碗



内面



外面

65. 近世染付磁器皿



66. 陽弓遺跡東端部付近
(左上方石組・トイレ遺構)